第1回ホワイトハート大賞［エンタテインメント小説部門］佳作

崔風華伝

SAI FU KA DEN

長谷川朋呼



white heart

崔風華伝

長谷川朋呼

white heart

講談社X文庫

崔風華伝

長谷川朋呼



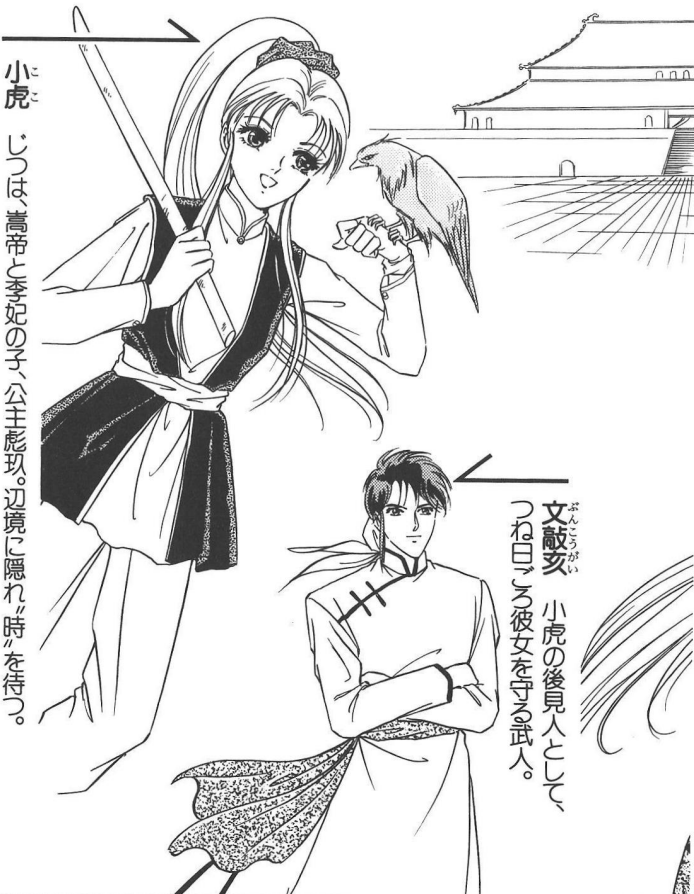
講談社X文庫

目次

起の章　天をよぎる雨……9
承の章　別れを見る月……70
転の章　風砂を噛む虎……118
結の章　ゆめ辿るゆめ……178
あとがき……226

崔風華伝の人々


嵩帝竜基　崔朝五代皇帝。
李妃を寵愛するあまり、
帝国を傾ける。
李貴妃巴陵
先帝の後宮で、竜基に
見初められ、第一の妃に。
董戒温　先々代の皇帝の曾孫。
嵩帝に信頼される人格者にして文官。



小虎　じつは、高帝と季妃の子、公主彪玖。辺境に隠れ〝時〟を待つ。

文敲亥　小虎の後見人として、つね日ごろ彼女を守る武人。

イラストレーション／道下有希子（みちしたゆきこ）

崔風華伝（さいふうかでん）

消えてゆく軌跡がある。
聞いたことのない伝承がある。
誰(だれ)が文字にしたわけでも、
誰が覚えていたわけでもない国がある。

崔(さい)とは、そんな国であった。

起の章　天をよぎる雨

壱

風の強い日であった。

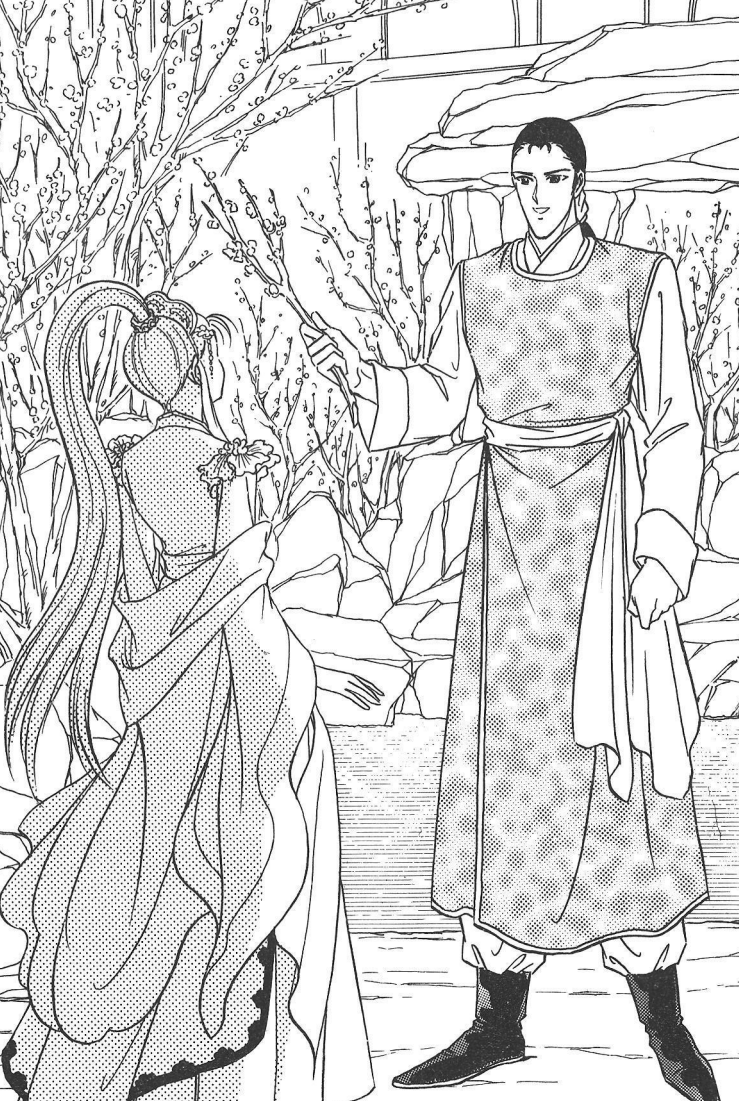
巴陵は侍女のひとりと桃園のうちを歩いていた。それは後宮よりわずかにはなれた砂地にあった。

蕾はひらきかけ、あちこちに紅の燈が灯ったように灼やいている。巴陵は、咲きほこるときよりも、むしろいまほどのころを好んだ。

暦では立春を数えたとはいえ、いまだ寒気は地から這いのぼる。素足に沓を踏んだだけの巴陵はその冷風に痺れるようだったが、つらくはなかった。後宮の澱んだ気とくらべれば安堵すらできた。

しかし侍女はそうは感じなかったようで、先ほどからしきりと巴陵をうながしていた。

「李美人さま、お風邪を召します。はよう宮にお戻りになられませ」
巴陵は承知したようなしないような曖昧なことを口ごもって、なおも数本の桃木をすぎた。きもちよく伸び曲がった枝を目にした。
「李美人さま」
侍女は哀願する調子で巴陵をよんだ。巴陵は答えず、ほころびかけた桃花のまばらについた枝を眺めていた。
「李美人さま。お寒うございます。お戻りになられませ」
それが多少うるさくなったのと、枝を手折りたいのを諦めなければならなかったので、巴陵はようやく木から半身をそむけた。
そのときであった。
巴陵とその侍女はついぞ気づきもしなかったが、数間ほどはなれたところに男が立っていた。その男がいったのである。
「その枝が、欲しいか」
巴陵はふりむいた。そして男の姿をみとめると、不審に感じるより先にうなずいた。
男は無造作に歩いてくると、また無造作に枝を手折った。無造作ではあったが無礼ではなかった。しぐさそのものには品があり、容貌もそのようであった。
さしだされた枝を、しかし巴陵はうけとらなかった。男は首をかしげた。



「欲しいのではなかったか」
巴陵はいった。
「お咎めをうけてしまいます。すべての桃木は帝のもの、わたくしごときが賜ってよいものではございませぬ」
男は目を細めた。笑んだように見えた。
「ならばなぜ、うなずいた」
この男は誰だろうと、巴陵は案じながら、それでもいった。
「欲しいかと問われて、ただありのまま答えただけにございます。まさか真実、お手折りになるとはつゆ知らず」
いまははっきりと男は笑っていた。枝をふたたびさしだした。
「その咎はわたしがうけよう。そなたはなにも案じずにいるがよい」
巴陵は躊躇ったすえ、それを手にした。そして頭をたれた。さしていた紫水晶の釧がゆれた。
「そなたの名を明かせ」
そのとき初めて、巴陵は怪訝な目を男に向けた。男は苦笑した。
「名を知らざれば、かわりに咎をうけようがあるまい」
巴陵はそれでもやはり不安に感じた。けれども男の品位に信頼をおくことにして、名を告

げた。
「覚えおく」
男はそれだけいうと、きたときと同じように無造作に遠ざかった。
巴陵もまた同じほどに男に背を向けた。
そうして後宮へ戻った。

巴陵は洛陽で生まれた。父は李氏、母はその遠縁にあたる家の者である。
李氏は古くから洛陽に根ざす学者の家格であり、父もまた学者であった。母は、顔だちもからだつきも南の血をひいているのがあきらかであったが、ただ色白で、その点はさらにきわだって巴陵にうけつがれた。
巴陵の容姿はとびぬけてうつくしいというわけではなかったが、品のいい、やさしげな面をしていた。目は大きく、深く闇色でなぜか人にやすらぎを与える。そこが魅力といえないこともない。
十五のとき、父と面識のあった一官吏により推挙され、光厳帝の後宮に入った。美人としてであった。
後宮においての階級からすれば、美人は決して高位ではない。皇后からはじまり、貴妃、徳妃、淑妃、賢妃の四妃があり、昭儀、昭容、昭媛、修儀、修容、修媛、充儀、充容、

充媛の九嬪があり、婕妤、美人、才人がそれぞれ九人ずつ存在する。さらには宝林、御女、采女が二十七人ずつ、そのほか、あまたの女官がいる。このうち帝の寵をえるのはわずかにひとりかふたり、多くても十を超すことはなかなかあるまいと思われる。

寵はそのまま栄華であった。欲望を果てしなくかなえるちからであった。

ために後宮にはあらゆる術数が黒く渦をなしている。濁り、瘴気が這う。

女たちはみな堕ちた。なにごとも信ずることができぬ、嫉妬の淵に堕ちた。

ただ、ひとり巴陵はそうした渦中をことごとく忌んだ。汚れた奔流にのみこまれるのをおそれた。贅は不要であったし、豪奢のうちにすごしたいとも感じなかった。漂うようにたどりついたところが後宮であっただけである。

巴陵はそのようにふるまったし、また低位であったので、敵はなかった。むしろ巴陵の、人好きのする質がいく人かの朋をよんだ。

まずは波風のないくらしであった。

桃樹の枝を、巴陵は卓子に飾った。それを目にするたび、造作もなくそれを手折った男の素姓を考えずにはおられなかった。

桃園のうちに踏み入ることをゆるされているのは後宮の女たちと皇帝の血族、それにわずかばかりの官吏である。その官吏もそうとうな高位に昇りつめた者でなければならない。

おそらくかの男は皇帝の侍従かなにかであろうと巴陵には思われた。若年ではあったが理知の閃きのようなものが感じられたからである。ことによると、その生まれは洛陽の名家の子息であるかもしれないとも察せられた。

巴陵の朋であり、位を同じくする吉楽は卓子に影を落とす枝を見て驚愕の面を上げた。

「どうなさったの、この桃は」

巴陵はかくのごとしと吉楽にことの経緯を教えた。吉楽はその小さな唇をふるわせてふたたび枝に目をやった。そして、ためいきをひとつした。

「きっと公子さまのどなたかでしょう」

吉楽はいった。

「お気のやさしい方ばかりでいらっしゃるというし。うらやましいこと、わたくしもお顔を拝見しとうございましたわ」

あらぬ怨嗟を買わぬように、巴陵は吉楽に口止めをしたが、むだであろうことはよくわかっていた。とりたてて娯楽もなく、封じられた空間である後宮のうちでは、風評は驚嘆すべきはやさで伝わってゆく。

男は公子ではないかと、巴陵も考えないわけではなかった。宮廷には七人の公子、五人の公主が数えられる。いずれも賢く容姿のよいことが聞こえていた。

もし男が公子であったなら、巴陵の態度は罰せられてもおかしくないほどぞんざいなもの

であったといわなければならない。口調こそ礼にかなってはいたが、叩頭礼もせず、辞儀すらしなかったのである。

男はこれをゆるしたばかりでなく笑うゆとりさえあった。そう考えると、なるほどその闊達さは皇孫にふさわしいと巴陵には思われた。

なににしろ、もう姿を見かけることもないであろう男の残像は刻々と薄れて、いずれ巴陵の心のうちから消えてしまうのはまちがいなかった。

数月をへて初夏がやってきた。このほど、巴陵は父を亡くした。

母は巴陵がものごころついたときにすでに鬼籍のひとであった。父丹瑛は労多くして巴陵をそだて、娘を後宮にやってからは静寂のうちに学をなしていた。生涯、激昂することなく、怨みも怨まれもしない人格者であった。

その父を亡くし、巴陵は天涯孤独となりはてたのであった。父母とも肉親の縁薄く、いまや繋がりのある血族はまったくないからである。後見の存在しない後宮の女ほど惨めなものはなかった。

巴陵は市井に下ることもできず、もはや寵を賜る奇跡にはとうてい手のとどかない低位にとどまるほかない。端麗ではあるが後宮においてはそれも価値のあるものではなく、巴陵はゆくすえに憂慮が絶えなかった。

そんなおり、皇帝が病褥についたという噂がひろまった。その子細は後宮も知るところとなり、女たちの口の端にのぼった。皇帝は酒宴の席でとつじょとして昏倒し、以来意識も定かでないという。からだのいたるところに浮腫が出、黒ずみ、名医と評判の楊忠桓も手のほどこしようがないありさまであると、まことしやかに風評は流れた。

後宮は連日さざめいて、それぞれがそれぞれを案じる言葉がそこかしこから聞こえた。もし皇帝が薨じ、新帝が立つことになれば、それにともなって新たな後宮がつくられる。女たちもいまと同じだけ募る。つまりは現皇帝の後宮は用がなくなり、女たちもまた宮から出ることを余儀なくされるのである。寵のあった者は尼になるなり死に殉ずるなりするが、そのほかの多くは市井に下るか、新帝の後宮に召し上げられた。

巴陵は地がゆるぐような不安を感じた。またしても後宮に召し上げられるのを望んではいなかったが、市井に下るのも耐えうるかどうかわからなかった。ものを知らないまま後宮に入り、隔絶された空間で四年の歳月をすごしてしまったのである。年若い女が、ひとり生活していくことができるとしたら、それは娼妓に身を堕とすよりほかになかった。

皇帝の病状は、悪化したとか小康を得たとか日ごとに伝えられたが、女たちが嘆き喚くのに疲れはてたころ、正式に光厳帝危篤の報が発布された。

光厳帝は諱を竜祥といい、先の皇帝峻帝の第一子であった。母は美貌で知られた武妃である。竜祥は幼少より英邁で、学問を好み、また武芸もよくした。ことに剣術は巧みで、十

のとき師の剣を三本に二本は叩き落としたという逸話が残っている。

武妃は峻帝の偏愛を浴びるようにうけて竜祥を産み、それからまもなくして世を去った。峻帝は七日で別人のように痩せ衰えたという。母譲りの面輪で賢くもあった竜祥は峻帝の庇護のもとで太子となり、二十五で光厳帝を号した。その治世はおおむね平らかで、夷狄の襲来はほとんどなかった。

泰平は皇帝に食への執着をよんだ。皇帝は食膳をいくら豪奢にしても飽きたらず、山海を狩ってえた珍味は日にくるま三十ほども宮にとどけられ、万金を費やした。それは倦むことなく十二年のあいだつづけられた。

金であふれんばかりであったかつての国庫は枯渇したが、しかしそれを知る者はごくわずかであった。

仁君光厳帝はその治世のあまりに泰平なるがゆえに、帝国を傾かせ、ついには己がいのちさえも縮めてしまったのである。いまや崔帝国はあやうい均衡をもってなりたっていた。

巴陵はそうしたことを知る由もなかったが、吉楽や、才人である廉青、那般などと、調度を運搬のたやすい宝石とかえたりして、いつ市井に放り出されてもよいようにした。宮をゆきかう女たちはそろって鬱をまとい、うつくしく刷いた眉をよせていた。けれどもそのかわりに、平生よりも艶やかなよそおいを凝らしていた。

女たちの誰もが、庶民となって贅に別れを告げるよりも、新帝に目をかけてもらい、ふた

たび後宮に召し上げられることを欲しているのであった。

まわりがしきりと郷里へ使いをだしているなかで、巴陵はなすべきこともうあまりなく、ただ鋤や硯や、実家のものである壺であるとか、多少値のはる錦であるとか、そういった手もとに残ったわずかなものを眺めてすごしていた。

果たして生きてゆけるのであろうかと、吾がゆくすえに小さな灯をかかげて目をやれば、そこにはなにがあるともわからぬ深淵があった。少しだけ歩をすすめれば、先の先まで見えそうでもあったし、断崖から墜落しそうでもあった。

つい先日とはうってかわって、いまは十日たっても二十日たっても皇帝に関する噂はなにも聞こえなかった。これを好転の兆しととる者もいたし、その反対だとする者もいた。

巴陵は後者であった。宮から遠目に見る皇帝の居宮は、まぶしい光を湛えた蒼穹の下にあってもなお沈鬱に感じられた。

事実、巴陵は正しかった。このときすでに光厳帝は崩じていたのである。けれどもその報が布されたのはそれから五日ののちであった。

葬儀は驚くほど簡素であった。皇帝の死が、すべての官吏に国庫の窮乏を知らしめたのである。王皇后は死に殉じ、ともに葬られることとなった。数人の寵妃たちはみな尼になった。

新帝には先の太子である竜基が擁立された。号して嵩帝である。竜基は光厳帝の第三子で、ほかの公子たちより群をぬいて明晰であると聞こえていた。

竜基には崔帝国をふたたび興さなければならぬ責務があった。それは誰が見ても困難を極めるものでしかなかった。

いまやいずれの臣もゆらぎかけた礎から慌ただしく降りようとしているのである。そしてそのなかには、崔の跡を狙う武人政人も多く存在するはずであった。

弐に

喪が明けたのは十二月も下旬のことであった。

厳寒はゆるんでいたが、暁晩はまだ痛いほどに冷えた。ことに宮は石で畳まれたところが多いので、さらにぬくもりが逃げてゆくような感があった。

新帝嵩皇帝竜基は、財政を立て直すための策を矢継ぎ早に降らせた。それは官吏の登用の削減であったり、奢を禁ずる令であったりした。

国庫を充たすのなら重税を課すのがいちばん手間のかからない方法であったが、嵩帝は百姓の崇拝をつかむのが興国においてもっとも重要であることを知っていた。まさに賢帝の評を冠されるにたる考慮であった。

経費を減少させねばならぬという嵩帝の意は後宮にもおよんだ。光厳帝の後宮には散解の詔が出た。これはしきたりにしたがったものであったが、新たな後宮にはやはり規模縮小の令が採り入れられた。

曰く、四妃六嬪のみを与え、女官は九十名までに減ぜよとのことである。この令をもって、嵩帝の後宮は古今に例を見ないほどのつつましさとなった。

嵩帝竜基は、太子のころに王氏を娶ったが、この王氏は生来の病弱さゆえかわずか六か月

にして亡くなった。そののちに韋氏の呂蓬という女が妃となり今日にいたっている。

韋呂蓬は杏妃の名で呼ばれていた。杏子を好んだためである。またその容貌のうつくしいことも世に知られていた。

後宮をつくるにあたって、呂蓬は徳妃の位についた。二十八歳であった。竜基に嫁いだのは二十二のときであるから、じつに六年の月日を竜基のもとですごしたのである。それであれば、皇后に叙せられても万人がみとめるところであったが、嵩帝はそれをゆるさなかった。

杏妃は名門の深窓にそだったためか、おそろしく驕慢であった。竜基にはいやしいほどへりくだってみせたが、いったん気を害すると、その玉のような声で鬼女のごとく喚き罵った。いらだちは侍女たちのこうむるところとなり、杖死に処せられた者さえあった。

嵩帝は、そのような妃を後宮の頂点におくことをあやぶんだのである。己が徳妃の座に坐らされたことを知った杏妃は、狂ったように嘆き怒ったという。

後宮のほかの位は多く新しい女たちで占められたが、そのなかで三人が光厳帝の後宮より召されていた。

ひとりは昭媛であった宗林薔である。林薔は昭儀に叙せられた。いまひとりは美人であった江吉楽で、こちらは昭媛の座を賜った。

そしてひとりは貴妃となった。嵩帝が推したといわれている。先帝のものであった女が、

新帝のものである女をぬいて後宮の頂点へと昇りつめたのである。このことは宮廷の耳目を大いに沸かせた。

嵩帝は己が治世の元号を竜宝と定める儀で、崔帝国の栄華をふたたび築くため粉骨砕身するのを惜しまぬと、いならぶ百官に宜べた。

眼光炯々として宝祚を戴き
吾　皇帝に始祖の竜を見たり

そう詠われるほどの厳かさであった。

この儀ののち十日ほどして、貴妃を冊する儀が追っておこなわれた。贅に溺れるようなものはいっさいなく、参じた官吏もごく少数であった。また、拝謁にあずかるはずの妃の眷属はひとりも見えなかった。

そのようなまれに見る楚々とした儀をして、嵩帝は己の推挙する女を妃になさしめたのである。

竜宝元年一月、李貴妃巴陵が立つ。李貴妃は二十歳であった。

後宮散解の詔が降り、女たちが三々五々宮をでてゆくのを、巴陵は皇帝の居宮の片すみにある館から見ていた。

いまにしても信じられぬ気がしていた。信じてはならぬ気もした。そしてそのほうが多く

巴陵を襲った。

手もとのものを調え、宮をでてゆく支度をしていたのは巴陵もほかの女たちと同じであった。しかし巴陵はでてゆかずにすんだ。それはすべて嵩帝の意に起因していた。

散解の詔とともに下ったのは、林薔を昭儀とし、吉楽を昭媛とし、巴陵を貴妃とする令であった。

瞬時にして嫉妬と羨望の立ちこめた宮で、巴陵は吾が耳を疑った。同姓同名のひとがいるのではと疑った。けれどもそれから数人の侍女が遣わされてきたのは巴陵のところであったし、いままでのものとは違って格段に質のよい布が贈られてきたのも巴陵のところであった。

つぎには、宮から李貴妃さまのお館におうつりになっていただきますようにと告げる女官がきて、巴陵はそこへうつらざるをえなかった。

館のどのへやもかつての自室よりもはるかにひろく、またはるかに意匠が凝らされていた。侍女は十数名も数えられた。目にする布という布は、どんな些細なところに使われているものでも錦であった。細かな彫刻が施された燭台が数えきれぬほどあり、瑞兆を表す模様のえがかれた小さな瓶がどこへ目をやっても見られた。

その、にわかに与えられた恩寵が果たして己のなにによってえたものか、巴陵はどれだけ考えをめぐらせても見当がつかなかった。皇帝に買われるほどの容貌ではないし、巴陵についての風評といったことはこの四年のあいだまったく出ていないはずであった。巴陵を推

挙した官吏太清亨は、巴陵を妃にできるほどのちからはない。

巴陵にとってわからないことは、すなわち恐怖であった。目に見えぬなにか、耳にすることの不可能ななにかに流されてゆくのは鳥肌だつほど怖かった。館づきの侍女たちがめったなことでは口をひらかないのも巴陵にはたまらぬことであった。

以前より格段に高くなった孤独の濃度を紛らわすために、巴陵はいちにちのことごとくを考えこむのに費やすようになった。すると己がまさしく後宮に属するものであることに気づかないわけにはいかなくなった。

美人であったとき、皇帝は天上びとに感じられた。ほしいままにできぬことはなにもない神であった。己と皇帝のあいだにはなにもなかった。ところが妃となると、皇帝は決して手のとどかぬ存在ではなく、むしろ帝国じゅうの誰よりも近い距離にいるはずであった。妃と皇帝というふたつがはさむものは、密になるか疎になるかはわからねど、人間的なものであることはまちがいなかった。

突然そのようなところに拉されて、巴陵が戸惑わずにいられるわけがなく、思考の袋小路に追いつめられて数日をへた。そして、嵩帝に拝謁する夜がやってきた。

巴陵は浴室で湯浴みをし、侍女に化粧をさせた。

眉は濃淡をつけきわだつように、脂粉はごく薄く、口紅は淡く、仕上げに眉間へ、薄い碧で小さな点を四つ、四角をなすようにおいた。できるならよりうつくしい己の姿を見せた

かった。

髪は高く結い、青玉と金の釧をさし、華やかすぎない衣をまとった。沓は真珠を嵌めたものを履くことにした。

それから何人もの侍女につきそわれて、回廊に足を踏みだした。すでに陽は落ちていた。闇に篝火が朱く映える石畳をすぎ、いくつもの館をすぎたころ、白い石が荘厳なばかりに畳まれた台に出た。その台のはるか奥に、無数の燭台と蠟燭が炎をゆらしながら幻のように見てとれた。

侍女たちはみなそろって老女ばかりであった。老女たちは台を踏んですぐさま頭を低くたれた。そしてそのまま台の上をすすんだ。

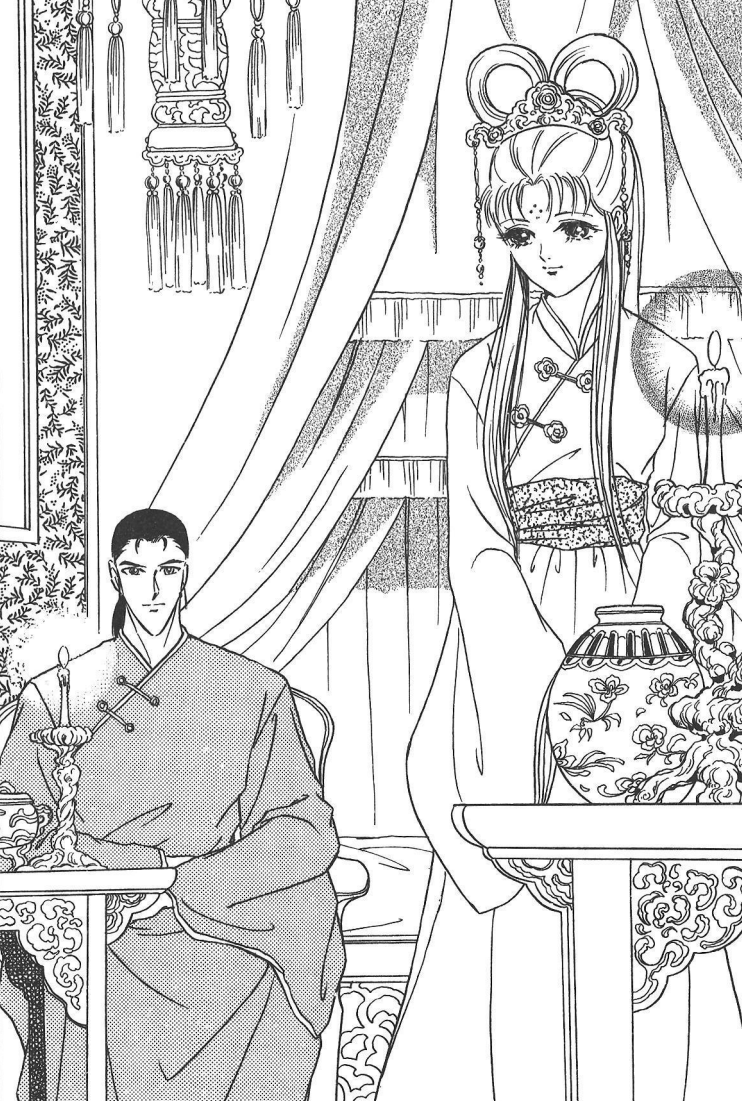
あまり高くない段がいくばくか下に降りているところで老女たちは不意にぴたりと止まり、左右にわかれ、そのうちのひとりが無機質な声で巴陵にいった。

「このままお足をお運びくださいませ」

巴陵はいわれたとおりに段を降り、またしても白い石がつづく空間の真ん中を歩いていった。ずっしりと真珠で重い沓を履いた白い足がふるえた。

蠟燭が顔をほのかに照らすほどになってようやく巴陵は目を上げた。そこにはひとり、皇帝が大きな金の椅子にもたれていた。

巴陵はあやうく叫びかけた。



深い蒼と銀によそおっている皇帝は、まぎれもなく桃木の枝を手折ったそのひとであった。

あのときよりもいくぶんやつれて、頬のあたりの輪郭が鋭くなってはいたが、品のある容貌は欠片もそこなわれてはいなかった。ただ、口もとをひきむすんでいて、それがいささか気難しげには見えた。

影のように皇帝のそばにひかえていた侍従が、巴陵に低頭し、てのひらで皇帝の隣の玉座を示した。巴陵はそこに浅く腰をかけた。ふるえはいつか指の先にまでおよんでいた。

そのうちに笛や琴の音が流れてきはじめた。見ると、少し目を離したあいだに、台の上には十数名の楽師たちがならんでそれぞれ手にしたものを奏していた。それはとぎれることのない、甘く、しかし厳粛な楽であった。

「余を覚えているか」

皇帝がいった。低く通る声律であった。

「覚えております」

「あの枝はいかがした」

「しばらくして枯れてしまいましたけれども、いまだ手もとにおいてございます」

巴陵は皇帝を見ていえなかった。見ればふるえが極まって崩れてしまいそうな気がした。

「あの桃園も余のものになった。汝が欲しければあれは汝に与える」

「わたくしはみなまで欲しいとは申しませぬ。ただ、ときおり足を踏み入れるおゆるしをい

ただければけっこうでございます」

たよりなげに、囁きほどの小さい音で巴陵はいったが、皇帝には聞きとれたようであった。そして桃園で見せた笑いをふたたび見せると、ふと目を巴陵の小さな白い手にあてた。その手は小刻みにふるえていた。

「汝は余がおそろしいか」

巴陵はだまって少し面を伏せた。すると皇帝はひとつ息を吐き、さらにひと呼吸おいて、巴陵の手に己の手をのせた。

「おそろしければ、そういうがいい」

「――少しおそろしいような気がいたします。けれどもそれは畏れ多いというものだと存じます」

皇帝の手はあたたかく、乾いていて、巴陵の凍えた感覚を溶かした。そこから安堵がひろがってゆくように感じた。ここ数日でひとらしいものに触れたのはこれが初めてのようで、たまらなく弱気になり、この先すがるものはこの手だけだという気がした。

ふたりは手でお互いの存在をたしかめながら、なにもいわずに、侍従が巴陵をうながすころまで半刻ほどもそうしていた。

巴陵はうながされるままゆるやかに手をほどくと、席を立ち、皇帝に礼をして石畳の上を帰っていった。

台をぬけると、もときた回廊へは戻らずに、巴陵はもっと奥のほうへと連れてゆかれた。そこは暗いがおちついたへやであった。

巴陵はしばらく椅子にからだをあずけていた。皇帝に対する畏怖がなにかほかの違うものに変化したのがわかった。しかしなんと表してよいものかはまだわからなかった。

巴陵は侍女にいって化粧をややおとし、香りのよい茶を飲んだ。そして寝衣にきがえさせられた。

侍女たちが退がったあと、巴陵はへやから見える碧の石で畳まれた台を眺めていた。先ほどは気がつかなかったが、闇空の中天に月が煌々と光っているのがうつくしかった。光は銀の薄衣のようにひらひらと降ってきていた。

冷気が額を曝すので、巴陵は小窓を閉め、御簾を下ろした。そのとき背後で衣ずれの音がした。毛足の長い敷物を踏む音もした。

「李妃」

皇帝であった。巴陵はよばれてふりむいた。皇帝は牀上に腰かけていた。

「妃には欲しいものはないか」

「ございませぬ」

「今宵のために、余はなにか妃に与えたい」

巴陵はしばらくだまってからいった。
「わたくしは陛下からなにひとついただこうと思いませぬ。ただ、おたずねしたいことがございます」
「申してみよ」
「なにゆえをもって、わたくしが妃の位を賜ったのでしょうか」
嵩帝竜基はまばたきほどのあいだだけ、はるかを見るまなざしをした。しかしそれはすぐに消えて、細い頬が笑った。
「なにゆえか余にもわからぬ。わからぬが、汝を妃としたかった。汝の、ものおじせぬところがいまひとたび見たかった」
嵩帝は巴陵の手をとった。巴陵はそれにひかれるまま牀へ近づいた。
「汝は余に叛かぬか」
巴陵は皇帝の目を見た。孤独であった。荒れてはおらず、むしろ理性があったが、それだけにいっそうあわれに見えた。
「いのちにかけましても、おちかい申し上げます」
皇帝の手は先ほどよりもよほど冷たかった。巴陵もまた同じであった。あの金の椅子の上でとは違うふるえが足もとから這い上がった。
寝台の薄い帳をわけ、ひんやりとした夜具に横たわると、へやのなかのすべてのものが急

速に遠ざかる気がした。

「余は汝を決して苦しめはせぬ。終生、汝だけを見ると約する」

巴陵は首をふった。

「そのようなことをおっしゃらないでくださいませ。わたくしは、陛下のそのおことばを忘れることができぬやもしれません」

「忘れずにいればよい」

「いけませぬ。数ならぬわたくしなどに、そのようにしあわせな幻を見せてくださってはいけませぬ」

竜基は手を巴陵の頬にあてた。冷たく、けれどもほのかにあたたかかった。巴陵の双眸はふたりをとりかこむ闇よりも濃く、黒かった。月のない夜に似ていた。

「余は、幻など見せはせぬ」

低い囁きが巴陵の耳もとへと落ちた。

巴陵は目を閉じた。へやが暗転した。

目覚めるとかすかな光が木戸から漏れていた。もはや夜明けであった。薄く墨色に染められた視界の中で、皇帝の姿だけが浮かび上がるように見えた。

よくよく眺めてみると、やはり以前よりもやつれたことが克明であった。

大任を支え、わかちあえぬ寂寥を支えていることがひとめでわかった。
竜基の、ほつれて額にかかった髪を、巴陵がしずかに指先で整えてやると、閉じていた瞼がわずかにひらいた。
「お起こししてしまいましたか」
「かまわぬ」
巴陵のなだらかなからだの輪郭と光るような肌の白さは天女のように見えた。伏せた睫の淡い影も、ゆるく弓のかたちをなす唇も、嵩帝には限りなくやすらかに感じられた。もう離れられぬという哀しく甘く狂ったような感情だけがふつふつと心のうちに湧いた。
「お召しものをおつけくださいませ。じきに侍女がやってまいりますれば」
寝具の上に皇帝の寝衣をさがす巴陵の髪に、嵩帝は手もとに落ちていた鈿を拾ってさした。
「――汝はなにを好むのか」
巴陵は小さく首をかしげた。おくれ毛がゆれる光に透けた。
「陛下のお好みになるものは、なんでも」
「それではつまらぬ。別に、汝だけが好むものがあろう」
「――桃が好きでございます。笛も、琴も好きでございます。碧のものと、蒼いものが好きでございます」

唄うようにいう巴陵に、嵩帝は目を細めた。
「ならば、今宵も楽を奏すように命じよう。碧の衣と、蒼の絹を与えよう」
「倹約を天下に布した陛下が、そんな贅をおゆるしになってはいけませぬ」
笑った巴陵に、竜基もまた口もとをほころばせた。
「ひとたびだけだ。これからしばらくは、櫛のひとつも与えてやれぬのだから」
奥の扉をひそやかに叩く音がした。侍女であった。嵩帝は寝衣を羽織ると巴陵の額に頬をよせた。
「今宵、また妃の面を見せよ」
「仰せのままにいたしまする」
竜基は牀を下りるとへやをでた。
ひとり、巴陵は寝台に残されながら、とうとう後宮のうちにとりこまれてしまった己を感じていた。
悔やもうとはしなかった。

参

李妃が正式に李貴妃となってから十日ほどすぎた。

嵩帝はいちにちも日を空けず李貴妃の館に足を運んだ。若い皇帝のそのようなふるまいは巷間の噂になった。それも倍ほどに尾ひれのついたものとして伝わっていった。

貴妃は杏妃などとくらぶべくもないほどうつくしいのだとか、少しでも手や足を動かすとそこから白い花弁が散りこぼれるのだとか、笑えば鳳凰がよってくるのだとか、そういった風評は誰ひとりとして知らない者はなかった。

けれども嵩帝は、徹底した倹約の令を降らせることと、それを実行にうつすことができる能力があることはひろくみとめられていたから、李貴妃が傾国の妖人だと見なされることはおおむねなかった。

不快なのはほかの後宮の女たちであった。ことに韋徳妃の嫉妬と怨嗟には凄まじいものがあった。もはや皇帝のおとずれの跡絶えた館で、李貴妃を呪い罵る叫びは、黒い稲妻のように見えるとさえいわれていた。

そういったことを宮女から漏れ聞いた皇帝は、李貴妃の館に厳重な警護をつけ、侍女も倍に増やした。韋徳妃の性質を誰よりもわかっていればこそであった。

「なにやらものものしい気がいたします。侍女はともかくとしても、警護を減らしていただくわけにはまいりませんでしょうか」

李貴妃は己の頭にその頭をもたせかけている竜基にいった。

「妃にはちからとなる眷属がおらぬのだから、警護くらい多くしてもまだたりぬ」

「なににたりないとおっしゃるのですか」

「汝のまわりを平らかにするためにだ」

李妃は呼吸をついた。

「また、そのようなおそろしいことを」

嵩帝竜基は困惑したような目で李妃を見た。

「妃は知らぬのだ。後宮がいかなるところであるか」

「陛下よりもよほど存じております」

「妃は美人であったときとはもはや違うのだ。妃を狙う者は十数といる」

李貴妃はてのひらで嵩帝の口を覆った。

「おやめくださいませ。もうおやめくださいませ。わたくしを怖がらせになるのは」

今度は嵩帝がためいきをついた。そして腕の中でこちらを見上げているしなやかな重みをさらに己のほうへひきよせた。

「余は汝に害をなす者は、なんびともゆるさぬ」

李貴妃はだまっていた。そしていった。
「わたくしにはなにごとも起こりませぬ。どうかご憂慮なさらずに」
「憂慮せずにはおれぬ」
牀の上で、皇帝はいつもそういった。憂慮するにたるだけの根拠があるからであった。
李貴妃は女たちの妬みや嫉みが手にとるようにわかっていた。李貴妃もまた女であるからであった。けれども己のうちにも、後宮に生じる黒い霧のようなものがあることを気づかされるのは苦しかった。

貴妃となると、館には拝謁しにくる者が絶えなかった。高潔そうな武人もいたし、狡猾そうな政人もいた。なにかしらひとつは献上品を携えていて、奢が戒められているおりであるから、格別目をひくものはなかったが、それでもそのうちに館のどのへやもいささか窮屈に感じられるようになった。
献上されるのは花枝が多かった。どこからか、李貴妃は花樹をことのほか好むという噂が流れているようであった。
ころは梅が盛りであったので、李貴妃の自室にはいくつも花瓶がおかれ、ひらいた梅が群れるように活けられた。ほとんどが白梅であった。これも、李貴妃さまは白がお好きだという噂によるものであると察せられた。

むせるほどの梅の香に食傷した李妃は、ある午後、数人の侍女をともなって館の外に出た。風は冷たいが、光はあふれるようであった。

館の正面の、薄桃と白の石で畳まれた台の中央には、円形をなす池が造られている。これは李貴妃と嵩帝の初見の日のようすからとって、桃樹池と呼ばれていた。

李妃はその桃樹池のほとりの石に腰をかけた。水面は細かくさざめきをなし、光をあちこちに投げかけ、まるで水晶が波よせ漂うがごとくであった。そこでしばし、侍女と巷の流行りものについて語らっていたとき、多数の沓が石畳をしのびやかに踏む音がした。

徳妃の杏妃呂蓬とその侍女たちであった。李妃は杏妃を見るのは初めてだったが、すぐにそのひとだとわかった。頬から首にかけてげっそりと痩せ、顔色がなかったが、それでもうつくしいと感じられた。ただ、それは凄みのある、刺々しいうつくしさであった。病的なまでの白さのなかで、くっきりとひかれた濃い紅が目立った。

「韋徳妃さまでございます」

侍女が李貴妃に耳うちした。李妃はうなずき、杏妃にふたたび目をあてた。杏妃たちはゆっくりと近づいてきて、李妃から数歩ほど離れたところでとまった。

「ご機嫌うるわしゅうございます」

先にいったのは、石から立ち上がった李妃であった。杏妃はみじろぎもしなかった。それをとりつくろうように、侍女のひとりが低頭した。



「李貴妃さまにはご挨拶をいただきまして、もったいのうございます」
「およし！」
鋭いものが飛んだ。声とはうけとれなかった。まるで小さな刃か、金属の破片でも飛んだような気がした。
杏妃は薄い唇をゆがめて李妃を見た。そしていった。
「下賤の生まれの女が、畏れ多くも陛下のお傍に侍りおって。あまつさえ、貴妃の位を掠めとるとはなにごとか！」
李妃はなにもいえなかった。こうなるであろうことはわかっていたし、こうなってももっともだという気があったが、それでも縛りつけられたようにだまっているしかできなかった。そのかわりに、平生から端近にいることが多い侍女がいった。
「失礼ながら、それはあまりなおっしゃりようでございます。李貴妃さまは都にながく居をおかまえになる名門家格のご出身――いたずらにそのような誹謗をおうけになってよいお方ではあらせられませぬ」
強く非難する目つきであった。口ぶりもまた烈しかった。徳妃は顎を上げ、李妃たちをねめまわして吐き捨てるようにいった。
「いやしい者らは、なれあうのが得手と見ゆる。己の分をわきまえよ」
「徳妃さまこそ御位をわきまえるべきではありませぬか。こちらは崔帝国の貴妃さまでござ

いますぞ。後宮におきましては、どちらのお方がより尊くあらせられるか、ご存じないわけではありますまい」

凛といいはなった侍女を、杏妃呂蓬は憎々しげに睨んだ。柳眉がいびつに曲がって、大きな目が鋭利に細められた。

杏妃の近くにいた侍女が、なにごとかを杏妃の耳もとでいった。ここは退いたがよろしいというようなことであった。李妃たちもまた退くべきときであろうと感じて、いくらかうしろに歩を拾った。

杏妃は不意に踵をかえすと、侍女たちにはかまわずに宮の回廊へと戻っていった。荒んだ足どりであった。そのせいで石を叩くような音がしていた。そして侍女たちが己のあるじのあとを慌てて追ってゆくのが見えた。

「貴妃さま、お気になさいませんように。徳妃さまは、李貴妃さまに皇帝陛下の寵があつくていらっしゃられるので、お妬みになっておられるのです」

先ほどの侍女がいった。李妃はようううなずいた。ひどくだるかった。杏妃の投げつけてきた呪詛のような礫が李妃のいたるところに痣をつくっていた。それは李妃をゆるやかに喰いつぶしてゆくかもしれぬ痣であった。

そうならないためには杏妃を憎むほかなかった。

そのできごとはときをへずして宮廷にひろまった。いつもは後宮の醜聞とはおよそ無関係なところにいるような官吏でさえ詳細を知るようになっていた。それほどのことが、嵩帝竜基の耳に入らないわけがなかった。

杏妃との諍いがあってから二日ほどした夜、李妃が翡翠のついた燭台に蠟燭を灯していると、わずかに戸の軋む音がして、竜基がやってきた。双眸がおそろしいほど冷たかった。

「怖い目をしておいでになる」

李妃はいった。竜基は蠟燭によって朱く黒くその姿をへやに映しながら李貴妃の腕をとった。

「徳妃が汝を中傷したと聞いた」

「中傷などと、おおげさなものではございませぬ」

竜基は首をふった。烈しい怒りのゆらめきが見えるようであった。

「あれは邪な女だ」

「そのようなことは、――」

「余はわかっている。あれは、口汚くほかを罵ってもなんの呵責も感じぬ」

李妃は嵩帝の頭を頬によせた。

「徳妃さまは、陛下を慕っていらっしゃる」

「余が崔国皇帝であるからであろう」

だまって李貴妃は嵩帝によりそっていた。降りた沈黙のうちで、蠟燭の芯の焦げる鈍い音だけがかすかにした。

「みな、余に竜基を見ようとはせぬ。嵩帝だけを見る」

その囁きのどこからどこまでもが孤独だった。すがりついてくる孤独であった。李妃は泣きたかった。叫びだしたかった。

百官をしたがえ、あまたの端麗な女たちをかかえてなお埋められぬ空洞がある。玉座は竜基にとって凍てつくほど冷たいのであって、謀叛をたくらむ臣たちの目に映るようにそれは惹かれてやまぬものとはまったく違うのであった。

「わたくしはどこへもゆきませぬ。皇帝陛下ではなく、ただここにこうしておられるあなたさまを離れて、どこへもゆきませぬ」

李妃は闇に溶け入るような声でいったが、それは叫びにほかならなかった。己の胸に触れている重みがよび起こす叫びであった。

「なにびとがあなたさまに叛こうとも、わたくしはあなたさまを離れませぬ」

竜基は強く李妃の手を瞼に押しあてると、呻くようにいった。

「余は汝を失くしては生きてゆけぬ」

李妃は空いた片方の手で、竜基の背をなでた。なにかに死にもの狂いで耐えているような感があった。

「おひとりで、お苦しみにならないでくださいませ。李妃がおつき申し上げていることをお忘れにならないで」

竜基の肩が小さくふるえていた。泣いているのかもしれなかった。

李妃は、いいつくすことのできぬ暴風のようなものが己のうちに生じたのがわかった。せつなかった。

嵩帝は以前にもまして李妃に傾いていった。夕刻、政務が終わると、その足で李妃の館をおとずれて暁を迎えた。

夜を語りづめでとおすこともあったし、ただよりそって眠るだけのこともあった。むしろそのほうが多かった。

けれども嵩帝の目が後宮のほかの女に向けられることは決してなかった。いまや嵩帝にとって後宮は不要の存在であり、いるのは李妃ただひとりだけであった。

李妃を推挙した官吏太清亨は高官に叙せられたが、李妃への皇帝の寵によって栄華がもたらされたのは太清亨のみであった。なぜならば、李妃と関連のある者はそのひとしかいなかったからである。

その点についていえば、宮廷での李妃は非常にあぶなげなところにいた。本来、李妃の安全を図って壁となるべき肉親縁者がまったくないのである。数十いる侍女たちはみな李貴妃

のひととなりに好意を覚えてはいたが、それ以外に李妃を護るちからは嵩帝がおよぼすしかなかった。そして嵩帝といえど、一分の隙もなく李妃を危険から守りおおすことが可能なはずはなかった。

徳妃はここしばらくなりをひそめていたが、皇帝にしてみれば安堵はできなかった。徳妃だけでなく、後宮の女は誰もが李妃に対して怒りと嫉妬を秘めているのである。いつそれが李妃を襲うかと考えると、竜基は血の気がひくようなおそろしさを感じた。

崔帝国の行政は、国庫こそいまだに充ちてはいなかったが、わずか三月であらゆる面において先帝のころより改善されていた。嵩帝を讃える謡が市井のあいだに流行り、嵩帝を誤らせることのない李貴妃を讃える謡が流行った。

侍女たちは李妃を見るたび、その謡を唱してみせた。

崔の姚人　白梅のようなひと
崔の姚人　白蓮のようなひと
そのお目は黒玉　そのお口は紅玉
たぐいまれに賢しく　貴なひと
皇帝は天女をえたとばかりに
姚人をかたときもお離しにならない

李妃はそれをみとめるでもなく、咎めるでもなかった。ただそっと笑うだけであった。

しだいに甘く初春の匂いを帯びてきた夜、己にすべてをあずけきって眠る竜基を見ていると、侍女の唄う謡とともに徳妃の姿が目に浮かんだ。うつくしさを覆ってあまりある嫉妬のかげろうをまだ覚えていた。

徳妃の形相はまた後宮のように感じられた。李妃をのぞくすべての女の形相であった。

李妃はそれが怖くはなかった。

怖くはなかったがあわれであった。己も、己を敵とする女たちもあわれであった。

肆

ほどなくして崔は牡丹のころとなった。例年に比べ早いようであった。

李妃の館の梅は牡丹にとってかわられた。これは白いものも紅いものも同じくらい献上された。宮にもそこここに牡丹は見られたが、それらに見劣りのしない株が多かった。そういった立派な株は市井でも高価であったが、嵩帝もこれだけにかぎっては倹約を強いることをしなかった。

皇帝はこのおりになると、洛陽の西のはずれの玉寿寺へ行幸することになっていた。玉寿寺は緋牡丹白牡丹の繚乱するありさまで天下に知られている。ために花の見ごろの二十日のあいだはたいへんに混雑するのであるが、皇帝が行幸するいちにちだけは厳しくほかの立ち入りを禁じていた。

行幸にくわえられたのは百官のうちでもきわだって高位の七官と警護の兵百余人、そして李貴妃である。このたび嵩帝に随することをゆるされた後宮の女は李妃ただひとりであった。

牡丹行幸と呼ばれる玉寿寺参りには、歴代のどの皇帝も四妃を供にした。嵩帝がそれを一妃だけに減じたのは、費用を最小に抑えるためという名目がついていたが、じつのところは

嵩帝が李妃にしか寵を与えていないからであるということを誰もがわかっていた。

李妃にはこの行幸のためにと、太清亭から錦が贈られた。濃淡のある灰桃に銀と白で瑞雲のかたちが織りこまれたものであった。そのほかの官吏からも数えきれぬほどの品がとどいた。どれも行幸のことを踏まえてのもので、脂粉や口紅、眉墨などがほとんどであった。

けれども李妃は化粧を凝らすのがあまり好きではなかったので、献じられた化粧品はいくつかをのぞいてすべて侍女たちに下賜した。こうしたところもまた嵩帝には好ましく感じられた。

杏妃は李妃とは反対に、己をよりうつくしく見せることにいつも余念がなかった。白昼でも濃く白粉をはたき、濃く眉をひき、濃く紅で唇を塗りこめた。杏妃の顔だちはひとつひとつが目立つ感じであるから、よほど化粧を濃くしても映えたが、それはどこかつくりものめいて見えた。

玉寿寺参観が七日ののちに迫ったある朝、李妃の館を江吉楽がたずねてきた。

「貴妃さまに拝謁したく存じ申し上げまして、江昭媛吉楽さまおいであそばしました」

李妃づきの侍女は吉楽とその供の者を李妃のへやに通した。吉楽たちも、今までにこの館をおとずれた文官武官の例にもれず、なにか献上品を手にしていた。

李妃は吉楽を迎えると椅子をすすめ、座るようにいった。

「貴妃さまにおかれましては、そのようなおことばをいただきまして、ありがたく存じます」

吉楽は低く頭をたれていった。かつての朋はそこに見いだせなかった。李妃の傍に腰かけているのは、皇帝の寵をあつめている妃にひれ伏すばかりの女であった。

「わたくしは、以前もいまもかわりませぬ。どうぞお顔をお上げになってくださいませ」

「いいえ。畏れ多くも貴妃さまの御前で、ぞんざいなふるまいをいたすことはできませぬ。以前のことにしましても、貴妃さまにおなりになるおひとと、近しく口をきく機会にめぐまれたのを身にあまるしあわせとこそすれ、いまでも貴妃さまに近くあろうとするような考えをするはずがございませぬ」

へりくだるそのようすに、李妃ははるかな隔たりを感じた。嵩帝が李妃を慕うことによって生じた隔たりであった。

吉楽はちらと供に目をやると、さらに頭を低めていった。

「このたびは牡丹行幸に付随なさいますこと、おめでとう存じます。つきましてはそのお祝いに、わたくしの郷里の茶を献じたくうかがいました」

供の者が金で飾られた小函を押しいただいて李妃の足もとに進んだ。

「郷里は茶で名を知られたところ。貴妃さまのお気に召すようなものかはわかりませぬが、どうかお納めくださいませ」

「おこころ遣い、うれしく存じます」

李妃はいって小函を手にとると、髪にさしていた釵を抜き、吉楽に渡した。

「では、お礼としましてこれを」
吉楽は目を見はった。
「そのような高価なものをいただくわけにはまいりませぬ」
「わたくしのせめてもの心づくしでございます。おうけとりになってくださいませ」
李妃が重ねていい、鈿を手ににぎらせると、吉楽は椅子から滑り落ちるようにして下り、床に頭をつけた。
「もったいのうございます。貴妃さまにこのような、——もったいのうございます」
「お気になさらずに。どうぞお楽になさって、以前のようにわたくしを、巴陵とおよびになっていただきたく存じます」
吉楽は首をただ横にふるばかりでものをいわなかった。そしてひたすら叩頭礼をした。恐縮しているようにも見えたが、むしろ卑屈に感じられた。
李妃はわずかに眉をひそめて吉楽に立つようながした。
「昼はすることなく、暇をもてあましているところでございます。よろしければ、これからもお気の向いたときにおたずねくださいませ」
「ありがたいおことばでございます。わたくしごときの者でもけっこうだとおっしゃってくださいますなら、いついかなるときでも参上申し上げたく存じます」
ふと李妃は吉楽の目をのぞいてみて不審の念にかられた。まろやかな頬も、唇も、指先

までもが遠慮がちの笑いを含んでいるのにもかかわらず、その両の目だけがひどく暗かった。

吉楽は李妃に生じた翳りには気づかず館を辞した。李妃は、吉楽の目の、底冷えのするような暗さがなんであるかわからなかった。

ことによると、見かけだけでは覆い隠せなかった吉楽の劣悪な感情を、かいま見てしまったのかもしれなかった。

吉楽の献じた茶は逸品であった。香りも風味もいまだかつて触れたことのないもので、口にするとのびやかな気になった。

小函にはたいした量が入っていなかったので、惜しんでわずかずつ、昼だけ食膳に添えた。それでも五日ほどして底をついた。李妃は侍女に命じて、吉楽の郷里というところから同じものを求めさせようかとも考えたが、倹約を旨とする嵩帝の妃たる己がそのようなことをしては、嵩帝の沽券にかかわるとして諦めた。

その夜、いつものように嵩帝が館に足を運んできた。李妃は灯りをやわらかく落としたへやで嵩帝を待っていた。

さやかな衣ずれの音が聞こえてまもなく、嵩帝竜基が扉をあけた。宮廷ではこのうえもなく剣呑な目が安堵を宿して和んでいた。

「今宵はなぜか疲れておらぬ」

椅子に深く腰をおろした竜基を見て、李妃はいった。
「けっこうなことでございます。竜基さまはもっとお休みにならなければ」
嵩帝がその孤独をさらけだした夜以来、李妃は嵩帝を陛下とはよばずに、竜基さまとだけよんでいた。嵩帝はそう李妃によばれると、いかに気分のすぐれないときでも笑みを見せた。
「そうおちおちと休んでもおれぬ」
「ではせめて、わたくしの傍にいらっしゃるときだけでも、ごゆっくりなさいませ」
李妃は燭台からさらに蠟燭をひとつ消した。へやは薄暗くなった。
竜基は、つと椅子を離れると、沓をぬぎ捨てて牀に横になった。そして李妃をよんだ。
李妃は燭台をもとのとおりにおいて、竜基のところへ近づこうとした。
そのときであった。
不意に、いまだ感じたことのないような凄まじい眩暈が李妃の足をすくった。李妃は薙ぎ倒されるようにして床に叩きつけられた。竜基の叫びがそのあとを追った。
「――李妃！」
嘔気をともなうふるえがつぎに李妃をみまった。急速に失われてゆく意識のうちに、李妃は己が竜基の腕の中にあるのを知った。
「誰かおらぬか！」
夜を切り裂くその叫びに、端近に控えていた侍女たちがかけつけてきた。



「皇帝陛下、なにごとでございますか」
「すぐに楊忠桓を呼べ。李貴妃が、李妃が倒れた」
聞いて、数人が泡をくってへやを飛びだしていった。残った者たちは李妃の傍によって、脈を診たり顔に手を触れたりした。
「李貴妃さま、お気をたしかにあそばせ」
李妃の肌は蠟のようであった。氷ほどに冷たかった。瞼ははっきりそれとわかるほど蒼ざめていた。
竜基は李妃をかかえ上げて牀に寝かせた。そしてその上に薄い夜具をかけてやると、椅子を牀にひきよせて座り、李妃の手を己の額にあてた。
侍女たちや警護の兵の緊迫したざわめきも竜基の耳にはとどかなかった。竜基は、深く光のない谷底へ、李妃とふたり、つき落とされた気がした。

医師楊忠桓は薬函を携えて、べつだん慌てるようすもなくへやに現れた。
竜基は李妃が昏倒したときのことを詳しくいって聞かせた。忠桓はうなずき、李妃の頭のほうによると、李妃の閉じていた目をひらいて瞼の裏を見た。それから脈をとり、額に手をあてた。
「陛下。おひと払いを」

重々しくひびわれた声が白い髭のあいだから漏れた。竜基が命じるまでもなく、侍女たちはみなへやから退がっていった。

忠桓は薬函からいくつか小さな包みをとりだすと、やはり函のなかにあった乳鉢に、包みに入っていた粉をすべてあけた。

「貴妃はどうしたのだ」

竜基はいった。忠桓は黙々と薬を調合していたが、やがて竜基にもほとんど聞きとれぬほど低くことばを発した。

「陛下、お気を乱すことなくお聞きとどけください。――李貴妃さまは毒をお盛られになったのでございます」

竜基はしばらくだまっていた。忠桓もなにもいわなかった。李貴妃の不規則な呼吸の音だけが耳に入ってきた。

不吉さを孕んだ沈黙を破ったのは竜基であった。

「余には、徳妃の仕業としか考えられぬ」

憤りがそのまま音になったように忠桓には感じられた。いま、竜基の姿を喩えるならそれは人鬼でしかなかった。護るべきものを知らぬあいだに害されたことに気づいた、狂鬼であった。

「陛下、軽はずみにものをおっしゃってはなりませぬ。誰の仕業かはまだ決まっておりませぬ」

「徳妃のほかに、このような卑劣なまねをする者はおらぬ」
「失礼を承知で申し上げますならば、貴妃さまを快く感じていない人間はあまたおります」
忠桓は枕もとの水さしをとり、乳鉢に水をそそいだ。そしてそれをよくかきまぜると、李妃の頭をもち上げ、口に鉢をあてがい、薬を服みこませた。
「いのちに別状なかろうな」
竜基はいった。忠桓はうなずいた。
「おいのちに関わるようなことは、まずありますまい。ただおからだの具合を崩されるだけでございます。薬さえお服みになれば、数日でもとのようにおなりです」
李妃はふと目を開けた。己をのぞきこんでいる、見知らぬ顔があった。
「貴妃さま、お気づきになられましたか」
「――どなたさまでございます」
「楊忠桓と申す老いぼれでございます。貴妃さまがお倒れになったと聞き、参上つかまつりました」
「お医者さまでございますね」
李妃は忠桓の名に聞き覚えがあったのでそういった。それから竜基に笑ってみせた。
「竜基さま、申しわけございませぬ」
「なにをいう」

「お見苦しいところをお見せいたしました。わたくしはどうやら、病に罹っていたようでございます」

忠桓は首を横にふった。

「貴妃さま、病と申すほどのものではございませぬ。なにか、よくない菜にあたられたとみえます。それとおぼしめすものがおありでしょうか」

李妃は考えたが浮かばなかった。

「わかりませぬ」

「さようでございますか。それならそれでけっこうでございます。けれども、ここしばらくはわたくしめが李貴妃さまの食膳のお支度をいたしましょう」

忠桓はいい、鉢や包みやらを函にしまうと、明朝また参ずることを述べ、へやをでていった。

竜基は李妃の髪を、額を、頬をなでた。まるでそこに李妃が存在するのをたしかめているようであった。

「気分はどうだ」

「先ほどよりもよほどよいようでございます」

「よく休め。なにも気にかけることはない。忠桓も、すぐに治ると申しておった」

李妃は頬にあたるぬくもりに安堵して目を閉じた。もう眩暈はしなかったし、嘔気もなかった。

竜基は夜のあいだずっと李妃の傍にいてその手を放さなかった。放せば李妃が忽然と消えてしまいそうな気がしていた。そしてそれと並行して、脳裏には禍々しく笑い転げる杏妃の姿が灼きついて、嵩帝竜基の凄惨な憎悪をかきたてた。

つぎの日、嵩帝は政務を終えると宮に忠桓を召した。嵩帝が選んだやや狭い空間にはほかに誰もなく、ただしそのまわりはとくに信頼できる衛兵たちで固められていた。

忠桓は嵩帝に深く一礼すると、その近くに足を運び、かすかにいった。

「貴妃さまのこと、なにに因するかわかりましてございます」

嵩帝はだまって先をうながした。忠桓はつづけた。

「江昭媛吉楽さまの献じた茶でございました。その茶から、たしかに夷狄渡りの毒を見つけだしました」

「昭媛だと！」

眉を怒らせて、嵩帝は投げるようにいった。

「貴妃さまは、五日ほどその茶を召し上がっておられたのでございます。あの毒はそれくらいして効き目が顕れると存じておりますから、まず昭媛さまのなさったことにまちがいなかろうと」

嵩帝竜基は昭媛がいかなる容貌であるか見たことがなかった。その質についてもなんの知

識もなかった。けれどもいま、竜基は昭媛を一刀のもとに斬って捨ててもかまわぬほどの衝動を呑みこんでいた。

「いやはや、おそろしい。このようなことが、おやさしい貴妃さまのお耳に入ったらと考えますと、わたくしめはお痛ましさのあまり命数も削られる気がいたします」

忠桓は首をふってつぶやいたが、それは暗に李妃には事情を明かさぬほうがよいだろうといっているにほかならなかった。

「――あいわかった。大儀であった」

嵩帝は目を閉じて額に手をあてた。流れる気配で忠桓が退がっていったのがわかった。

それで李妃におこなわれた無残な謀に関する談は終わったのであったが、嵩帝はその顚末に目をつぶる気はなかった。

李妃を損なおうとする者はすなわち竜基の敵であり、竜基にはその人間にどんな極刑を科すこともできるだけのちからがあった。ちからはあったが、傍若無人にふるってよいものでは決してなかった。

竜基を苛むのは嵩帝の名の枷である。枷をはずすのはたやすいが――たとえどんなに苦しい決断を求められようと――暴君の冠を戴くことになるのとひきかえでなければならない。

あるいは竜基はそれでもよかった。非道の皇帝と罵られようと、李妃が生きて傍にあればよかった。が、ひとたび暴君と呼ばれた皇帝の治める世に安寧があろうか。百姓のゆたか

さ充ちる天下があろうか。

李妃のいのちか、汝のいのちかと問われるなら、竜基は不惑にして李妃を護るであろう。けれどもそれが、ひとりの女か、それとも民かと叫ばれたのであれば、竜基には選ぶことができない。李妃を負うというには、竜基はあまりにも帝王学に慣れすぎた。

竜基であるところの嵩帝は、軽い疼痛を頭に覚えた。いまはこれ以上考えても詮ない気がした。

牡丹行幸は翌朝から動きだすはずであった。李妃は忠桓ほか幾人かの医師を供とすることで玉寿寺参りをゆるされた。病みあがりの李妃を気遣って、輿は数段頑丈でしかも衝撃が少ないよう羽毛を縫いこんだ布を敷きつめたものにされた。

李妃はもういつもとなんら変わるところがなかったが、あの眩暈を胸に再現させてみるたび冷たい汗が頬をつたった。地が牙をむいたような、天が堕ちてきたような圧倒的なものがあった。

菜にあたったのであろうといった忠桓を疑うわけではないが、そんなことではないと李妃の本能がふるえていた。

あの夜の李妃の昏倒、それはなにか禍に彩られている感じがした。

伍

大路の両の傍にはひしめきあう民衆がどうにかして皇帝とその寵妃を目にしようと喧しかった。

連なってゆく行幸の列は、先の皇帝の輿はとうに黒い点ほどの大きさになり、尾部はいまだ見えない。多くは厳しい体の衛兵だが、そのうち春風に煌びやかな匂いが混じるようになり、幾多の輿がしずかにゆれて近づいてきた。李妃とその侍女たちのものであった。

民は誰もが前へ前へと我先に押しあった。さざめく輿のなかでも、ひときわ眩いのが李貴妃の輿である。四方に薄布の幕をなかばまで下ろしているが、進むたびに淡く李妃の面がかいま見える。

天成の白磁の肌に脂粉をはたいて、額にはよりくっきりとした群青の四点。唇は濡れたように光る濃桃色で、それが平生とはまたちがった李妃の気品と婉然とを目立たせている。その姿を拝む者あり、呆然と動かない者ありで、活気はここに極まった感があった。

皇帝の居宮である皇宮から玉寿寺まではけっこうな距離だったが、その路々に民のざわめきがとぎれることはなかった。どこにも嵩帝と李妃を迎える悦びがあった。

皇帝はひとあし先に玉寿寺に到ると、本堂の裏手にある四阿で李妃を待った。四阿は簡

素な石造りで、芽吹きはじめた柔緑が見渡せる。

まもなくして李妃とその一団が輿を降りてきた。そこで嵩帝はあまたの随従者をともない、境内の一角にある牡丹園に入った。

そこはまるで天上であった。白く紅く照りかえす灼やきがすぎゆく者の姿にちらちらと映った。水をやったあとなのであろうか、深緑の葉の上を転がる銀の露も目にうつくしい。うつくしいといえば、およそ周辺には数えきれぬほどうつくしいものがあったが、それらと趣を異にせず、まぶしさに溶けこんでうつくしいのが李貴妃であった。

嵩帝竜基は、いちにちのどんなときにも李妃に天女を見いだしたが、牡丹園に佇む李妃はまさしくそのものに見えた。李妃の発散する空気がゆるやかな流れをなしているように感じられた。甘く、光ってやさしかった。

園をひとめぐりすると、それだけでもう午であった。帰りぎわになって、玉寿寺から嵩帝と李妃に咲きほこる白牡丹と緋牡丹が献上された。

緋牡丹に、嵩帝は華人と名をつけた。華人が李妃をさすことばであることは誰にでもわかった。いずれ枯れるものにそのまま李妃の名をつけるのを憚ったのであろうが、座は和んだ。

「では、わたくしにも命名のおゆるしをくださいませ」

李妃はいうと白牡丹に頬をよせた。咲く大輪がふたつあるごとくに見えた。

「よかろう。汝ならば、そちらの株をなんと名づける」

童子の笑いをこぼして嵩帝がいった。李妃は首をかしげ、しばらくしていった。
「聖公子といたします」
座はいっそう沸いた。忠桓はじめ衛兵たちまでもが、嵩帝の李妃への寵と、李妃の嵩帝への情を、類なく高雅なものに感じた。
帰途、嵩帝は華人を、李妃は聖公子をそれぞれ手にして宮に戻った。

ふたつの牡丹の株は李妃の館の庭におかれた。侍女たちは競って世話をしたがった。また、館をたずねてくる者も噂の牡丹の拝見を所望した。
陽の下での二花が豊麗なのは無論であったが、李妃はそれより月の下にあるほうが好きであった。夜の牡丹は哀しくうつくしかった。
いつものように嵩帝が李妃のところにきて語らったあと、庭にでて牡丹を眺める。牡丹は燐光をはなつように咲いている。嵩帝は李妃をひきよせていう。
――汝は余のものだ、誰にもやりはせぬ。
李妃はわけもなく泣きたくなる。しあわせにすぎるあまりか、それともなにかに淋しいのかはわからなかったが、嵩帝の手のたしかさに触れるとかならず夜景がにじんだ。
「妃が我を忘れるのを見てみたい」
嵩帝はそうもいった。李妃はだまって笑った。

とりみだすことがないのは李妃の性分であった。いかな享楽のうちにいても意識の芯は醒めていた。宴席に侍っても、竜基の傍にあっても空気に酔えずにいた。

漆黒の闇をひとりで這うような感をもって、李妃は己が冷たい女だと知る。それは美人であったときには、いたりもしなかった覚醒であった。

竜基を慕っていないのでは決してない。忘れえぬひと、離れえぬひとであると切に感じる。けれども溺れきってしまうことができなかった。

弱くなれず、強くもなれず、己の背にかかる重みをいとしい気でうけとめていても、その李妃をじっと見ているもうひとりの李妃がいる。

己がおそろしく、忌まわしく、目をそむけずにはおれなかった。

嵩帝竜基が己に傾けば傾いてゆくほど、李妃は哀しかった。

行幸を終えて二十日ののち、江昭媛吉楽に入獄の沙汰が下された。

もっともこれは宮でも暗々裡のうちに運ばれたことであったから、ごく少数の官吏しかその詳細を知らなかった。

なにぶん昭媛は女であるし、それなりの家格の出であったので、たいていの罪人におこなわれているような刑は科されなかったが、薄暗く湿って黴臭い牢に入れられたとたん、労苦なしにここまできた吉楽は泣いて事情を告白した。

「どうかおゆるしくださいませ。――わたくしはたくらみに使われただけでございます」

ひどい嗚咽を漏らしている昭媛は、李妃に毒を服ませたのは己の意思ではなく、脅されてしかたなくやったことであり、この画策にはもっと多くの人間がくわわっていたのだと、とぎれとぎれにいった。

謀ったのは誰と誰だとたずねると、江昭媛は蒼ざめた面をさらに蒼くして激しく首をふった。いえばまちがいなく殺されてしまうからと。

宥めても頑なに口を閉ざすばかりでらちがあかないのにいらだち、問責の官吏が槍やら刀やらをならべてみせると、吉楽は卒倒しそうなようすでとうとうなにもかもを吐きだした。

すぐにそのたくらみのすべては嵩帝に奏上された。嵩帝は江吉楽から昭媛の位を剝奪して後宮から退去することを命じた。そうして首謀者および関連した人間をあらいざらい牢獄に押しこめた。

謀に手を貸していたのは、宗昭儀林薔をはじめ、西賢妃、趙修容、玄修媛などであった。これらの女たちもそろって後宮を追いだされた。

事態がここまで大規模になると、いつまでも隠しきれるものではなく、官吏から宮女へ、宮女から市井へとこの状況をひき起こしたあらましはひろまった。

李妃も侍女のひとりから、後宮の位の半数が空いたわけを聞いた。

毒を盛られたこと、それはたいしておそろしい事実ではない。吉楽が李妃を陥れようとし

たこともさほど驚くには値しなかった。かつての朋輩がなんの理由もなく寵妃となれば、妬みやうらやみもあるであろう。

李妃がおののいたのは、見も知らぬ女たちが己を害そうとするほどに憎んでいると気づかされたからであった。それは李妃がつとめて見まいとしてきた懸念であった。

朋が憎むなら憎みかえしもしよう。嘆きもしよう。けれども、李妃の敵は未知の女たちであった。知らぬ者を憎むことができるほど李妃は強くなかった。嘆くことができるほど慈悲があるのでもない。ただ虚ろになってゆく胸を感じるだけであった。

夜、竜基は李妃の生気の失せた頬や瞼のあたりを見て、己がなさしめた令を烈しく後悔した。やつれてなおも笑う李妃が狂おしいばかりに竜基の情念を煽った。

「すまぬことをした」

竜基は覚えずいっていた。李妃は頭を少し傾けて目を見ひらいた。

「なにがでございます」

「かつて余は汝を苦しめぬとちかった。それをたがえてしまった」

「竜基さまはわたくしを苦しめてなどおられませぬ」

竜基は詫びるかわりに李妃の体軀を強く腕のうちに閉じこめた。李妃は釦のゆれるのを視界の端にとらえながら竜基の肩にもたれた。

「わたくしはなにも憂えておりませぬ。けれども、あなたさまのつらいお顔を拝見するのが

哀しゅうございます」

「妃が笑えというのなら、笑う」

無理に双眸を和ませて竜基はいった。李妃が悦ぶならいかなることでもできた。それが償いのつもりでもあった。

李妃がしずかな眠りに落ちてから、竜基が格子を開けると、高くに月が見えた。

光が竜基の手をすぎて李妃の額に延びている。

竜基はふたたび格子を閉め、牀に戻ると、李妃をだいて眠った。

嵩帝は詫びずにいられない心もちであったが、そのいちにちで李妃損害のたくらみの始末がついたのではなかった。つぎの日には要となる首謀者の入獄があった。

獄といえども、そのへやは庶民の日常使うようなものと変わりなかったし、問責の官吏も高位の人間であった。さらには嵩帝もそこに足を運んだ。

わざわざしつらえられた椅子に腰もかけず、傲然としてひたすらまわりの者に喚き散らしているのは杏妃であった。

もはや杏妃はうつくしいとはいえなかった。桃樹池で李妃を嘲ったときの倍も痩せ、頬骨がでて眼窩がくぼみ、目だけがらんらんと生きていた。手足は乾いてしなびて見えた。

杏妃は頑として己の罪をみとめず、口をひらいてでてくるものは李妃への呪言ばかりで

あった。

「あの女は不貞の女でございます。かならずいつか陛下に仇なす女であり、忠義の者を陥れる女であり、宮廷を腐らせる女でございます」

あの女はあまたの官吏と不義をはたらいている、陛下弑逆を狙っている、夷狄と手をむすんでいるともいった。崔帝国の傾くことを祈り呪っている女だとさえいった。

嵩帝はついに笞刑をゆるした。杏妃は狂ったように叫んだ。が、それでも李妃を呪うのをやめなかった。

耳をつんざく叫喚に官吏たちは眉をひそめた。李妃への罵詈はさらに聞き苦しかった。

嵩帝は鬼女を見るように杏妃を凝視した。

「あの女、いやしい女――醜い女！」

「その口を閉じよ！」

嵩帝は一喝した。官吏たちはその凄まじさに息を呑んだ。嵩帝が臣の前で激昂したのはこれが初めてであった。

「いやしいのも醜いのもすべてそなたのことであろう。悔い改め、ゆるしを乞うならいざ知らず、あまつさえ貴妃を誹謗するとは見下げはてた女よ」

「陛下、わたくしは陛下の御為になるとすればこそ――」

「それ以上なにか申し立てるつもりであれば容赦はせぬ。斬殺に処すが、よいか」

杏妃は押しだまった。目が紅く光った。

「陰謀に関わった者はみなそなたが指図したと申した。そなたの館に呪符や毒壺があったことも余の知るところである。ほんらいであれば死罪でもたりぬが、李貴妃の慈悲をもって流罪に処してゆるす」

それだけをいい捨てると、嵩帝は獄をでた。とたん、背にかんだかい咆哮が降った。

ふりかえると杏妃が首をたれていた。その頭の触れている床には粘質の黒い染みがあった。官吏たちが慌てて杏妃の肩をゆすったが、杏妃はすでにこときれていた。

杏妃は自害したのである。惨めに罪人の烙印を刻まれるのが我慢ならなかったのであろう。

そしてそれにもまして、李妃に皇帝の寵を奪われ、その憎むべき李妃の慈悲にすがって生き延びるのであればと、死を選んだにちがいなかった。嵩帝は無残に横たわった杏妃の骸を見て、不意に憐憫の念が起こったのに気づいた。後悔ではなかった。けれども己に嫁いでこなければ死なずにすんだであろう名門の女の生涯を考えると、数奇であると感じずにはいられなかった。

嵩帝はひどく疲れて宮に戻った。まだ午をすぎていくばくもしていなかったが、李妃の傍にいたかった。

承の章　別れを見る月

壱

李妃へ計られた謀は、これに飲毒せしめんとしただけでなく、つぎには致死にいたるまでの劇薬をもって貴妃位簒奪をもふくんでいたことが、杏妃の自害ののち暴かれた。

この咎のため韋氏の眷属はことごとく洛陽を追われた。いくつもあった館はどれもとり潰されて瓦礫を曝した。

後宮にはこのたび三嬪を削る詔が降って、巷の驚嘆を買った。そのうち皇帝は一夫一妻の制を布くつもりであろうという者さえでた。じつのところ、帝妃といえばそれは李妃ひとりにほかならなかったし、後宮はあれどもなきにひとしかった。

杏妃のことやいっさいの処理に辣腕をふるったのは、董戒温を名のる男であった。

戒温は峻帝の曾孫にあたる人間で、旧臘（去年の十二月）までは辺境にいたが、嵩帝就

位によって宮廷に召された。薄くはあるがたしかに皇家の血をひく官吏で、また温厚な質のこともあり、よい風評ばかりがどこにもあった。

ことさら気をゆるしているのは皇帝そのひとであった。二十四の己より八歳たけたこの官吏を兄哥とも朋とも呼び、なにごとによらず言を求めた。

戒温が李妃に初めて拝謁を請うたのは、夏の兆しの見える午であった。李妃は杏妃自害の噂を耳にすると軽い気鬱に陥って、十日ほど床に臥せていたのがようやく快癒したやさきのことである。

華人も聖公子もとうに散りしいてしまい、見渡すかぎりにいろどりがないのがいささかわびしくはあったが、濃淡と陰のはっきりとした木々や叢が光に浮いて、わずかに李妃の無聊をなぐさめた。

白く小さな陽はすでに天頂をすぎていた。昼餉をすませた李妃は、異国風の脚をした椅子にもたれて、かろうじてそれとわかる桃樹池の灼やきに目をやっていた。

不意にそこへ侍女たちの笑いとどよめきが飛びこんできた。李妃は面を扉に向けた。すぐに扉が叩かれ、李妃が応じると、若い侍女がふたりしてまろい頬をのぞかせた。

ひとりがはずんだ目をして董戒温なる官吏が拝謁にまいったことを告げた。いまひとりは、客を宝枝のへやにあげてもよろしいかと、李妃にいった。

李妃はそうするのがよかろうといった。董戒温の噂はしきりに耳にしていたし、竜基の口

からもその官吏のことはでていた。

ふたりのあとについてきた侍女たちに化粧をさせると、李貴妃は少し衣の崩れたのを繕って、客人のところへ足を運んだ。

宝枝のへやとは客人を迎えるための室で、かつて嵩帝の手折ったひとふりの枝が飾られてあることからそう呼ばれていた。貴妃館のうちでもっともひろい空間でもあった。

李妃はひらかれた扉の端から、おとずれた客の容貌をかすかに見た。嵩帝に似ているとは感ぜられなかった。

「いらせられませ」

いうと、戒温は椅子からたった。

「拝謁にあずかる董戒温と申します」

李妃はその低音に瞠目した。嵩帝竜基もずいぶんと低いが、戒温はそれにもまして低かった。低いが地を這わず、響いてこちらにとどく感があった。

「存じ上げております」

麒麟の柄の織られた厚い敷布をあいだにはさんだ椅子と椅子に、李妃と戒温は腰をかけた。戒温はそれから、手にしていた素木の函を李妃にさしだした。

「貴妃さまに献上いたしたく存じまして」

李妃があけてみると、なかには凝った刺繍の施された腰帯があった。過飾に走らずに品の

よいものであった。

「かようなものをいただきまして、まことにありがたく存じます」

李妃の双眸が、ついで頬が柔らかにほころびるのを、戒温は圧されるようにして見た。そこにはひとりの貴人がいた。嵩帝がいつもいうように、天の女と冠しても偽りではないようにおもわれた。

まだ誰とも戒温は婚姻をむすんでいない。董氏をのちに残す気がないのであった。父母はもはや亡く、己の族が権勢をふるっていたのも遠い過去のことであれば、戒温が娶らずともさしつかえなかった。

戒温は眉目秀で、痩軀ながら文官よりもむしろ武官を彷彿とさせる容姿であるから、宮女たちの耳目をそばだたしめた。が、それらの女たちは、戯れるにはかまわなかったがやはり溺れるほどの価値は見いだせなかった。

目鼻のつくりでいうなら李妃よりもうつくしい女はあった。けれども戒温には、李妃の醸す甘く光る気配のようなものには、いかなる女もおよばぬように感じられた。

「お気に召していただけたらさいわいでございます。臣は無粋な人間でございますから、そのようなものを選ぶのにも刻苦しましたが」

李妃は戒温のことばの巧みなのに気づいた。なるほどこれであれば能もあるであろうといったふうの流暢さであった。そうして、尋常でない声律の低さがそれを軽々しく見せず

にいた。

「陛下は、戒温さまはご謙遜がすぎるとおっしゃっておられました。わたくしもそのようにお見うけいたします」

「いえ、賤官でございます。それが偽らざるところでございますれば」

李妃は少し笑った。

「侍女たちも、たいへんきれいなおひとがらだと申しておりますけれども」

戒温は首をふって、大仰に眉をひそめた。

「臣は新参の官吏でございますから、実よりよいように見ておいでなのでしょう」

李妃に戒温はどこまでも退いた。卑屈ではなかった。かえってその裏にある、みずからを尊する念を感じさせた。

しばしことばを交わして、戒温は館をでた。李妃は戒温のいちいちにぬぐいがたい感触を覚えた。

とりわけ強く灼きつけられたのはその目であった。

戒温は透んだ目をしていた。水鏡を見るような心もちがした。ひとのすべての哀しさをひどく惹く目であった。

李妃は、かつて嵩帝をおそろしいひととしたのとはまたちがって、戒温がわずかにおそろしかった。

嵩帝は、戒温というその慮を仰ぐにたる官吏を傍に召したことで、つねにまとわざるをえなかった鬱をようやくにして消したようであった。

戒温は嵩帝に供して李妃の館に参ずることが多くなった。数を重ねるにしたがい、李妃も戒温もいくらかくだけたいいまわしになった。嵩帝にならって、李妃も戒温を兄哥とよぶこともあった。

戒温は、笑ったと見るとすぐに憂えた面になり、困惑したと見るとまた笑っていたりした。絶えず感情を表しているようであった。それが童子のようでもあり、また成人らしくもあった。

笑いをひとつとってみても、邪気のないときがあるかとすれば、口の端だけをゆがめてみせるときもあった。とらえどころがないだけに、いくたび会っても別人を見るような驚きがあった。

戒温にしても李貴妃は変わらず尊い女であった。己と視点をひとしくしているように感ぜられるのが笑みをさそうかたわら、どうあってもあらがうことのできない天成の浄さに目を見はった。

李妃はまったく無垢に見えた。ときとして稚くさえ見えた。だが李妃は童女ではなく、まぎれもなく女であった。女であることの甘さ、うつくしさのみを有している存在であった。

負の気を帯びていない——少なくとも見るからには——天衣無縫の姚人に、戒温はあらゆるつつましい綺羅を見た。

首をかしげても、つと手を動かしても、李妃はやさしかった。与えるのでもひけらかすのでもない、ただそこにあるだけのやさしさであった。

李妃のしぐさは細かな光を撒くようにして軌跡をつくった。嵩帝が後宮の李妃以外の館に足を向けないのが、戒温にはわかった。李妃さえいればそのほかのことはどうでもかまわなかろうとおもわれた。

それであるから、戒温は李妃がわずかにおそろしかった。嵩帝が英邁であったのが僥倖のように感じられた。

まったくもって、李妃を有してなお仁治をなすことができる皇帝を英邁であるといわずしてなんというであろう。愚帝はもちろん凡帝でも、李貴妃に耽溺せずにおられようはずがなかった。

戒温は嵩帝を崇した。

たしかに崇しはしたが、それだけではなかった。

李妃はあまり歩きまわる質ではなかったが、夏がすぎ、秋になるころには皇宮の裏手にある呂山にたびたびでた。

たいていは侍女を供にしたが、ときとして戒温も随することがあった。すると侍女たちは、誰が供するかひどく喧しくもめた。李妃はそんな騒ぎを興じて見ているようなところがあった。

李妃が戒温に感じたおそろしさは、消えることもあったし強くなることもあった。戒温は、笑いと笑いのまばたきほどのあいだに、凍てついた目をする。李妃はそれが怖かった。

戒温は呂山にて、即興で謡うことが多かった。材は竜と天女――嵩帝と李妃である。

翔る竜はなにをもふりかえらない
手にした天女に金の目をあて
逆鱗でさえも天女が触れるなら
白い牡丹に姿を変える

空をふるわせる低音に、侍女たちは知らず目を閉じた。謡をくり返す者もあった。

戒温はさらにことばを紡ぎだす。

天女のつまびく琴は竜を眠らせ
欠片は銀の光となって降る
中天の月はかすかにゆれながら
ふたりを護るように巡る

李妃は困ったような悦んだような面もちで戒温を見る。そうしてだまって歩いてゆくので

あった。

嵩帝は戒温の謡を耳にするとひどく悦んで、紙に記して李妃の館に飾らせては戒温の才を讃えた。

戒温は誰のために謡うのでもなかった。強いていえば己のためであった。李妃のまとう気配を口を極めて表したいがためであった。

李妃ひとりを謡うのは憚られるが、嵩帝と対にするならいっこうにかまわなかった。戒温は、嵩帝の威を借りて、じつのところは李妃だけをうつくしいものにたとえていた。が、それはおよそ誰も知りえなかった。

あるいはまた、戒温も己に盲目であった。

竜宝元年の冬がきて、嵩帝は洛陽の南、泉宮への行幸を迎えた。これは代々崔朝におけるならわしであった。

泉宮とは文字にあるように、無数の泉のある泉境とよばれる地に造られた宮である。泉にはすべて熱を帯びた水が噴出しており、ために泉境の域は寒気が凌ぎやすかった。

李妃はひどく風邪をひきこんでいたので、避寒に随するのを辞退した。嵩帝は毅然たるありさまで泉境は養生するのにまたとない地であるとさとしたが、楊忠桓の言もあって、しかたなく貴妃が洛陽に残るのをゆるした。

このたび泉宮に参る官吏は、老臣姫延叔をはじめ十数におよぶ。延叔は光厳帝の御代から崔朝に仕え、名臣の誉れ高い官吏である。日ごろ延叔の忠義ぶりに感じ入っていた嵩帝は、行幸に供させることで恩に報いようとしたのであった。

平生宮廷を統べている延叔が不在となれば、延叔が負うべき務めを託すにたるのは戒温をおいてほかになかった。董戒温は、行幸のあいだ延叔の職責をすべて戒温に委ねる旨の令をうけた。

泉宮への滞在は例年二十日間にわたるが、嵩帝は李妃が病のこともあり、十五日でひき上げるとして泉境の地に下っていった。衛兵をも含めて二百余名の供まわりである。

戒温は、宮廷での務めもさることながら、李貴妃を頼むと嵩帝に采配を請われていた。もとより戒温も李妃の病状を気にかけていた。

風邪とはいえ、李妃はそう頑強な質ではなかったから、いったん罹ると容易に快癒しきらなかった。咳が治まったかとおもえば喉が腫れ、腫れがひいたかとおもえば熱がでた。熱は、昼はたいしてひどくはないが、夜がふけるとおそろしく上がって李妃の気をなえさせた。李妃がものもいえず牀に横たわっていると、侍女たちは慌てて忠桓を呼んで、熱さましの丸薬を李妃に服ませた。

名医忠桓の薬をもってしても、李妃の熱はさほど下がらなかった。下がってもまた上がるといったようすで、李妃は徐々に痩せはじめた。

戒温は李妃の館にくるのを日課として、氷を献じたり南方の果実を献じたりした。弱々しくも笑う李妃は、以前にもまして稚く見えた。

乱れた寝衣もわだかまりほつれた髪も李妃の貴さを貶めはしなかったが、わずかにまろさの削げた輪郭が哀しかった。

李妃衰弱の急使は泉宮にいる嵩帝のもとに駈けつけた。十日目のことであった。

嵩帝は官吏たちが留めようとするのを叱咤して泉宮をでた。でたところで姫延叔に強く諫められた。

「陛下、楊忠桓にお任せになられませ」

「できぬ！　もはや誰もあてにならぬ」

「陛下、陛下は十五日のあいだ泉宮にご滞在なされると、百官の前で宣示なさったのでございますよ。いやしくも皇帝陛下であらせられるお方が、ひとたび口になさったことをたがえてはなりませぬ」

嵩帝は延叔を喝破したかったができなかった。延叔は嵩帝竜基の傅育官でもあった。嵩帝は父とも祖父とも感じる老臣にあえて逆らうほど我を失しているのではなかった。

踵をかえして嵩帝は泉宮に戻ると、忠桓に宛てて、なんとしても李妃を快癒させるようにと使いをだした。莫大な薬代も添えていた。

李妃に宛ててはみずから筆を執って、気丈であるように、余はまもなくして皇宮に帰すから、そのときまでには床を離れてもよいように、養生に専心せよとした。

嵩帝のことばを戒温から聞かされた李妃は、しばらくだまって空を見ていた。それから小さく、謡ってくださいませと戒温に頼んだ。

その霧消しそうなかそけき音、——戒温に衝動が生じた。李妃を手に逃げてしまいたいような衝動であった。戒温には今宵それができた。

だが、皇帝の寵妃をかどわかしてどこにゆかれよう。天女の放つ光を隠しおおせる地がどこにあろう。

戒温は李妃の黒い双眸が濡れているのを見た。それから李妃の枕もとに、枯れはてた桃枝があるのを見た。

羽を失くした鴻は
涯にひとり臥す
泪は凝って翡翠となり
呼吸は昇じて虹となる
あわれ　鴻
はかなく
なにをよぶのか

李妃はかすかに笑みをこぼすといった。

「戒温さまが謡っておられるときのお声は、竜基さまに似てらっしゃる」

戒温はだまって、牀の下で手を硬くした。両の爪先からはにわかにふるえが起こった。

李妃を有しえるのであれば、たとえ皇帝といえども弑して咎めぬ己が、衝動にかろうじて耐えている己を嘲る。

ひとりの、匂やかな女がいる。慕っているなら奪えと、縛りつけるものがあるなら、そのいましめを無残に断ってでもと叫ぶ己がいる。そしてそのかたわれを制することが、どうあっても戒温にはできない。

夜、戒温は餓えたように李妃を欲しながら館を退がらねばならなかった。

弐に

眠られぬ闇をいくたびもすごして、戒温はいささか険しくなった目を蒼穹にあてた。雲はなく、洛陽の街の瓦が地平まで連なって見える。

戒温は皇宮をでたばかりのところにある台でしばらく立ち止まっていたが、やがてゆるやかに足を運びはじめた。貴妃館に通じる回廊へであった。

回廊の途中にある館は、ほとんどが使われていない。戒温はそのうちのひとつに向かっているのである。できうるならひとの目につかぬ夜にと、戒温は考えていたのだが、さんざん迷いぬいていたせいで、もはや猶予はなかった。

好都合なことに、その館に到るまで、官吏はおろか宮女、侍女の類の姿をさえ見ずにすんだ。戒温は館の扉を軋まぬようあけて中に入ると、扉を閉めた。

薄暗く、埃臭いへやのすみには、ふたりの女が立っていたが、戒温が不意に入ってきたのに驚いて手足を竦ませた。

「待たせた」

戒温はいって女たちに近づいた。ふたりはたがいに見あわせてから戒温を見た。

「ほかの者に気づかれずにいらっしゃれましたか」

ひとりが口をひらいた。竦みと怯えは消えたようで、凛とした面をしている。
「大事ない。手はずはどうだ」
「すべて戒温さまのおっしゃるままにいたします。くれぐれもご心配なきよう」
「お気をたしかにしていらっしゃいませ」
戒温はうなずき、白い袋をとりだした。かすかに金属の触れあう音がしていた。
「これはおふたりに。ご尽力、ありがたかった」
ふたりはそろって首をふった。ひとりが袋を押して返し、ひとりはいう。
「金銭が目あてではございませぬ。わたくしどもは、戒温さまにおもいを遂げていただきたいだけ」
戒温は弱く笑って、袋をひとりの手に握らせた。
「お礼をせねば気がすまぬ。うけとっていただきたい。――いざ咎めがあれば、わたしひとりが負って死ぬゆえ」
ふたりはうつむいて少し泣いた。へやをでてゆくときに、おかわいそうに、と呟くのも聞こえた。
戒温は古びた帳の陰で、ながく堪えていた息を吐いた。それから午後の政務に戻った。
皇帝不在が十五日を数えた。明くる午に嵩帝は洛陽に帰す。

戒温に惑う暇はなかった。ひとあたりのよい善官の戒温は、欲のために反逆をも犯す戒温にすでに殺されてしまっていたのである。

ひとりになった戒温は後悔を捨て、嵩帝への尊敬を捨てた。官吏である己を捨て、董氏を捨て、なによりもいのちを捨てた。

金銭を拒んだふたりは貴妃館の侍女である。侍女たちは、戒温が李妃のへやへ密かに入るのに手を貸してくれるはずであった。

戒温は己を省みてふるえずにはいられない。己をおそろしく感じずにはいられない。だが、李妃を捨てることだけはなんとしてもできなかった。

貴妃館へつづく石畳は、戒温を責めるように冷たく硬い。漆黒の空に月はなかった。朱くゆれる篝火の光を避けてゆく戒温の目に、黄橙に浮かび上がるいくつもの格子が見えた。

戒温は館の裏にまわった。そこにはひとりの侍女がひそんでいた。気をたしかにしろといった侍女であった。

侍女は戒温がきたのがわかると、厳しい面で囁いた。

「しばしお待ちを。いま少しで侍女たちは退がりますれば」

戒温はだまって応えた。額に手をやると、髪が風に凍ったようになっている。気がつけばどこもかしこも冷えきっていた。

しだいに橙の灯が消えてゆき、ざわめきが淡くなった。侍女がそっと木戸をひいた。戒温

はなかに踏み入った。

とたんにあたたかな空気の流れが戒温をかすめた。流れの向こうに別の侍女が、戒温を手でよんでいた。

「こちらへ」

侍女は戒温の先を沓音ひとつたてずに歩き、角を曲がってからとまった。見覚えのある扉が右にある。李妃のへやの扉にちがいなかった。

「暁までほかの者はまいりませぬ。わたくしどもが近くにおります。なにかあればおよびくださいませ」

戒温は凍えた手で扉をあけた。ほのかに李妃の牀が見てとれる。燭台にさしてある蠟燭の数はわずかで、へやは柔らかく暗かった。

耳にすることができるのは李妃のかすかな呼吸の音ばかり、それを拾うように戒温は牀に歩みよった。

女は横たわり、薄く睫の影が白い肌に落ちている。傍の窓は細くあいていて、吹く夜気がみじろぎもできずにいる戒温の頬をなでた。

ふと李妃が瞼をひらいた。光る黒い目が現れて戒温をとらえた。

「――戒温さま」

戒温は起きようとする李妃の口をふさいでいった。

「おしずかに」
「あなたさまは、なにを」
「おしずかに。――わたしは李妃さまにお会いしたくて参上した」
李妃は首をふって、童子を叱るように戒温を叱った。
「お戯れがすぎまする。このようなところを、侍女にでも見られたらいかがなさいます」
戒温は眉で苦しげに笑った。
「侍女は来ませぬ。そう申しつけた」
「いったいなにを考えておいでなのです」
「李妃さまのことだけを。皇帝の寵妃を恋うれば死罪に値する、それでもわたしは李妃さまにお会いしにきた。――おわかりか」
李妃は戒温の手をはねのけたかったが、ちからでかなうはずもなかった。
いま李妃を腕にしているのは、李妃の知己ではなく、ときおり凍てついた目をして戒温のうちに現れる人間であった。不遜で傲慢で冷淡な、邪気のない男であった。
「お帰りになられませ。わたくしは口外いたしませぬ」
絶え絶えにいう李妃を、戒温はさらにひきよせた。
「口外なさってもわたしはいっこうにかまいませぬ。いずれ死にゆく者であれば、どうかご慈悲を」

あらがおうとすればできたはずであった。侍女をよぶならできたはずであった。けれども李妃にはできなかった。

なす術もなく、窓にきりとられた闇空を虚ろに見る李妃の視界のすみに、枯れた枝と竜基の面ざしが浮かんだ。

海嘯のような眩暈がした。

李妃はまたしても快癒に遠くなった。不規則な熱はすっかりひいたが、かわりに気鬱が李妃を襲った。杏妃の件のときよりもひどかった。

嵩帝はあらゆる医師を召しだして李妃の診療にあたらせた。みずからも欠かすことなく館に見舞って李妃の枕辺に添ってすごしたりした。

楊忠桓は、嵩帝のおでましは李妃さまにかえって気をつかわせておしまいになるからと、見舞いの数を減ずるようにいった。嵩帝は不安を無理にも殺してしたがわざるをえなかった。巷では自害した杏妃の呪いであろうかと噂しあった。李妃の治癒を願い祈りをささげる者もでた。官吏太清亨も、天帝に牛馬穀類を供えて李妃の延命を請うた。

戒温は嵩帝のおとずれのない夜にきまって李妃のところへきた。李妃はなぜか戒温に逆らえなかった。そうしてひとり己を蔑み責めた。

嵩帝に慕われるのは哀しかったが、戒温に慕われるのはなお哀しかった。戒温の透んだ冷

たい双眸が李妃を苛みながらもとらえて放さずにいた。

李妃は、嵩帝がもたれていても戒温にもたれていても己を消してしまいたかった。いっそ死にたくもあった。が、己にしかすがることのできない嵩帝竜基を残しては、どこへもゆけなかった。己しかない董戒温を残してはどこへもゆけなかった。

李妃は病んだままで竜宝元年を終えた。

竜宝二年一月一日、太陽に白い虹が架かった。陽を白虹がつらぬくのは騒擾の兆しである。百姓は誰もが目を疑った。まれなる仁政を施している嵩帝の御代に、なんの乱れが生じるであろうと怪訝を感じたのである。

天災かもしれぬという学者も、謀反だという官吏もあった。かえって瑞兆なのではという民もかなりあった。

嵩帝と戒温は、白虹が李妃の崩ずる兆しに見えた。姚人はなべて短命である。まして李妃のように質がよければ、さらにしあわせが薄いであろう。皇帝のあふれるほどの寵とひきかえに、いのちをゆるやかに縮めてゆかないともかぎらなかった。

嵩帝は医師にくわえ、およそ賢人といわれるすべての人間をさがして、李妃快癒を祈らせた。そうでもしなければとても政に専念できないのであった。

祈願の費用は莫大で、充ちかけた国庫は苦しくなりはじめていたが、嵩帝は憑かれたように李妃のために金銭を使った。姫延叔が諫めても、楊忠桓が諫めても、嵩帝は頑として首

をふらず、生涯にただひとたびのわがままであるからゆるしてくれといった。

老臣ふたりは、ひとたびきりのわがままが崔を滅ぼすことにもなりかねないと重ねて奏上した。それでも嵩帝は言を入れなかった。あきらかに李妃の病状が嵩帝竜基にぬぐい去れない不吉さを映していた。

洛陽が暗澹たる感触を覚えているうちで、梅が散り、桃が散り初めるころ、ようやくにして李貴妃はわずかながら癒える気配を見せた。

己のおろかしい消費と李妃の死の幻にまいっていた嵩帝は狂悦して、今年は課税を軽減すると詔をだし、百官には錦を賜った。

李妃の館にはひきもきらず祝いの品が献上された。そのなかには文淑妃、魏昭容からのものもあった。淑妃も昭容もともに、韋徳妃に謀をもちかけられてもうけつけずにいた女である。昨年に李妃が臥せっていたあいだも、館に足を運んで談を交わしていた。

淑妃は気は強くも情に脆い、艶やかな女で、仁と義に叛くを潔しとせず、杏妃とはたびたび諍いがあったが、おだやかなひとがらの李妃には姐哥のごとき朋であった。

昭容は飄々としたところのある女で、端正な面にして弁舌が冴え、厭悪している人間には容赦なく辛辣であったが、朋には尽力を惜しまなかった。

ふたりの献上品はそれぞれ手鏡と櫛で、そろえたように似たあつらえになっていた。李妃は治癒に向かいかけたとはいえ、己の不貞にありとあらゆる神経を蝕まれて容易に起きること

もできなかったが、ふたりにだけはみずから礼を申し述べる文をしたためてとどけさせた。

気鬱は、消えるほど薄くなったり、絡みつくほど濃くなったりをくり返した。薄くなるのは李妃が死をひたすらに見すえたときで、濃くなるのは嵩帝を迎えたときと戒温を送りだしたときであった。

嵩帝は李妃をいたわって、数日ごとに館へきた。きては以前にもまして李妃を放さずに夜をへた。

「余をひとりにするな」

嵩帝はいい、李妃はやはり生きなければならぬと苦しんだ。

戒温は嵩帝の参館のあいだを縫って李妃に会うと、凍てついた目で李妃の目を見た。見られると追いだせなかった。

「気鬱でお痩せになるほど、わたしを忌まわしく感じておいでか」

だまって李妃は首をふる。そうしてまた、生きなければと己を叱咤した。

李妃がともに生きてゆかねば嵩帝は壊れてしまうであろう。李妃がこの世で生きてゆかねば戒温は狂ってしまうであろう。けれども生きてゆけば、いずれ李妃は破綻するにちがいなかった。

生きて苦渋と悔恨と譴責に溺れるか、死んでふたりを地獄に堕とすか、李妃は浅く暗い眠りにうなされながら、どちらもとることができない。

嵩帝の李妃をつかむ手の強さと、戒温の李妃を見る双眸の烈しさとが李妃を果てしなく傷つけ、それでもなお、果てしなくいとしかった。

まもなく春が去り、初夏が洛陽に鮮緑の木々をもたらした。華人と聖公子も昨年を凌ぐほどゆたかな大輪をひらいて、館の者を悦ばせた。

李貴妃はめったに笑わなくなっていたが、文淑妃朗蓉と魏昭容濾賓の談を傍で聞いているときだけは知らずほほえみがこぼれた。

ある霧雨の煙る午、淑妃と昭容はしめしあわせて李妃の館に足を運んだ。この数日、李妃の鬱が重く感じられたからであった。

李妃は口もとをほころばせてふたりを牀から迎えると、枕近くに座るようすすめた。

「今日はお顔の色がよろしいわ。ね、濾賓さま」

淑妃はいった。じつのところ、李妃の面もちは病んだ風情を隠せない白さであったが、昭容もうなずいた。

「このぶんなら、つぎの雨の日には散歩なさっても大丈夫でしょう。煙雨に沈む洛陽もなかなかのものですよ」

「そうでしょうか」

李妃は首をかしげて笑った。ふたりはそうに決まっているといいはった。

談は何刻にもおよんでつきなかった。淑妃は、稚いころに眷属の並んだ席で剣舞をし、勢いあまって剣が手から飛んで、ひとの悪い叔父の鼻をかすめて床に刺さった——と含み笑いをしながらいった。昭容は笑い転げた。李妃さえ背を屈めて笑った。

「わたくしにも似たようなことがありましたわ。六つのとき、庭に小さな蛇がおりまして。小虹と名をつけて遊んでいたのですけれども、ある日、庭のすみのわたくしを侍女が見つけて、泥遊びはおよしなさいとわたくしの手から小虹をとり上げましたの。きっと汚れた紐かなにかだとおもったのでしょうね」

淑妃はすでに笑み崩れた面で昭容に先を問うた。

「ですからわたくしは、『小虹を放して』と申しました。侍女は、ふしぎそうに握りしめていた小虹を見て、やっと蛇だとわかったとたん——地も割れよとばかりに叫んで腰をぬかしたんですわ」

笑いすぎて淑妃は頬を紅くした。李妃は枕にもたれて笑おうとした。

そのとき、李妃は激しい嘔気を覚えて口に手をあてた。

胸の底からせり上がるものに必死で耐え、夜具に伏せてしまうと、淑妃は驚いて李妃の背をなで、昭容は急いで侍女を呼んだ。

数人の侍女がまずへやに入って李妃を仰向くよう牀に寝かせ、残りは楊忠桓を走って連れてきた。

忠桓は李妃を診ていたが、不意に髭をふって笑いだした。
「李貴妃さま、おめでとうございます。ご懐妊でございます」
いっせいに悦びのことばが誰の口からもついてでた。
「おめでとうございます、貴妃さま」
「おめでたいこと」
「皇帝陛下に初めての御子さまですわ」
淑妃は李妃に柔らかに笑いかけた。
「おめでとうございます、貴妃さま。具合がすぐれなくていらっしゃったのは、そのせいだったのですね」
昭容もうれしげに目を細めて、李妃の腹に手を触れた。
「公子さまか公主さまか、いずれにしてもおめでたいこと」
侍女のひとりは、とうに皇宮へ向かっている。嵩帝に李妃懐妊を伝えるためであった。
嵩帝は報を耳にしてしばし呆然とした。それから玉座を蹴るようにして皇宮を出、貴妃館に駈けてゆくと、侍女を転ばすばかりにへやへ入った。
「李妃！」
白く透ける小さな手を己の手に重ねると、嵩帝は泣きたくなった。笑いたいような気もした。

「――からだをいとえ」

それだけをいうと、嵩帝は李妃の額に口接けた。離れがたかった。永久に李妃の傍にいたかった。が、これからせねばならぬことは数えきれぬほどあった。

「今宵は来れぬが、つぎには必ずくる」

嵩帝は李妃の手をしずかに夜具にのせるとへやをでた。

館はどこでも愉快げに騒ぐ声がした。それは夜ふけまでつづいた。

風が瞼を叩いて、李妃は目を覚ました。戒温の面があった。つねと変わらぬ苛烈な目が、李妃をとらえていた。

「ご懐妊と聞いた」

戒温は低くかすれた音でいった。李妃はただ唇をふるわせた。なにもいえなかった。

「皇帝陛下は宴席でたいへんなお悦びようだ」

「やめて――やめて、くださいませ」

李妃は目を閉じて戒温の手をはらった。戒温は李妃の腕をつかんだ。

「皇帝の御子か。――わたしの子では」

「わかりませぬ！　わたくしには――わかりませぬ」

「生まれてみればはっきりいたそう。わたしの子であったなら、わたしは李妃さまと子を連

れて逃げる」

李妃は息を呑んだ。それだけはできないと強く感じた。

「いけませぬ。わたくしには、かようなことはできませぬ」

「逃げねば、李妃さまも不貞の咎で死を賜る。かまわないのですか」

答えない李妃をだいて、戒温はいった。

「つぎまでにご決心を」

李妃はだまって泣いた。戒温は李妃の頬に口接けてへやを去った。

ひとり、李妃は牀にひそむようにして夜をすごした。眠れるわけがなかった。

李妃は己をつらぬいた黒い罪を生涯忘れえないであろう。慕うふたりのどちらも選ぶことができない己の罪を。

罪は消えない。消えずに、生まれる子の見えない烙印として無限に李妃を責め苛むであろう。

ときは吹き飛ぶごとくに流れて、天の下を翻弄しては巡らす。

白虹をもって憂慮されていた天災は、やはり崔を襲った。早魃であった。穀類は平生のなかばも実らずに枯れた。李妃の平癒祈願のおりに空隙の増した国庫は充ちることなく収穫時期を終えた。

嵩帝は百官の懸念をよそに貴妃館に通った。もはや姫延叔も楊忠桓も言を呈さなかった。洛陽では嵩帝の定めた制がかろうじて浸透してはいたが、辺境では先帝のころの状況にほとんど戻ってしまっていた。

誰よりも嵩帝を諫めてしかるべきはずの董戒温は無為に日をすごしていた。けれども、しばしば高官のもとにおもむいては夜を徹してなにか論じている姿も見られた。

嵩帝が改革をはじめたころにはおもいもよらなかったことだが、崔はふたたび傾きかけていた。ゆるやかではあるがまちがいなかった。

西で夷狄が現れたとか、北で農民が官吏の倉を叩き壊したとか、荒んだ噂が多くなった冬、李妃はひとりの子を産んだ。

公主彪玖である。

参

竜宝二年が、乱れ、しかしひっそりとしたなかにすぎた。

公主彪玖は李妃を写しとったように似ていた。白皙に映える黒髪、なにより月のない夜のごとき目がふたつ、赤児らしからぬ哀しみを湛えていた。

戒温は急いて、育ってゆく公主を眺めにきた。己の娘子ではないかと、ふしぎと笑わない公主の面に見入ってみるのだが、似たところはどこにもなかった。ただ、嵩帝にも公主が似ていないことがなぐさめであった。

李妃は床に就いたり離れたりをしながら、それでも彪玖だけはつねに傍らによせて、生きてゆくことのよすがにしているようであった。

嵩帝は彪玖に綾の産衣や金銀の童具をつぎからつぎへと与え、また李妃にも玉石のついた櫛、釵をいくつも賜った。まるで理性の堰が切れたような出費であった。李妃はできうるかぎりの強さで贅をうけとるまいとしたが、嵩帝はより強く奢をすすめた。

姫延叔は、ごくたまにちからなく皇帝を諫めたが、もとより李妃の死の幻をかいま見た嵩帝がうなずこうとはおもわれなかった。楊忠桓はまれなる賢帝と頼っていた嵩帝が、無自覚ながら破滅に溺れこんでゆく姿をみるに耐えず、急激に老いを滲ませた。

嵩帝は乏しい国庫からとほうもなく金銭を費やし、それでもなお百姓から過剰に税をとろうとはしなかった。その点からすれば嵩帝はいまだ仁を失くしてはいなかった。が、衰えてゆくままなにをするでもない皇帝に百官の半数は背を向けて、己の財を保つために模索しはじめた。

戒温は、姫延叔の職をもほぼ手にして政務をとりしきると、もはや気の叛きかけた官吏の隙をついて己のちからを巧みに刻んでいった。董氏の倉に残る財を国庫に運び、よそおいを貧しくし、昼夜を問わず責を果たした。

董戒温の評は傾国につくす忠義の士としてまたたくあいだにひろまった。嵩帝はいっさいを戒温に委ね、位を首位までひき上げた。

李妃はそれらのことを、光のまったく見えないところをひとり裸足で歩いているようにおそろしく安堵の欠片にも突き放された気で耳にした。ひとことひとことが李妃の四肢をもぐ剣であった。

戒温がなにをするつもりであるか、李妃にはわからない。わからないが、戒温が嵩帝とともに天を戴く生を築くはずがなかった。

己のいのちが崔にあっては、安寧はありえない。ただ滅びと罪なき者の哀しみがあるのみである。

災いをよぶ女か。存在してはならぬ女か。李妃は冷えた目で己を見た。ちかいをたがえて

皇帝に叛き、子に消えぬ印を灼いた女。

病みやつれて笑みを忘れた己をとりまいて光るのは死であった。死だけが李妃を責めずにいた。もとより死んでゆるされるわけでもなく、死んでやすらげようとも感じられはしないが、少なくとも己を忌みいやしむべき女だとおもうのなら死ぬべきであった。

李妃は死を右にかかえながら、左では公主彪玖をだいていた。死ぬのは怖くはないが彪玖を残してゆくのはたまらなかった。あどけないおさなご、母の罪をわかりはしないであろうのに、笑うことをしない公主をひとり、無防備において死ぬのが李妃にはこのうえない罰であった。

いつしか梅が咲き、竜宝三年の春がきた。館には、かつてのようにあふれるほどの花枝は見られなかった。いずれの官史も、おちぶれかけた皇帝の妃にかまっている暇などなかったのである。が、董戒温だけは変わらずに、つつましくはあったが白梅を献上した。

このごろ、ひとつの噂が巷に流れた。

――李貴妃は後宮に召されるかなり以前から董戒温のおもいびとであった。ふたりはいまもひそかに夜ごと会っている。

ある宮女は李妃の館から忍んでくる戒温を見たという。戒温が崔に仕えるのは李妃のためであろう、ことによると公主は戒温の子かもしれぬ――と洛陽の民は口をそろえた。

戒温は愕然とした。おもわぬ露呈であった。せめていま少したってからであったならと、

戒温は拳をふるわせた。

嵩帝がだまっていようはずがない。もともと苛烈な質の皇帝である。激怒にまかせて斬殺されてもおかしくはなかった。

——わたしは死ぬのか。

死にたくなかった。李妃を、己が子であるかもしれない公主を離れては逝きたくなかった。逃げようにも猶予がない。たとえ逃げても逃げおおすことはできない。

——畢竟、わたしはしあわせから見放された男だったのだ。

邂逅が遅すぎた。天命は、あくまで己と李妃をふたつに裂く。ただ手のうちで弄び、ときの渦に棄て去ろうとするばかりなのだ。

己は反逆の徒であろうか。天に叛くおろかな人間であろうか。斬られて呆気なく死んでもさしつかえのない、価値のない男であったのか。

戒温は調度、衣類そのほかいっさいを昼のあいだに処分した。皇宮に姿を現すことはできなかった。そうして街を彷徨しながら夜を迎え、己の館に戻った。

果たして嵩帝の使者は戒温を召喚にきた。戒温は意にしたがって館をでて、皇宮に馬を走らせた。

夜目にも重々しい繋政門をぬけ、石畳の回廊をぬけ、たどりついたのは戒温も知らぬようなさびれた感じの小さな館であった。それをさらにぬけて外の台に足を運ぶ。白くかすか

に光る石の連なったはるか向こうに嵩帝がいた。
嵩帝は太刀どころか短刀も帯びていなかった。硬く歩みよる戒温を見て、笑いさえした。
「このような夜ふけに兄哥うえをおよびたてしてすまぬ。が、なぜか目が冴えて――ひとりでは侘しかったものだから」
戒温はだまって頭をたれていた。ひとこともいえなかった。
「少し散策などしてはいかがか」
「お供いたします」
嵩帝は夜に溶ける濃紺によそおっていた。頬が痩せていた。崔国の滅びかけるのをありありとわかっていながら、李妃にすがり脆くなってゆくのをとめられない呻吟がふと耳もとをかすめていった気がした。
「梅が薫っているのにお気づきになるか」
「は。たしかに」
「梅がすぎれば桃がひらく。兄哥うえは、桃はお好きか」
嵩帝の御代の崔で、桃と緋牡丹は李貴妃のことをいった。戒温は逡巡した。冷たい汗が首に滲んだ。
「桃は、――好きでございます」
嵩帝は戒温をふりかえらずにいった。

「さようか。余も、なにより桃があいらしくうつくしく存ぜられる」

露を含んだ夜風が吹きぬけた。甘く、冷たく匂う。戒温は、嵩帝に目をあてることができずに唇を噛んだ。

嵩帝のことばはおだやかであった。これがあの険しい双眸をする皇帝かと感じられるようなはかなさであった。

「巷はなにかと喧しい。余がいたらないためであろうな」

「そのようなことはありますまい」

「いや、偽らざるとも咎めはしない。余は愚帝だ」

嘲るのではなく、ましてや謙遜でもなく、恬淡として消えるような低い音で嵩帝はいった。責めるのでも疑うのでもなく戒温に背を見せていた。

「強くもなく、さして徳もなくして玉座にいるのは疲れるものだ。かなうのなら座から降りたいところだが、そうもゆかぬ。余は、あさましくおもわれようと皇位にしがみついていたい」

嵩帝はふりむいた。戒温の目と嵩帝の目があった。

「しがみつかなければ有しておれぬ女がいるのだ。余にはあれしかない。——あれは、余のいのちだ」

戒温は目をそらして敷石を見た。負けた、負けてしまったと、ひどい喪失感が戒温をうちのめした。

嵩帝はふたたび歩きだした。戒温はそこにとまったままうなだれていた。

「――ああ。月がおぼろだ」

嵩帝がいった。戒温は初めて、月がでていたのを知った。

李妃は彪玖の面を凝視した。黒い目はひたすら母の目を見かえす。やや李妃よりきつくはあったが、双眸が鋭いのは嵩帝も戒温も変わらないので、父を定かにする証にはたりなかった。

彪とは小さな虎をさす。公主はたしかに小さな虎を彷彿とさせた。李妃に似ているがそれだけではない。うちに孕んだ烈しさと強さを感じさせる。

玖とはうつくしい黒さをさした。公主の髪と目である。ことに、黒さのあまり銀を刷いたようにも見える髪は幻の神獣に似ていた。

李妃は公主が六月を数えたら死ぬつもりであった。いとけない己が娘子を風雲のもとに解き放って死ぬことを、天の与えたもうた罰とするつもりであった。

嵩帝は公主に惜しげなくいつくしみをそそいだ。腕にかかえ、容貌を褒め、母のごとき女になれかしといった。死を端近にしていくぶん気をもちなおしていた李妃も、嵩帝のことばには胸をつらぬかれた。

――わたくしのようになってはならぬ。彪玖は、誰にも憚ることなくゆかねばならぬ。

いいきかせては頬をよせ、いいきかせては頭をなで、李妃は公主を全霊をかけていとしんだ。公主が六月を迎えるまでのときを、ゆるやかに費やして。

が、天命はなにもかもをうらぎって笑う。李妃は猶予をすごせなかった。

竜宝三年二月十五日、董戒温が謀叛を起こしたのである。

発端は、李妃快癒の祈願のおりの莫大な出費であった。つぎには充ちない国庫を顧みない減税、政務の放擲、妃と子への耽溺、たびかさなる浪費と、嵩帝が咎められるべき所業はいくつもあった。

咎めて治まるなら見ないふりをしてもよかろうが、嵩帝は軌跡をはずれてまた戻らない。咎める臣ももはやない。

嵩帝が在位のかぎり、崔は必ず滅びる。隙に乗じて夷狄は攻めよせ、百姓は困窮に喘ぐであろう。

——ひとりの皇帝につくして万人の民が貧しくあるのをだまって見るか。万人を救けひとりにやむなく叛くか。どちらをとるかはいうまでもないことである。崔帝国は皇帝によってなっているのではなく、崔人によってなっているのだ。

戒温は官吏たちによびかけた。

「さいわいにして、嵩帝はものわかりのよいお方だ。流血沙汰を選ぶとはおもわれない。譲

位していただくにとどめ、しかるべき皇胤を位に就けるのが臣のとる道であろう」

百官のほとんどは戒温についた。うなずかなかったのは、姫延叔と楊忠桓のふたりである。

――老いぼれにだいそれたことはあわぬ。だが、手足に染みついた義を果たすのが我らの業なれば、嵩帝をお護りいたす。

戒温謀叛の報は十五日の夕、皇宮にとどいた。嵩帝は微塵もうろたえを見せなかった。

「しかとさようか」

「まちがいございません。かくなるうえは衛兵にて防備を固め、李妃さま、公主さまをお連れになって、呂山に逃れるのがよろしいかと」

延叔からの急使は述べた。嵩帝は不意に笑った。

「逃れてどうなろう。ながらえるともおもえぬ。――余は、崔帝国皇帝である。死しても皇宮をでるわけにゆかぬ」

嵩帝は玉座を離れ、侍従を数人伴って李妃の館に向かった。館ではいまだ、誰もなにも知らなかった。

侍女たちに危急を知らせるのは侍従に任せ、嵩帝は李妃のへやに入った。李妃は彪玖をだいて唄っていたが、風を起こしてきた嵩帝に目を見はった。

「いかがなさいました」

「戒温が謀叛をくわだてた。彪玖を連れてどこへなりと逃げよ」
李妃は両肩をふるわせた。それから細く叫んだ。嵩帝は荒く李妃をだきしめていった。
「余はたとえひとりでも剣をとって死ぬ。ひとりで逝く。妃はながらえて――誰のものにもなるな――！」
李妃は崩れそうになるのに耐えて嵩帝を強くだいた。彪玖はものおじのしない目で嵩帝を見、李妃を見た。むずかりさえしなかった。
嵩帝は李妃を放すと、へやを走ってでた。
館はにわかに混乱を極めていた。
侍女たちの多くは李妃にしたがい、李妃を護る気であった。官吏などはおそれるにたりないといった強さをどこかしら表していた。
「逃げたい者は逃げなさい。いのちをむだにしてはなりませぬ」
「わたくしたちは、地の涯までも李妃さまにおつき申し上げてゆく覚悟でございます。さ、李妃さま、公主さまとともに安全なところへ」
李妃は首をふった。哀しげな笑みが面に浮かんだ。
「わたくしはどこへもまいりませぬ。ただ、皇帝陛下のお傍にまいります」
「李妃さま！」
侍女たちは泣きださんばかりにして李妃をひきとめた。李妃さまが死ぬ気でおられるな

ら、己も死ぬという者もあった。
「李妃さまがおいでにならなかったら、公主さまはいったいどうなさればよろしいのですか」
「みなは文淑妃さまと魏昭容さまのもとにいらっしゃい。彪玖はおふたりにお任せいたします。くれぐれもお願いいたすと、お伝え申し上げてください」
李妃はあるだけの金銀宝玉を侍女たちに託した。淑妃と昭容に、ご迷惑をおかけしてすまないといってほしいともつけくわえた。
「お急ぎなさい。謀叛の徒に見つからぬように」
李妃はいうと館をでた。そして転ぶように駈けて皇宮のなかばの扉をあけた。
玉座には剣を手にした嵩帝がいた。冒しがたい品と畏怖を感じさせた。
傷を負った獣にひどく似ていた。
「竜基さま」
「李妃――なぜきた。汝は逃げねばならぬ」
「わたくしは竜基さまをおひとりにはいたさないとちかいました」
李妃は強くいった。嵩帝竜基はだまって李妃を見た。李妃も嵩帝を見た。
慕ってだかれ、うらぎってなおも惹かれる。ひとりにはできない。ひとりにはなれない。
哀しく、狂鬼のごとき光をはなつ嵩帝の目が、わずかのあいだだけ濡れた。
嵩帝はだまって李妃にすがった。したがう官吏のひとりもない、殺伐としたひろい空間に

灼やく金の玉座を蹴倒してすがった。

衛兵たちの叫びが響いた。雪崩てくる謀叛の臣たちの沓音が、激しい雨をおもわせて扉近くを踏み荒らす。

嵩帝は李妃を背に隠して刀を抜き、扉を視界におさめながらあとずさった。割れるばかりの怒号が宮を衝く。皇帝には触れさせぬと凄まじく剣をあやつる衛兵もさすがに数に圧されて、鈍い軋みとともに扉がわずかにひらいた。

またたくあいだにも二百名にのぼる反乱官吏たちが敷石を踏んだ。

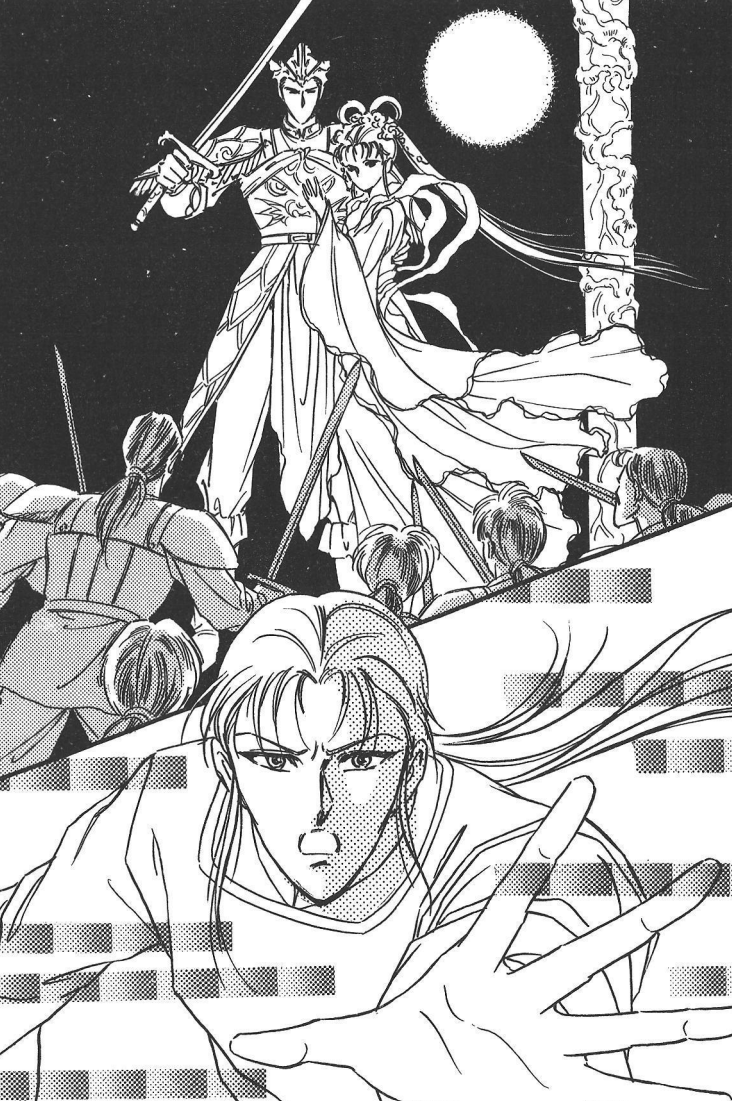
「無礼者！」

天帝の叱咤かと感じられるほどの、空を破る嵩帝の喝が降った。閧はすみやかにやんだ。臣は誰もが息を呑んで、壁に塗りこめられたようにみじろぎもできなかった。

己が謀叛は誤りであったのではないかと、百官は皇帝に逆らえない恐怖をいだいた。だがそれは官吏たちをかすっただけですぎた。ひとり先だって傲然といる董戒温が、官吏たちのみずからへの咎めをとどめていた。

「無礼は承知のうえで参上いたしました。陛下もご存じのように、崔はいまやことごとく乱れ、脆くなった礎を崩しかけています。再興を願うおつもりがあるのでしたら、ご譲位なさるほか術はありますまい」

戒温はいった。平生の低い声律で、それでもしずまりかえった宮にはすみずみまでとどい



た。嵩帝はいいはなった。

「まだひとつ術はある。余が死ねばよいのであろう」

「臣たちは陛下が崩じられるのを悦びませぬ」

「そなたらが悦ぼうと悦ぶまいと、余は玉座を逐われておめおめとながらえはせぬ。不仁君の名を負うのも耐えられぬ。崔を傾かせたは余の所業であれば、余は死をもって償うを欲す」

戒温はだまった。百官もなにもいわなかった。

「余だけが死して償うべき罪を犯した。罪はすべて余のものである。李貴妃に罪はない。李妃を罰せぬよう、嵩皇帝竜基終焉の命としてここに宣べる」

李妃の面がこわばった。黒い目が烈しさを帯びた。

戒温はいどむように嵩帝を見た。いわせてやったとおもう暗い愉悦と、いわせてしまったとおもう暗い後悔が戒温を覆った。

「古代の王にならって、余はみずからの首を刎ねて果てる。が、宮を血で汚すは忍びない。台にて死のう」

百官のさざめきが沸いた。

「董戒温のみに、余の死を見とることをゆるす」

嵩帝は台へとぬける薄い扉をあけてでた。李妃は嵩帝を離れなかった。百官のうち、戒温

だけがふたりについた。その背にもはや強さはなかった。

台に吹く風はいつかの梅のように甘く匂っている。董戒温は、ふるえる四肢を引きずるようにして台をすすんだ。嵩帝が、逐い堕とされ死ぬほかない嵩帝が、とてつもなくおそろしかった。

「ちかいをたがえても、妃は残れ」

囁いた嵩帝に、李妃は強くいった。

「おひとりにはいたしませぬ」

「余の願いだ」

「わたくしを、あわれとおぼしめしなら死なせてくださいませ」

いなやをいわせぬことばであった。なにがあっても嵩帝と死ぬのだと李妃は感じた。死なねばなにもかもが終わらぬと感じた。

嵩帝は李妃を強くだいた。髪に唇をあて、額に唇をあて、瞼にも耳にも唇にも、指にもてのひらにも唇をあてた。

戒温はそれを凍てついた目に映した。嵩帝と李妃は夜に淡く光っていた。壊せなかった。壊すべきちからもなかった。

嵩帝は戒温を見た。あわれみとほこりとをたたえて、謀叛を起こした臣を見た。戒温は目をそらして李妃を見た。李妃が嵩帝を離れるであろうものとして、手をさしのべてみた。

李妃はただそのうつくしく白い面をふった。透けた真珠のような露が目から滴って、風に雫をこぼした。

「李妃さま、皇帝陛下のご命令でございます」

戒温はいった。鳥肌だつほどの不吉さが戒温を襲っていた。

「李妃さま！」

「わたくしは、わたくしのしたいようにいたします」

李妃はいい、戒温の目を見た。戒温は、李妃の唇が不意にかすかにふるえたのを見た。

「いけませぬ、公主さまはいかがなさいますか」

「すべては天帝さまがしろしめしておられましょう。あの子に罪がないのであれば、天帝さまはきっとよいようにしてくださいます」

嵩帝は李妃をひきよせた。戒温が李妃をとりかえそうとした。

「わたくしは、わたくしの罪を負って、世の罪びとたちがゆくところへまいります。ですから、せめて死ぬときだけは、竜基さまと離れずにいます」

「あなたは——わたしを棄ててゆかれるのか」

戒温は叫んだ。李妃を失いたくなかった。崔帝国など、滅びるならば滅びてしまえ。だが、李妃だけは残して歴史から消えるがよい。洛陽も宮殿も、李妃を残して瓦礫となってしまえ。

「わたくしにはもう、生きて罪を償うことはできませぬ。ですが、あなたさまは必ず償ってゆかれるはずです。お頼み申します。どうかながらえて――罪を」

嵩帝はそのことばを覆うようにしていった。

「そなたに玉座を与えよう。皇帝になるがよい。百姓も領土もなにもかもがそなたのものだ。――そしてなにひとつ有するものの失くなった余に、李妃をくれ」

戒温はうなずけなかった。罵りたかったがかなわなかった。

この謀叛劇の夜に、まちがいなく嵩帝は竜であり、李妃は天女であった。ただびとの戒温はふたりをかなたに見た。手はとどこうはずもなく、叫びはとどこうはずもない。

泣けず、とめられず、戒温は嵩帝が太刀をぬくのを見ていた。狂ってしまいたかった。

「妃よ」

「なにごとも、おぼしめしのままに」

嵩帝は銀の刃をかざした。胸は激しくわななないていた。痩せた頬には、あるかなきかの光があった。

「見ておけ、戒温！　李妃は余のものだ！」

ふるわれた太刀が、李妃を袈裟がけに斬った。紅い血飛沫が石畳と嵩帝を濡らした。

李妃は目を閉じ、倒れかけて嵩帝にだきとめられた。

「李妃さま――！」

戒温はかけられていた呪縛が解けたごとくに李妃に近づいたが、その手に刃が突きつけられた。

「触れるな」

嵩帝はいいはなち、太刀を己の首のうしろにあてる。

「余は負けたのではない。謀叛を起こされたのでもない。崔のために死をもって譲位したと記せよ――」

ふたたび銀が強く空を裂いた。なんの迷いもなかった。

刃は皇帝のいのちを斬って、ふたりの血を浴び、乾いた音をたてて台に転がった。

ここに、崔朝第五代皇帝嵩皇帝竜基とその貴妃李巴陵の生涯は、光芒をえがいて終わる。

ふたりを死にいたらしめたのは戒温ばかりであったとはいえない。李妃は李妃であるがゆえに、嵩帝は嵩帝であるがゆえに死なねばならなかったのである。

誰かひとりでも異なるときを生きていたのであれば、恐らく嵩帝は仁君を務めおおせ、李巴陵はしあわせに埋もれ、董戒温は官吏として位を極めていたであろう。

天下地上、ひとは逆らいえないちからに呑みこまれては涯へと流されてゆく。涯はどこにあるのかは誰もわからない。

嵩帝に殉じた李妃も、李妃を欲した嵩帝も、死しては、やすらかなる闇の淵にひとりきり

で眠っているのかもしれない。

戒温は嵩帝の遺志を忘れず、嵩皇帝は譲位なされたのだとして六代皇帝を選ぶつもりであったが、百官の推挙により己が新帝の座に就く。

号して慧命帝である。諱は竜朔とおくられた。

慧命帝は元号を竜貴と改め、嵩帝と李妃の死んだ台に廟を築き、官吏だけでなく百姓もが足を運べるよう図らった。

廟にまつられている嵩帝と李妃に、慧命帝は――董戒温は、諡を奉る。

嵩帝には戴天仁神聖公子、李妃には仙祝桃姚華人、それぞれを石碑に刻み、みずから香を焚いて穀類を供えることは絶えなかったという。ふたりの亡骸の傍には諡の由来となった牡丹が埋められていた。

慧命帝は皇帝となってから、嵩帝の改革を継いでおこない、十七の歳を重ねて国庫をありあまるほどに充たす。慈悲のある政をもって名を高めた慧命帝ではあるが、笑うことも泣くこともしない皇帝であるともいわれた。

慧命帝は董戒温を去ることができずにいたのである。

戒温のうちには、冷たい台に散るようにこときれた李妃を薄く光らせる月の残像が、消えることがなかった。

転の章　風砂を噛む虎

壱

砂がくる。

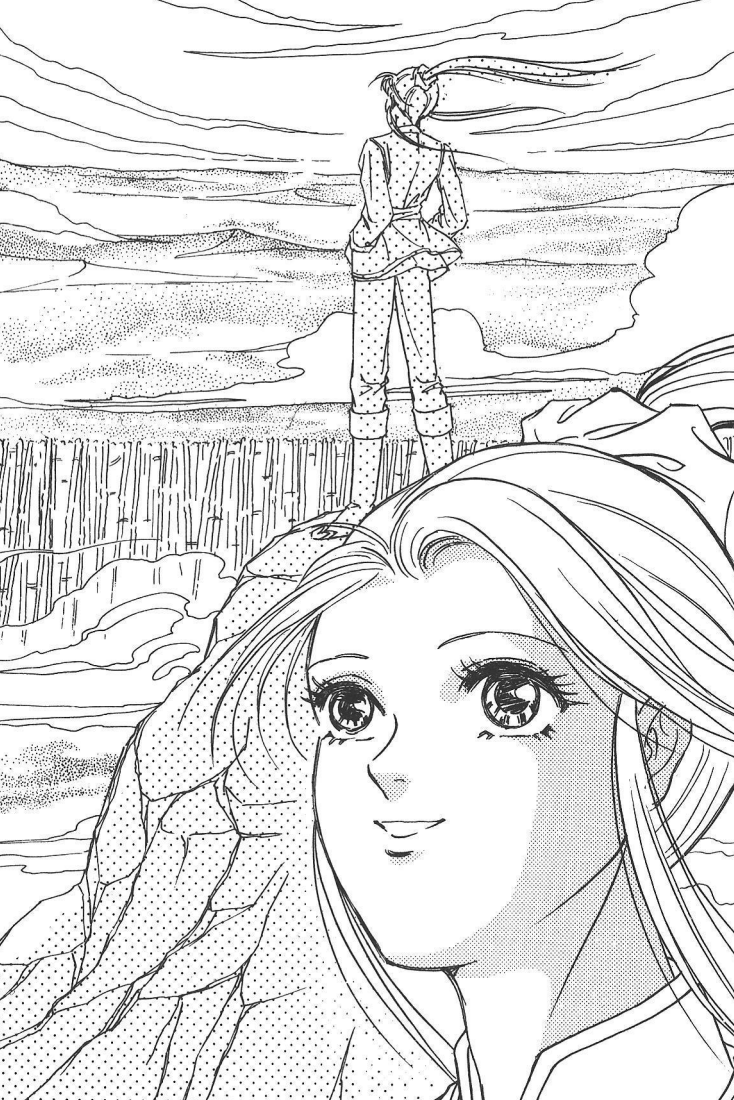
はるかに西域を越えたところから疾けるすさんだ風が砂を降らす。

山林を模した庭にひとつばかり灰茶を曝す岩にのぼって、小虎は黄塵を額にうけた。

視覚にはしなる竹を遮る砂煙があるのみ、聴覚には風のむせびと無数の砂が地上のあらゆるものを叩く雨のごとき旋律。

辺境の域埜且においては降砂がむしろ平生のことなのであって、まったくの無風無砂の天候は年に数えるほどしかない。砂害のせいで牧畜も農作もかないえない帝国領土の涯であるから民もほとんどいない。小虎は館の者以外の人間の姿はほとんど記憶になかった。

砂はゆるやかに量を減らし、蒼穹から霞が徐々に消えた。午から二刻もするとたいてい



頂点をすぎるらしい。小虎は上衣にたまった砂を散らした。

「小虎。へやへ、いらっしゃい」

よんだ女に小虎は笑いかけた。

「ははうえ、怒ってらっしゃる」

「そんな、砂だらけになって」

小虎は岩を蹴って女の隣に降りた。驚くほどからだのこなしが軽い。

「ちゃんとはらって。まあ、ほんとに埃をかぶって——濾賓伯母さまにいわれるわよ」

女は四十路に見える。疲れた気配がない。淡い海老茶の衣をまとって、腰紐はくすんだ橙である。

「伯母さまは暇だとちょっかいをだすんだ」

「碁をしたいってごねていたわ」

小虎が扉をあけて女が館に入った。小虎もつづいて入る。それを見かけた召人が寄ってきて扉を閉めた。

廊下を左に曲がると、つきあたりにもうひとつ扉がある。女は彫刻のあるつかみをひいて小虎を入れた。

なかには椅子にもたれた三十路半ばほどの女が、木の釧を手にして茶をふくんでいる。小虎は向かいの椅子に座って卓子にのった菓子をつまんだ。

「小虎は砂童子ね」
茶碗を口もとから離した女がいった。
「砂まみれになって悦んでいるもの」
「ときどきいいものが降るんだよ」
小虎は首にかけていた革の小さな袋を取りだしてふってみせた。女が面をかしげる。
「玻璃の環。ちょっと欠けているけど」
袋をさかさにすると、小虎のてのひらに転がったものが鈍い光を吸って、透ける青磁とも薄紫ともつかぬ淡色をはなった。
「錆びた鉄の環もある。手首に嵌めるのにいい大きさの。敲亥叔父さんにあげるんだ」
「あら、わたくしにはくれないの」
「伯母さまには干あがった蛇をあげるよ」
女は眉をしかめた。
「ずいぶんだわ」
小虎は笑って袋に玻璃環を戻すと、ひじかけに顎をのせた。
「見かけないけど、叔父さんはどこ」
「おへやで熟睡しておいでよ。小虎を入れるなっておっしゃってらしたわ」
「わたしが叩き起こすとおもっているんだ」

「だってそうじゃないの」

女は賑やかに笑う。小虎も反駁できなかった。過去に叩き起こしたことがあるからだ。

敲亥は三月にひとたびほど埜且の館をおとずれて、およそ二十日は逗留してゆく。そのあいだなにをするかといえば、男手がたりない雑用をしたり、小虎に剣術を教えたりするのだが、小虎はこの飄々とした叔父が好きで、館に敲亥がいるときは傍につかないと気がすまなかった。

「疲れてらっしゃるのよ、おじゃましちゃいけないわ」

「しないよ」

小虎はまたひとつ菓子を口に放りこんだ。

「剣を使ってみたいだけ」

「ぶっそうね」

女がふたたび眉をしかめた。そのとき小虎のうしろの扉がひらいて、庭に小虎をよびにきた女が姿をのぞかせた。

「小虎、湯浴みをしてらっしゃい。夕餉に埃だらけではみっともないわ」

小虎はうなずくとへやをでた。

それから廊下をいくたびか曲がって敲亥のへやのようすをうかがってみたが、やはり叔父は眠っているようだった。

埜且のようななかば砂漠地域で水が不自由なく使えるのは館の周囲だけである。なぜなら館の裏にかなりの規模で水が噴出するところがあるからであった。

小虎は石を敷きつめた浴室で湯を肩口からかけると、つぎに頭に湯を浴びせた。床に砂が渦をなしている。それでも髪に手をやると砂の感触がした。

小虎は降砂がきらいではない。いいようを変えれば、降砂をきらってはすごせないのである。小虎は庭の岩がもっともやすらげるところであるから、砂を避けるつもりなら岩に座るわけにゆかない。

あるだけの湯をすべてかぶる途中で、小虎を外からよぶ者がいた。

「小虎坊ちゃん、湯はもっといりますかい」

肝が冷えた。腕や脚がこわばって、桶をもった手がふるえた。

「いや、いらない」

「そうですかい」

――見えないはずだ。

小虎はぎごちなくあたりを見まわす。残りの湯を浴びようとしてやめた。壁にかけてあった布で水気をぬぐうと下衣を穿き、上衣に腕を入れた。

浴室をでるとわずかに衣がそよいで、風がきたとわかる。濡れて肩を覆う髪をひとつにむ

すぼうと苦労していた小虎は、角を曲がったところで叔父に会った。
「起きたんだね」
小虎がいうと、敲亥はしきりに首をまわした。
「小虎が攻め入ってくるなとおもってたんだが、なにごともなかったんで睡眠がとれた」
「伯母さまに釘をさされたから。ほんとは起こすつもりだったよ」
敲亥が背を反らせると関節の鳴る曇った音がした。小虎は叔父の上衣のすそをひいた。
「夕餉のあと、稽古をしてよ」
「いやだ」
小虎はあきらめて手を放した。敲亥の気を変えるのは容易でない。
「なんだってそう剣を使いたがるんだ」
「館で剣術をものにしているのはわたしだけだし、賊がきてもかまわないようにしなくちゃ」
「埜且みたいな辺境に賊なんかくるまい」
敲亥叔父は食堂に入ると、召人のすすめるまま右の席についたので、小虎はその隣を占めた。
としかさのほうの女が膳を敲亥のところへ運んだ。
「疲れはとれて？」
「ええ。くるなりへやにひきこもってしまって、姉哥うえにご挨拶もせず申しわけなかった」

女は文敲亥の次姉、文朗蓉である。

「それはよろしいのだけど、小虎がかまってほしがって」

朗蓉は小虎を見て笑った。そこへもうひとりの女が膳を支えて、卓子の角をかわす。

こちらは魏濾賓で、文氏の族でないのだが、朗蓉とは義姉妹のちかいをむすんで館にいるのであった。

膳がすべてでるとふたりの女たちもめいめい席につき、敲亥からもの珍しい談を聞きつつ夕餉を迎えた。膳は皿の数が多く、豪奢とはいえないまでも決して質素ではなかった。

これは敲亥が食糧も携えてくるからであって、食糧は朗蓉と敲亥の父である文孫甜のはからいで運ばれるのであった。

小虎が箸を口にしながら、薄闇の滲みかけた空のあたりへ、木枠の隙をぬって目をやると、埜且の宵ではまれなことに金の細々とした月が見えた。

夕餉を終え、女たちが茶を煎れる傍で、小虎が敲亥に降砂がときとしてもたらすものをならべたてて見せていると、扉がひかえめに叩かれた。

小虎が入るようにいうと、敲亥の随従の者がなにかを腕のうちにかかえてきた。

「小虎坊ちゃんにいかがかと。鷹の雛なんですが」

小虎は悦びきって男に駈けよった。

「朱鷹だ」

「砂に埋もれてましてね、こりゃだめだとおもったんですが、もちなおして」

雛はかすかだが猛禽の種にまちがいない鋭い叫びをあげた。

目は濃い琥珀の色で、やわらかくさかだった毛なみは赤茶に光るがそれもかなり朱に近い。帝国でもめったに見ない珍鳥である。

「高価いだろうね」

小虎はいったが、男は首をふった。

「小虎坊ちゃんにお代なんていただけませんよ」

「くれるの」

小虎の目が灼やいた。男が雛を小虎の手にのせる。

「水と餌さえやってりゃ、なつきますからね。しこめば、たいそう使えますし」

水は多量にやってはいけないなどと男は説き、小虎は数えきれないほど礼をいった。

男が去ってしまうと、小虎は雛を胸にだいて敵亥の傍に座った。

「叔父さんがくれるんだね」

小虎は笑った。敵亥は小虎から目をそらした。

「なんのことか」

「だまっておいて驚かしてくれる気だったんだろう」

敲亥は嘘がいえる男ではない。さらにいえば嘘をつきとおせない男である。朱鷹の雛が叔父に与えられたものだと小虎は疑わなかった。随従の者がうけとらなかった金銭も、恐らく敲亥がだしたのであろう。

朗蓉が茶碗を敲亥にとらせる。小虎は雛に頬をすりよせた。

さぞやあらがうだろうと察せられた雛はどうしたわけか爪さえも小虎のてのひらにたてず、琥珀の双眸に己のあるじの面をやどしていた。

「なまえをあげなくてはね」

濾賓がいって雛の嘴をのぞきこみ、少しみぶるいした。

「小虎のものにけちをつける気はないけれど、鷹っておそろしいわ。いったでしょう、わたくしの小虹は鷹につつかれてしまったって。きれいな蛇だったのに」

敲亥は頬をこわばらせた。小虎は、剣術にも格闘にも腕のたつ叔父に、蛇を妖のごとく忌み厭う癖があるのを呑みこんでいたので苦笑した。

朗蓉は、とりあえずのあいだは納屋に雛の棲みかをしつらえてやってもかまわなかろうといった。

「それで不自由なようなら、羽越に小屋をつくっておもらいなさいな」

羽越老人は召人のうちでもとびぬけて器用で、凝った木棚やら机やらをつくるのが得手な男であった。

小虎はうなずくと、まろい黒玉に似た目をしきりにめぐらせて、雛をなんと呼ぶか逡巡しているふうであったが、まもなくして笑いながら敲亥を見た。

「赫」

敲亥はだまっているばかりであったけれども、小虎はひとり悦に入って、茶の滴を雛に与えてみたり、羽をなでてみたりした。

赫は炎が灼やくさまを示すかたちである。雛は光があたるとそれを吸いとって、さらに燃える感じの色になるので、小虎は赫の字を与えたのであろう。

あやしているうち雛はしだいに目を閉じはじめ、小虎がかまう暇もなく睡してしまったので、あるじは雛を起こさぬよう気を遣ってへやに戻らなければならなかった。

朗蓉と瀘賓は小虎の背にいとおしげな目を注いだ。いまは八月、仲秋でもさほど冷気のない埜且では感覚がつかみにくいが、あとひとつきもすると孟冬がくる。そして仲冬、季冬となると小虎は十六を数えるのであった。

齢にしては成人びて、なにごとにもたいして動じない質ではあったが、ごくわずかの血族には童子のように奔放なところを見せる。

挙止は他人にはおよそ隙がない。肉を喰らう獣のこなしに似ているが、獰猛や残酷からはかけ離れて、館に小虎を避ける者はいなかった。

四年にわたる稽古で、剣術はほぼ敲亥とちからがひとしい。叩き斬るちからというものは

ないが俊敏で、不意をつくのは叔父よりも格段にすぐれていた。
　埜且の館をたずねるのは敲亥と供まわりの者のみで、そのほかはひとりたりとも見ない。館の存在を知る人間がほかにないからである。
　朗蓉と濾賓が埜且を居住の域に選んだのは、そうしたわけがあった。

弐に

敲亥が手にした木刀が、半円をえがいた。

いまひとつの木刀は低くかまえられたままで、さゆるぎすらしない。

石畳が無音を吐くのか有音を吸うのか、ひろい空間にはふたりの呼吸のわずかなふるえしか見えなかった。ときおりは柱の軋みが耳についたが、それもいずれどこかへ呑まれて消える。

小虎の沓が激しく床を叩いて、からだが前へ跳ねた。左へ避ける敲亥の腕をとらえるかに見えた刀が、少しのくいちがいをもってなびく上衣だけをうちすえた。

敲亥は小虎の脚をめがけて木刀をはらったが、小さな甥はその攻撃をかろやかにかわしてうしろへ飛ぶ。片足で立っている隙をのがさず叔父が肩を突いてきたのも、小虎はかわしてふたたび敲亥の腕に目をあてた。

右へ左へ空を裂くように刀を繰りだし、むだと悟ると背をかがめて跳躍した。叔父の脇をすりぬけるときに木刀を斜めに突く。

敲亥が小虎をよけて、腰から上がかしいだ。小虎は腕で叔父の両足をはらう。硬い音がして木刀が石畳に転がり、敲亥はとんぼがえりをうった。

崩れた姿勢をもちなおそうとして叔父は憮然とする。
首には甥の刀が喰いこんでいた。
「あっけない」
小虎はいい、刀を叔父の首から離す。敲亥は床に腰をおろした。
「手をぬいたね」
敲亥は面をそむけた。手をぬいた気はまるでなかった。叔父は癪に障ったのと敗けを喫した衝撃とで、しばらくなにもいわずに胡座をかいていた。
小虎は不足げに床を踏み鳴らした。
「ははうえか伯母さまが、わたしに痣を刻んでくれるなっていったのだろう」
「さあな」
「たいしたことないからちゃんと稽古をしてよ。痣くらい、いくつできたってかまやしないんだ」
敲亥は、甥に木刀の攻撃が入るとそれが罪悪なことのようにおもえる。稽古だといい、小虎もまるで気にはしないが、あとあとまでひどくおちつけなかった。
甥が歳のわりに小さいのもあろうし、面だちがみやびやかで、武人にはとうてい見えないのもあろう。敲亥が小虎を刀で突くのは均衡を崩させるためのみで、ちからをこめたりはしなかった。

突くゆるみのないときは木刀を叩き落とすのであるが、小虎もそれをわかっていて、刀を痛いほどてのひらにとりこむのが癖となった。

「だまってないで、刀をひろって」

敲亥はいいつのる小虎に背を向けて腰をあげた。

「やめだ、やめだ。気がのらん」

小虎はふと首をかしげた。床におぼろな影を散らす刀をひろって、敲亥の腕をとる。

「手をぬいたのじゃなかったの」

「馬鹿をいえ」

唇をつりあげて小虎は笑んだ。

「敗けたんで恥ずかしいんだろう。叔父さん」

敲亥は口をつぐんで小虎の手をふりはらう。甥はまるく透む石をこぼすように笑いをこぼした。

「敗けたんじゃない」

「だったらなんだったのさ」

「そっちでわけをつけろ」

六年をさかのぼると、敲亥が埜且の館に足を運ぶ姿が現れる。小虎は十、朗蓉や濾賓を別にしてはあまりうちとけたようすをしない童子で、敲亥は戸惑った覚えがあった。

小虎の目はつねにやわらかい険しさを帯びていた。敲亥の性質を見定めているようなところがあり、けれどもとりたてて邪険にしたりはせず、口数は少なかったが、なにかを問えば必ず答えた。

小虎が敲亥を頼るにたるとはっきり断をくだしたのは、つぎの年の逗留のときで、敲亥が父から預かってきた玩具を手にもたせてやると、その証として曇りなく笑ってみせた。

敲亥にとって小虎は甥であるというよりも、浅からぬつきあいのある朋といった感がした。敲亥は甥を見おろしたことがない。庇護してやらねばならぬ者とも見たことがなかった。

それとまたひとしく、小虎が敲亥を見あげるのは敲亥が叔父であるからではなく、その剣術の巧みさゆえであったり武道の腕ゆえであったりした。

さすがに小虎の線の細さでは格闘で叔父にかないようもないが、剣ではすでに敲亥をしのぐ段まで駈けのぼったのが如実である。

教えをうけたのが四年とはいえ、逗留ひとたびで十日ほどにすぎないのであるから、縮めてみると五月たらずで甥は叔父を超えたことになる。敲亥の剣の腕をおもんぱかれば、小虎にはおそろしいほど剣術のちからがひそんでいるのが誰にでもわかる。もはや天与というほかない。

「濾賓伯母さまに報せなくちゃ。叔父さん、目茶苦茶にいわれるよ」

「へやに籠もる」

「夕餉のときにいわれるって。ああ、でも、――いわないほうがいいかな」

小虎の面がわずかに翳る。それで敲亥は、姉のことをいっているのだと察しがついた。

朗蓉は小虎が剣をもつのを好いてはいない。昔はちがった。むしろ術を覚えるのをすすめるふしさえあった。それがかえって近ごろは目をそむけているのである。なにかわけがあるのであろうが、敲亥にはひとことも漏らしていなかった。

敲亥が怪訝に感じるのはそれだけでない。なにゆえ朗蓉が埜且のごとき辺鄙な域に館をかまえるのか。なにゆえ父は都を離れているのか。

文孫甜は豪商である。ひろい係累をあやつって商いをしているのだが、それなら洛陽にいたほうが瑣末な噂や流行り廃りのきっかけがつかみやすいはずである。にもかかわらず敲亥が十二のとき、商売のうえでの利を棄ててまで孫甜は都からでた。

敲亥にはそれが解せなかった。小虎が稚いころ、なぜあんなにまで警戒を見せる童子であったのかもうなずけない。性質はときをへて変わるかもしれないが、たいてい猜疑の殻は厚くなるものであって、よほどの感銘を与えることでもなければ脆くなりはしない。母と伯母と少ない召人たちに、小虎の警戒性を消すだけのちからがあったか。

問えば応えはあるであろう。それでも敲亥はいいだせなかった。

つきつめてゆくと、なにかが壊れる気がする。

根拠のない憂慮だとはおもえない暗さと重さが敲亥にはあった。その感覚がいつでも敲亥

の口をふさいだ。

夕から風が烈しくなった。嵐の気配である。

埜且の嵐に雨はなく、ただ巨きな空気の塊が砂を吹きあげて館の壁や塀を殴るばかりなのだが、いかんせんその凄まじさは都の人間には耐えがたかった。敲亥などもいまだなじめず、そのせいで寝つけないことも多い。

小虎はしきりに騒ぐ赫を宥めながら、刷くようにすぎてゆく砂の音に没していた。外界、とりわけ庭はたいそう荒れているであろうが、風と砂は小虎の朋といってさしつかえない。耳を覆ってもなお聞こえてくるざわめきは小さな虎を脅かさなかった。

「小虎、いるか」

よばれて扉をあけると、敲亥叔父がなんとはなし頬のあたりにきまりわるさを見せて佇んでいる。小虎は笑ってへやに叔父を入れ、牀に腰をかけた。

「なにかあったの」

叔父はだまって右手をだした。小虎の目がとらえたのはひとふりの剣であった。

「もってきたものの、やっていいか案じてたんだが――」

敲亥はいって剣を小虎の膝にのせた。

鞘には繚乱する大輪の花、柄には雲海を翔る竜の彫刻がある。

「飾りものかな」
「ぬいてみろ」
鞘はなめらかに小虎のてのひらに残って、銀光を放つ刃が現れる。斬れることはまちがいなかろうが、剣のもつ怖さがない。あるのはうつくしさと、ひたすらに小虎を映すこころだけであった。
「――ほんものだ」
「父が、おまえにと。あつらえさせたらしい。小虎の剣だ」
金属の冷たさも驚愕するほどの軽さも、すべてが小虎にあらがわなかった。さらにいうなら、小虎を仰いでいた。
この剣はいかなるときもただひとりにしたがい、ただひとりを救けるであろうという予覚があった。あるじとなるは小虎でしかない。
――使ってみたい。
汗ばむ手で小虎は刃を鞘に納めた。
「お祖父さまにお礼を申しあげないと」
敲亥はそれとわからないほどかすかに笑った。
「伝えておこう」
じつをいえば、敲亥は小虎にこの剣を与えるのは気がすすまなかった。

木刀とは両極にわかれる剣である。ひとを斬るための剣なのである。とりわけこれほどまでの剣なら飾るだけですむはずがなかった。

己を律しきれずに、試しに竹でも斬ってみる。いずれ竹ではたりなくなる。ひとに傷を負わせて慄然とするならまだいいが、殺めても呵責さえうけ入れなかったら手のほどこしようがない。小虎の分別に頼らないわけではないが、いく人も眉ひとつ動かさず斬って棄てる輩を、敲亥は多数覚えていた。

知識も位もありあまるほど所有する者ですら、剣に己の支配をおよぼせないのである。ましてや小虎はいまだ十六にようやくとどくところ。果たして剣を使えるか。

小虎は度量がひろく、ひとなつこい。激怒したことも誰かを侮蔑したことも敲亥の記憶にない。それでも任せきれないなにかが小虎にはあった。

「むやみに手にとるなよ」

敲亥に笑いかけて小虎はうなずいた。それから剣の造作を凝視する。彫刻は精緻で、竜の爪や髭にいたるまで丹念にえがかれていた。

柄の端には紅と見まごうほど濃い桃色の房がついている。上には小さな花のかたちが編みこまれ、そこから下には四寸ほど絹糸がたれて、剣を動かすとそれにともなってゆれた。

「これはなんの花」

小虎が示したのは鞘だった。

「牡丹だろう」

いってから敲亥はふと気づいた。埜且に育てば花はめったに目にできない。小虎は鮮やかな色などほとんど見ないのである。

「房にあるのは、紅梅か——いや、桃か」

「ほんとにこんな色をしてるの」

「ああ。牡丹は紅白どちらもある。孟春初めが盛りだな」

珍しげに房の花をもてあそぶ小虎を眺めて、敲亥はまたひとつ疑問を浮かべた。

なにゆえ姉は、小虎を都へ連れてゆくのをいやがるのか。小虎も、洛陽のことを耳にしてさぞ興を起こしたであろうのに、なにゆえ連れてゆけとはいわないのか。

談をせがむくせに、決して見てみたいとはいいださない。祖父を慕うくせに、会いたいとは口にしない。そんなとき、小虎の目はどこまでもつづく闇を呑んでいるように黒く感じられた。月のない夜に似ていた。

敲亥は小虎のへやをで、廊下を隔てて向かいにある客室へ戻ると、薄い夜具を重ねて耳まで覆い、眠りの糸口をつかんだ。

三刻もたったころか。先と変わらず外界はひどく騒がしい。敲亥は枕もとの水さしに手をのばした。

疲労感が肩にある。稽古のせいであろう。ひとたび目覚めてしまったからには暁まで起きているほかない。蠟燭に火を灯そうとして、ひそやかな音が聞こえた。

扉を叩く者がいる。牀台からおりて、囁きほどに誰何した。

「叔父さん、あけて」

甥のよびかけに扉をひき、漏れてくる灯に目を細めた。見れば小虎も起きぬけらしかったが、両手に燭台と剣をもっている。

「なにがあった」

「馬の嘶きが――五、六頭なんだ。館の厩からじゃない」

「賊か！」

「わからない、でも近い」

敲亥は壺にさしてあった剣をとり廊下にでた。耳をそばだてても、砂嵐の音しか聞こえない。いうと、小虎は首をふった。

「まちがいない。外扉のあたりだよ」

敲亥はうなずいた。

「ほかの者を起こしてひとつのへやに入れろ。音をたてるな」

命じてから敲亥は外扉へ駈けだす。沓はなかった。呼吸を殺して扉に耳をあてると、馬が砂を蹴る音と低い男たちの声がした。なにをいっているのかはわからないが、館の雰囲気を

うかがっている気配がある。とつじょとして砂漠にある館を、賊のものかと見ているようであった。

わずかな軋みが外からした。館の大扉をあけたらしい。大扉をすぎると外扉である。泊めてくれとも叫ばないのをみると、正しからぬ事情の者たちであろう。敲亥は鞘から剣をぬいた。

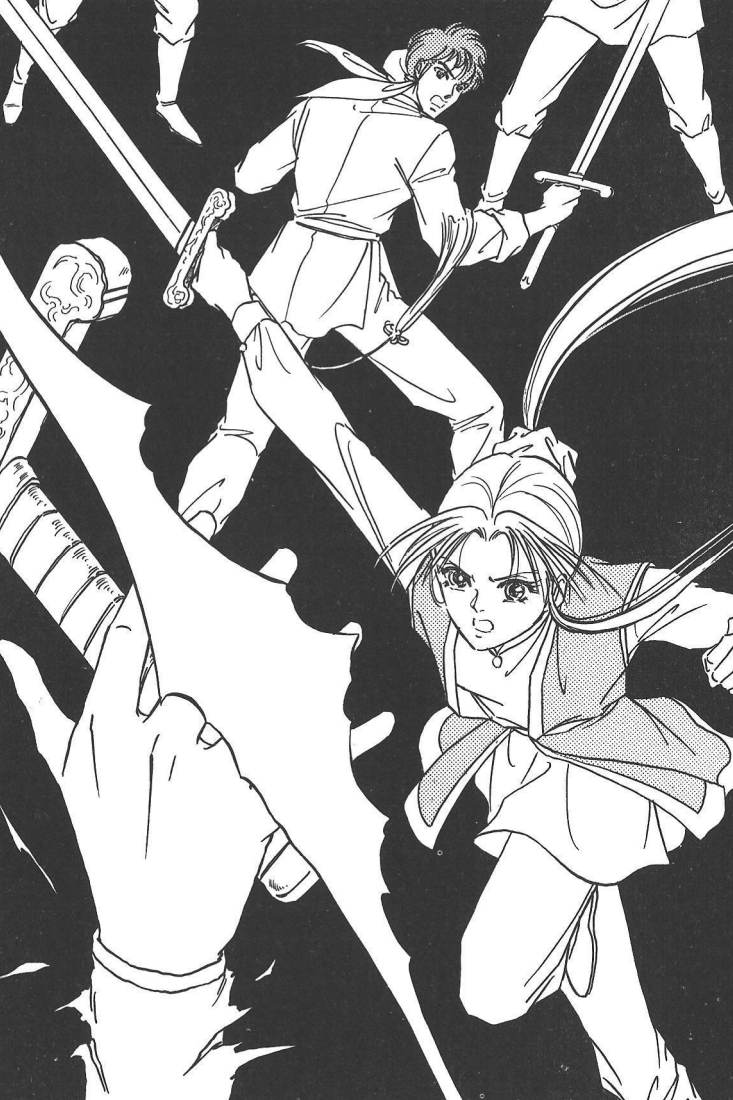
六人程度なら斬り伏せられるが、入ってきたところを二、三人も散らせば残りは逃げるやもしれなかった。

外扉が動く。黒い姿がのぞいた。足を踏みだして館を見まわしている、その額に敲亥は刀背を叩きつけた。

鈍い叫びと倒れる音、男に駈けつける足音、そして扉が強くひらかれた。敲亥は目を凝らして、敵の頭か首をうつ。刀背であるから死にはしない。倒れれば好都合だが、そうでなければ厄介だった。

総勢五人を叩いたが倒れたのは三人、それもやがて起きてしまう。敲亥は眉をしかめて刃を返し、腕か脚を見定めると剣で薙いだ。たちまち夜目にも黒い飛沫が床を汚し、そこにうずくまってしまう闇がわかる。

さらに二人が倒れ、三人も向かってくる兆しがない。ひといきつくと、また別のところから音がした。館の裏手である。



敵は裏にもいたらしかった。敵亥は舌うちして走りだす。あちらには小虎と使いものになる従者が二人だけで、敵は何人かわからないが、まともにやりあえるわけがなかった。

いくつか角を曲がると剣をふりまわしている男たちが見えた。誰かが壁の蠟燭に火をつけたのだろう、橙の光があふれまばゆいほどである。敵亥は目で訝いのゆくえを追った。敵は六人、そのうちふたりは従者に刀を向けており、ふたりは小虎を攻め、ふたりは館に踏みこもうとしている。

「小虎、腕を狙え！」

いって敵亥が賊を廊下で留め、ふたりの脚を刀ではらう。もんどりうって倒れる敵を越えて甥を庇おうとした叔父は、かわって従者を護らなければならなかった。

小虎はすでにふたりの賊の肩を斬って、血で手の甲を濡らしていた。

ようやく従者も敵亥の手を借りて賊を倒し、夜ふけの館には賊たちの呻きが床を這っているのみとなった。

敵亥は縄を従者からうけとると、外扉へ戻って五人を縛り、それぞれの刀を手に小虎たちのところへ足を運ぶ。召人のへやからは、朗蓉と漉賓が恐る恐るでてきて、あまりの惨状に瞼をふるわせた。

「なんて――ひどい」

「おそろしいこと」

呟いてから濾賓が叫んだ。
「小虎！　あなた、血が――」
小虎は呆然の面をふる。
「わたしの血じゃない」
敲亥が己の上布で小虎の手をぬぐった。乾きかけた血は粘って容易にとれなかった。
「洗うほうがいい」
叔父はいって、小虎の肩を叩いた。見あげてきた小虎の双眸は凍てついてひどく光っていた。
「わたしの血じゃない」
小虎は敲亥の目を見ていった。
「わたしの血じゃないんだ」
敲亥が腕でかかえこんでやると、小虎は白い手でそれにすがった。叔父はいった。
「おまえが斬ったんだ」
小虎はだまって小さくうなずいた。
「斬った奴をよく覚えておけ。それで終わりにしろ」
なおもすがりつく甥を、敲亥はあやすようにゆらすと、召人たちに水を頼んだ。

参

素姓を問いつめられると賊たちは渋々ながら口を割った。

洛陽近辺で二十件ほど窃盗を働き、役人の目を逃れるつもりで帝国領土を西南へくだってきたこと、砂だらけで難儀していたら館が見えたこと、水を奪う気であったことなどを頭領の男がいうと、残りの者もうなずいたり、あるいは敲亥や従者たちを睨めつけたりした。

敲亥が都にいるころは盗賊の風評でもちきりであった。とらえた男たちがその賊でないにしろ、役所へはとどけでねばならない。

「壹魯の役人に申しでよう。あけがた、従者をひとり使いにやる」

いった敲亥に朗蓉は目を見はった。頬が硬い。

「役人を呼ぶの？」

「護送してもかまわなかろうが、いろいろと面倒が」

「それでも、――義姉哥さま」

濾賓が口ごもった。朗蓉は諫めるように首をふる。そして召人と従者をひとりずつ不寝の番にしてから、おのおのへやへひきあげるようにいった。

小虎には手を洗わせ、ひとあしはやく眠らせてある。濾賓が傍にいようかと額をなでると

少し暗い目をしてことわった。あれではとうてい眠れまいと伯母は胸をつまらせる。
みなが散ると朗蓉と濾賓は敲亥をへやに呼んだ。しめやかに扉を閉じて、濾賓が燭台を手もとによせる。ふたりの女の面が、暗がりをおしのけてほの白くなった。朗蓉は敲亥に椅子をすすめた。
「なにがあってもほかには漏らさないとちかってちょうだい」
敲亥は目で肯じた。姉は睫を伏せる。
「昔のことよ。永劫に忘れはしないけれど、とても昔のこと」
砂風は去ったのか、夜ふけの館をめぐるのは気配をしのぶ闇ばかりで、朗蓉の声がへやにこぼれる。
「皇帝陛下がいらした」
敲亥は記憶をたぐった。己のいにしえ、脳裏に残るはるかな覚えに手がとどかない。
「徳のある皇帝でいらした。陛下にはおひとり、寵を賜った御妃があられたわ」
朗蓉は水で唇を湿すと、うながすように敲亥を見た。敲亥はいう。
「貴妃さまのことは、しばしば噂を」
敲亥の学朋が、牡丹行幸のおりに貴妃の面を拝したと悦んでいた。
天女の姿を見るに
白磁よりもなお白く

紅玉よりもなお紅し
燦燦たる光放ちて
刻まれたる宝珠に劣らず

謡われたそのひとを敲亥は見たことがなかったが、噂だけは巷のそこかしこにあったのを耳にした。

朗蓉はうなずき、ことばを暗がりにおくりだす。

「李貴妃さまはたおやかで慈悲厚い姚人であられたものよ。驕らず、憤らず、はかなげにお見うけしても、弱いばかりのお方ではなかった」

後宮は限度まで削減され、わずかな女たちしか残らなかったが、皇帝の寵は李貴妃のみが変わらずに占めたと聞く。けれども敲亥が李貴妃をえがいてみるとき、いつも女は涙を含んだ目をしていた。

「少しだけ病がちでいらしたけれど。恨みも妬みもご存じないような、貴なところがおありだったわね」

濾賓がどこを見るともなくいった。

敲亥は影のゆれる壁に目をあてる。

「天帝さまも陛下と貴妃さまをいとしんで、ひとりの公主さまをおさずけに。お母さまによく似ておいでで、陛下は彪玖公主とおよびになった」

皇帝は目が眩む。溺れてゆく。
踏みはずしたのか、もとよりそういった質だったのか誰もわからない。
「しあわせなご生涯をすごさせてさしあげたかったわ。なのに――謀叛！」
烈しさに敲亥は圧された。
「譲位なさったと」
「わたくしは慧命帝など認めない」
「わたくしだって認めませんわ。あんな、官吏だった男なんて」
つねに笑っているような女たちが悪しざまに罵るのを聞いて、少なからず敲亥は驚いた。
「皇帝陛下は崔を盤石のものにしようとなさっておられる。現に、枯れかけた国庫も空隙のないほど充ちてきたのを、姉哥うえたちには申しあげたはず」
「仁君をよそおっても、ほんものにはなれないわ」
「譲位は史実だと百姓もうけ入れた」
「譲位などととり繕っただけ」
敲亥は椅子に背をあずけた。
「官吏とはいえ、陛下は皇胤であられる」
濾賓は首をふった。
「血筋ではないの。あの男はしょせん官吏の器にすぎないといっているのよ」

「徳政をなしているのはけっこう。陛下に叛き、玉座を奪って手に入れた政ですものね」
唖然として敲亥は口を閉ざす。あまりないいようではあるが、まったくの偏見でもない。
譲位とはかたちばかり、その実はまごうかたなき謀叛だったという者も都にはいた。
朗蓉は深く呼吸する。
「李貴妃さまは陛下に添ってお亡くなりに」
慧命帝は廟を築き、いっさいの欲を断って現在にいたる。後宮もない。
公主は消えてゆくえがわからず、侍女たちは喋りもしなかった。
「慧命帝は手をつくして公主を捜しておいでだ」
「捜してどうするの。殺すにちがいないわ」
「次帝に冊するとおっしゃっておられる」
「官吏は嘘をつくものよ」
とりつくしまもない。敲亥とて慧命帝のひとがらに詳しいわけではないが、政治の浄さと百姓への慈悲は疑うべきものにあらぬ気がした。
「姉哥うえは公主のゆくえをご承知なのだな」
敲亥はいってしまっていた。いってからひどく耳鳴りがした。
朗蓉はしばらくだまって、それからわずかに笑うと呟いた。
「彪玖なのよ。陛下も李貴妃さまも、そうよんでいらしたのよ」

彪玖。小さな黒い虎。小さな虎。

敲亥の拳がふるえた。血の繋がりなどなかったのだ。むろん甥ではない。男でもない。

木刀で叩くのがためらわれるのも当然だった。小虎は女であった。

朗蓉と濾賓はひとめを避けて辺境へきた。謀叛にはじきだされた公主を朗蓉の赤児と偽って、男に見せかけて、役人から逃れて十六年をへる。

「なぜいってくださらなかった」

怒鳴りたいのを耐えていう。いらだたしいのを呑んでいう。

「ぬきさしならないところまで待つ気だったの」

さとされて敲亥は気づいた。壹魯の街まで往復するのに馬で半日、護送するにしても館の存在は役所にわかってしまうのである。

ひとのろくに住まぬ辺境に都ふうの館、慧命帝が求める者の条件をすべてもつ女がいる。感づかれぬわけがない。

「算段はついておいでか」

「北へゆかせるわ。嘉丞をまわって洛陽へ」

埜且から馬で二日のところに嘉丞がある。街から東へ二十日で都に辿りつく。

「洛陽は危険なのでは」

「お父さまのところのほうが危険よ。いっそ洛陽へ入って宿でもとったほうがあやしまれずにすむわ」

敵亥は椅子を離れて扉に手をかける。

「支度を。小虎――公主ひとりではこころもとない」

朗蓉はうなずいて、濾賓に路銀を運んでくるよう命じてから小虎のへやへ向かった。

扉を叩くと声がする。入れば小虎は牀に隠れて膝をかかえていた。

「支度をなさい」

小虎は唇をゆがめた。ゆくのだ、と誰かが囁く。

貴女は公主だと、お父うえは皇帝陛下だと、数えきれぬほど聞かされた。敵は慧命帝だともいわれた。討たねばならぬと教えられ、いずれは討つと己に銘じてきた。

剣の腕をみがいたのも、男でいたのも慧命帝を討つためで、なのになぜ館をでるのがつらいのだろうか。

「叔父さまがついてくださるわ。さ、はやく」

寝衣から衣をかえると、小虎は血を浴びた剣と赫だけを手にへやをでた。刃はていねいにぬぐったが、臭いが消えない。血へのおそれはなくなったものの、ひとを斬る感触が小虎を苛んだ。

火の気のない食堂には、敵亥が支度を終え椅子に腰をかけて、小虎を見、朗蓉を見た。

「路銀はもったの？」
敲亥はうなずき、麻布の袋を示す。
「従者たちにはてきとうに説いた」
「発てるわね」
濾賓が食糧と水を運んだ。小虎の腕で赫が甘えるように嘴をこすった。
「連れてゆくのね」
濾賓は小虎の面をのぞきこんでいう。小虎は目をあげた。
「伯母さまに、小さな蛇をもって帰ってくる」
――帰ってこられるか。
小虎は笑おうとしたが無理だった。涙は転がって襟に青い染みをつくった。
濾賓は小虎をだきしめた。
「帰ってらっしゃい」
小虎は濾賓から離れると、朗蓉の目を見た。
己の母は貴妃だという。己によく似た女だったという。けれども小虎の傍にいてくれたのは朗蓉と濾賓だった。はうえとよび、伯母さまとよび、――ひとを欺いたつもりだったけれど、ちがった。
血を異にしていてもふたりは小虎の帰るべきところであり、ほかにない。

小虎は朗蓉にだきついた。

「ははうえ」

「からだに気をつけて」

嗚咽する小虎をいとおしげになで、朗蓉は敲亥に頭をたれる。

「小虎をお頼み申す」

従者が、馬がそろったと叫ぶのが聞こえた。小虎は朗蓉の胸から面をあげ、赫を肩にのせる。

「ははうえも伯母さまも、息災で」

声には一片のふるえもなかった。ふたりの女はうなずく。

敲亥をうながして食堂をでた。廊下を左にすすむと厩がある。

小虎は肩に羽織っていた布をひろげて頭から覆うと、赫が砂に攫われないようにした。敲亥が小虎を見て、なにかをいいかけたがやめた。

馬は二頭、栗毛と漆黒が杭に繋がれている。栗毛は敲亥の乗騎で、叉雲とよばれる雌である。漆黒の雄は小虎のもの、気性が荒く小虎のほかにはなついておらず、覇帥とよばれている。

闇に溶ける毛なみの馬が、小虎に気づいて嘶いた。小虎は覇帥の首を叩き、かろやかに舞うがごとくに跨る。

敲亥も叉雲に騎すと、従者に礼をいい小虎を見やる。
「覚悟はあるな」
小虎は首をかしげて笑った。
「さて。戻れないんだ、発つしかない」
空は濃い藍に沈んで無数の光が降っている。嵐の余韻はほとんどなかったが、千里も離れたところから風の唸りがとどく気がした。
「どこへゆくの」
「北の嘉丞へ」
小虎は手綱をひいてからだを北へ向ける。
「飛ばすよ」
いうやいなや小虎は覇帥の腹を蹴った。馬はあるじの命にしたがって駈けだした。
敲亥がわずかに遅れてあとを追う。覇帥と小虎はひとつの闇に見えた。すべてを手放して、ふりむくこともかなわず疾ける闇。
不意にとぎれたことばが敲亥の耳をうった。
「……――で！」
朗蓉であろう、逆巻く風に煽られて散る叫びがある。それでも小虎は覇帥をとめなかった。

「どうか――ご無事で……！」

聞きとれたのはそれだけだった。敲亥は叉雲をさらに遅らせて、小虎のうしろにつけた。

衣越しに見える肩の線が頼りなく泣いている。

小虎はひとりになったのだと、敲亥は目をそむけた。

肆し

眠らず、馬をとめずで一日半。嘉丞の門をくぐったのは暁のころ、絶えず敲亥の視界から逃げるように覇帥を駈けさせてきた小虎は、ようやくにして衝動の鎖を己からほどいた。喧噪は市がたっているせいであろう、いまだ薄暗さのぬけないうちにもひとびとがひしめいて、売る声買う声を銭の音に混じらせている。

敲亥は叉雲から降り、麻袋の紐を手に巻くと小虎を見あげた。

「欲しいものはあるか」

からだを躍らせて土埃のひどい路に足をつけ、小虎は唇をむすんだ。

「干しなつめが欲しいな。それと水と」

ならぶ天幕に目をやりながら敲亥は歩きだす。小虎もそれにならって、あらゆる店をのぞきこんだ。

肉や野菜はいうにおよばず、羹があれば果汁もある。動きやすい衣が上下そろって吊られてあったり、いかなる経由で伝わったのか貝の飾りものがあったり、腕環や耳環、足環指環の類もところ狭しとあふれていた。すみの天幕の奥には大小の壺、その隣は山水画と、およそないものはないといった感である。

敲亥は干しなつめと干し肉、水を入れる大きな革袋を買い、市のはずれまでくると小虎をふりかえった。

「眠くないか」

「眠いよ。嘉丞にはどれだけいるの」

「宵には発つ」

「……そう」

敲亥のなじみの宿は市を見おろせるほど大路に近かった。馬を預けてひとへやを取る。敲亥は小虎を弟だといって宿のあるじにひきあわせた。

あるじは追従の笑いを頬に貼りつかせては、しきりに似ていらっしゃるをくりかえしてひそかにふたりの失笑を浴びた。

軽く粥を流しこんでから、粗末な布を敷いた台で睡眠を貪る。目を閉じたときには、すでにふたりとも闇を彷徨っていた。

耳から音という音がゆるやかに去り、かわりに小虎はなにか気のやすらぐ旋律にかかえられた。

覚えのある、乾いて細かに連なった旋律。

気づいてみればそれは降砂の音なのであった。

目覚めればあたりはごく淡い朱色ばかりがにじんで、へやの輪郭がおそろしいほど鮮やかに見えた。

小虎が頭をもちあげるのに凄まじいちからがいった。己のからだのすべてが石ほど重く、まばたきするのすら億劫で、刻苦して台から降りると敲亥がいった。

「起きたか」

敲亥はとうに覚醒していたものらしかった。小虎はだまってうなずいた。

「足がなえているなら、待ってもいいが」

「発てるよ」

かすかに、下卑た笑い声となにか唄う声が聞こえる。ほかにも多く客が入って、食堂で飯でも喰らっているのであろう。ひとめにつくのは避けたかったが、敲亥は夕餉をとってから発つことに決めた。

仕入れたものを袋につめ、わずかに小虎をうかがうと、疲れはてた童子のごとくにあわれみを催させる感じでうつむいていた。

皇帝の娘には見えない。かといって、もはや甥にも見えなかった。

食堂へ足を踏み入れると、七つの卓子が六つ埋まり、すみのひとつだけが忘れられてひっそりあった。ふたりはその席につくと、二、三品を頼んだ。

壁を震わす怒濤の騒々しさが耳に痛いほどである。いかつい大男たちが、そうとうに酒を

呻っているのであった。

小虎は剣を隣の椅子の背にたてかけ、頬杖をついて、朗蓉と濾賓がどうしているのか気にかけていた。

壹魯の役人に嘘をついただろうが、果たして疑われずにすんだのか。役人は追ってきているだろうか。己が見つかったら、ふたりはいかように処せられるのか。

慧命帝――董戒温は卑劣な男で、もとより玉座に就くべき能もないのを、欲の命ずるままに嵩帝を逐うことによって崔帝国の領土と政治を手にした、と濾賓は述べたことがある。そのころ、小虎はものごころついてほどなかったが、戒温なる男の所業よりも平生茶目な伯母が眉をゆがめて喋る面のほうがおそろしかった。

小虎のえがく慧命帝は、食堂で見苦しく乱れた男たちに似て、厳しく残忍な風貌の人間である。いつだか画で見た悪鬼にも似ていた。

首を刎ねる。金冠と頭が飛ぶ。痙攣する手脚と噴きあげる血流。そんな幻が何百も小虎の脳裏に散る。そんなときは、たいていやるせなかった。

男たちの笑いがひときわいやしく爆ぜて、小虎の鬱を容赦なく突き刺した。敲亥が耳をふさいで舌うちした。

頼んだ皿が運ばれ、箸をのばしたところに、ひとりの男が近づいてきた。三十ほどいる無頼漢のうち頭領格とおぼゆる男で、背はさほどでもないが筋骨隆々、敲亥よりひとつか

ふたつほど少齢であろう。
「あんた」
男はかすれた声で呼びかけた。小虎にであった。小虎は男を見た。
「あんた、女だよなあ。どうもよ、あんたを男だっていいはる馬鹿がいてよ、銀貨三枚賭けてんだ。な、女だな」
「男だ」
敵亥がいった。男は薄く笑って敵亥を見おろした。
「兄ちゃんには訊いてねえよ」
「男だ」
小虎がいった。
「馬鹿はどっちだ。わたしは男だ」
男は腹をかかえて笑った。
「こんなきれえな面した男がいるか。心配しなくっても手なんかだしゃしねえよ。なあ、女だっていっちまえ」
「だまれ！」
小虎はいいはなちざま男を睨んだ。千の刃よりもものを斬り刻む目で、獣もかくやと感じるような烈しい黒の目で。

「証が見たいか！　見たいなら見せてやってもかまわない。ただし、おまえの両腕とひきかえだ」

男は面喰らったが、なれた手つきで小虎の肩をつかもうとする。小虎はその不格好なてのひらのあいだをすりぬけ、見きわめられぬ速さで剣をかざした。

すでに鞘はない。薄汚れた木の床に光をなげている。

「童子に剣などあつかえぬと侮っているだろうが、試す気はあるな」

「おう。あるさ」

厚い唇を男は弓なりに反らせ即座に腰を低める。暇潰しとでもいいたげな面だが、四肢はしなやかに強ばって小虎に向かっていた。

「こちとら両腕は商売道具で、やすやすと渡すわけにゃいかねえんだ。どうだい、俺が剣を奪ったら、あんたはただで衣を脱ぐてえのは」

割れんばかりの喝采が湧いた。男たちのほころんだ口もとは頭領が敗けるはずはないといっている。宿の者は途方にくれていたが、とめに入りそうにもなかった。

敲亥は小虎の腕をひいて叱咤する。

「馬鹿者！　俺を敗かすようにはゆかんぞ」

小虎は男を視線で射たまま動かない。敲亥は小虎をうしろに匿っていった。

「なにぶん短慮ゆえ、ぶっそうなことを申した。こちらは刃を納める。そちらも戻っていた

だけまいか」

「どうしてもというならな。賭は、男が負けだ」

「女が負けだ、うすのろ！」

小虎は敲亥をおしのけ男に斬ってかかった。男は巧みに避けて半歩あとじさり、風を起こして突きをだす。酔いの気配がいっこうに見あたらない。小虎は攻撃をかわしながら男の気のゆるみをうかがう。

――あと少し……退いてやれば。

小虎の足が椅子につまずいてもつれた。男は小虎の腕を狙って手刀をふりおろす。

――かかった！

鋼のような男の右手を小虎は剣の柄で左にはらう。にわかに無防備を曝す胸、その心臓のあたりにふたたび柄をめりこませた。

倒れかける隙をついて鞘をすくいあげ、ゆるやかに弧をなぞる金属を男の額へ叩きつける。重量感のあるからだが卓子を巻きこんで床へ飛んだ。

口のどこかがきれたのか、錆の味を嚙みしめて男は頭をふる。軽い眩暈が消え、女とも男ともわからぬ敵へと目をあてようとすると、鈍い銀とまばゆい濃桃が視界に入った。

剣はひたすらに男を見ていた。敵も男を見ていた。耳を削ぐか鼻を削ぐか、あるいはどちらもするか。

男はとつじょ汗が凍りつくのを感じた。腰がなえ、逃げるに逃げられず、ふるえだけが這う虫のごとく襲ってきた。

「腕をもらおうか。腕が商売道具なら、脚でもけっこう。かわりに衣なんかいくらでもぬぎ捨ててやる」

無騒無音の食堂に、小虎の冷えた声だけが滲みた。敲亥でさえ小虎から迫る烈しいゆらめきに舌をからめとられてだまらざるをえなかった。

「応えないとは了解したのだな。では脚をもらう」

いささかのためらいもなく剣をふりあげた小虎に、男はよれて惨めな叫びをのばした。

「ゆるしてくれ、……頼む！」

「頼まれたところで、慈悲をたれる気はない」

「やめておけ」

すがられても容赦のない小虎に、敲亥はいった。

「むだに血を見るのはよせ」

小虎は敲亥の目を見あげ、それからようやくにして剣を鞘に吸いこませた。

男は慌ててもといた卓子に戻る。まわりの男を見る目つきが変わったのが判然としていた。

小虎と敲亥は席について、皿の残りを胃に片づけた。喧しさはことごとく霧消し、かすかに箸の触れる音や、碗を重ねる音がつづいたのち、男たちは食堂をでてゆく。

小虎にうちのめされた男はひとり、誰にも声をかけられなかった。

勘定をはらい、宿の玄関をでたところで、小虎をよびとめる者があった。

「剣士どの」

厩の木戸にもたれた黒い闇が動く。近づいてきて、それが食堂にいた男たちのひとりだとわかった。ひときわ小虎を珍しげに眺めていた男である。

齢はおよそ三十。鷲鼻で目が大きく、声律はやや高い。眉をこころもちよせているが、小虎と敵亥を決して悪くは見ていないのがふたりには知れた。

「拝見させていただいたが、けっこうなお手なみですな。そちらのご仁は兄哥うえか？」

「そうだ」

いまだ気の昂っていた小虎はぞんざいにうなずくと、男に目も留めず木戸へ向かった。

「そっけない返事をなさる。よほどあの男がお気に障ったらしいな。まあ、そこはひとつおゆるしを。腕に頼りすぎるのが珠に傷だが、根はなかなか俠気の者で、悪気はない男ですよ」

男は小虎の隣につきながらいった。じつに多弁である。小虎が反論しえないほどの速度でもあった。くわえて憎むに憎めず、小虎は無意識のうちに口もとをゆるめた。

「それがし、芳伯嗣と申す。辺境の雇われ衛士などが職。が、飽きたらず鬱々とすごしておるこのごろ。――ところで、剣士どのとご仁はどこへ向かっておられるのか、教えていただ

きたい」

「どこでもかまわなかろう。すまぬが急いた旅だ。失礼つかまつる」

敵亥がいって叉雲に乗ると、小虎も伯嗣に軽く頭をたれ覇帥に騎した。男はふたりをひきとめ、いいつのった。

「洛陽に向かわれるのではありませんか。であれば、ぜひ供にくわえていただきたい！　ご迷惑はおかけせぬ、先導役もつとめさせていただく。ぜひ、ぜひともお願いいたす」

小虎は笑いを含んだ面で敵亥を見た。敵亥は苦く目をつぶった。

洛陽へはひそかに入らねばならぬ。気どられれば必ず皇帝の手はのびてくるであろう。かような男が供になれば、不要な詮索をうけぬともかぎらず、役人の目をくぐりぬけるのは容易でない。

敵亥が断るつもりで口をひらきかけたとき、小虎がいった。

「わたしは、けっこう」

「さようか！　ありがたい。じつは、すでに馬は厩に繋いでおりまして。それから、いいにくいのだが」

伯嗣は視線を横にやった。

「供まわり志願なのは、それがしひとりでは――」

沓音のあとに闇から男ふたりの顔が浮かんだ。そろって笑みにほころんで、伯嗣の肩に手



をあずけている。

「邑惟砕。武人のまねごとで糧を得る者。伯嗣の義兄」

肌黒く、堂々の面だちをした右の男がいった。左のひとりは恭しく小虎に礼をとる。洛陽貴族ふうの、ものごし柔らかな男である。

「伯嗣どの、惟砕どのの義弟、占亭珈と申します」

敲亥は呆然とした。部外者ひとりでさえ足まといと感じたのに、くわえてふたり、目につく男が供するのだという。伯嗣の口に騙されたと、敲亥は渋面をつくって小虎を見た。

小虎は——みよりもなく、現皇帝を仇と狙う彪玖公主は、笑い転げそうな頬を偽兄によせた。

「どなたも、よいおひとがらと見うける」

敲亥を見て小虎はいった。敲亥はながく呼吸をして、頭をふった。

それを了承と見たのか、男たちは厩からそれぞれの馬をひきだしてきて通りの端で跨る。

「詐欺まがいのようで気が咎めますが。決して害をなすつもりではありませぬ。どうかご容赦のほどを」

面を伏せる亭珈に敲亥は曖昧にうなずいてみせた。亭珈の背には弓が、腰には矢筒がゆれている。惟砕は薙刀、伯嗣は山刀を携えて、おのおのやましさの微塵もない面がまえである。

これらの男たちがひとびとの目をひくのは必須だが、いざとなれば追いついた役人をまかせて、公主は逃亡をつづけることが可能である。敲亥は考えると、叉雲を軽く叩いた。

「急いた旅とおっしゃるが、いかほどのものですかな」

たずねてきた伯嗣に、小虎は黒く光る双眸を巡らせた。

「郷里で兄が役人を斬ったのですよ。死にはいたりませんでしたが、追っ手がかかりまして。祖父のいる街までゆくところ、なるべく目だたぬようまいりたい」

「街とはいずれか」

惟砕に小虎はいった。

「洛陽から少しばかり南の――たぶん、ご存じあるまい」

三人は互いに面を見あわせた。かすかな落胆ともとれる感情が表れたのを、敲亥はとらえた。

「まさか役所の敵とはおもわれなかったか。別れるならはやいうち、口封じに斬るようなことはいたしませぬが」

いう敲亥に伯嗣は笑った。

「なに、我らとて役所から厭われる存在に違いない。せっかく願って供となったのを蹴る気もござらぬし、ひと斬りを怖がるような神経などとうに消えておる我ら。別れるなどとめっそうもない、おふたりの目ざす街までまいりますぞ」

「ご返答、しかとうけたまわった」

小虎はいい、羽をふるわせていた赫を胸と衣のあいだに入れて覇帥の首をだいた。

「わたしの馬も兄のものも、たいそうな駿馬。見失わぬよう、ついてきていただきたい」

義兄弟たちがうなずくのを眺め、敲亥は叉雲を大路に放った。小虎の覇帥がつづく。伯嗣、惟砕、亭珈はぬきつぬかれつしながらも、さほど遅れることなくふたりのあとを駈けてきた。

防衛のために築かれた郭壁と旅の者の出入りする扉を視界におさめるやいなや、見るまに大路に埃を巻きあげて五頭の馬は夜の街道へと飛びだしてゆく。

二頭と三頭がはっきりとふたつの塊を形づくったころ、小虎はまといつく風と砂を気にも留めず、敲亥に叫んだ。

「わたしのでっちあげも、なかなかだろう」

敲亥は、ほこらしげな小虎の面から視線を黒くひろがる地平へと移すと叫びかえした。

「褒めてやる！」

敲亥は笑わずにおれなかった。なんとあっぱれでしたたかな、邪気のない公主がいるものか。

笑いはしばらくやまず、敲亥を苦しめた。堪えるために嚙んだ唇が熱を帯びて、夜気を露に変えた。

小虎を覆う布のはためきも小虎の四肢をおぼろにする濃い闇も、なにもかもが甘かった。少なくとも敲亥は、小虎が撒く光と甘さの軌跡を見た。笑いやむとせつなかった。蹄が地を削る音が激しい。その激しさにまぎれて敲亥は吐くほどに祈る。

――公主に、この世のすべてのしあわせを。

父母を見ることかなわず、育んでくれたやさしい手を離れ、ひとりで仇に刃を向けねばならぬ小さな虎に。公主に、ありとあらゆる天のなさけを。

吹きすさぶ夜をつんざいて、赫がひとこえ啼いた。

伍ご

ふたついえばたりるところを、伯嗣は十、惟砕はひとつで喋った。義次兄の談の要点をかいつまんで聞かせるのも、義長兄のいいたいことを補うのも亭珈だった。

嘉丞を発って九日が経ち、あいだに四つの街をすぎるころ、供の義兄弟たちの質も小虎にはすみずみまで察せられた。初めて見たときの印象とまるで違わないのがおかしくもあった。風貌はひとりひとり異なった感であるのに、三人がならぶと奇妙にもひとつの色だけに統べられる。無頼であって無頼でなし、仁者であって仁者でなし、との念がうけとれた。

小虎がそのようにいうと、伯嗣は豪放に笑った。

「まさしくご覧のとおり。我らは我らの気に入ったことしか手がけぬし、我らの気に入った人間にしか仁をおよぼさぬ。貫くべき志はこれひとつ、ほかはどうでもけっこう……ようするに、剣士どのとご仁を我らは気に入ったのですな」

惟砕も亭珈もうなずいた。小虎は悦びながらも反面うしろめたかった。

――うちあけたい。

それはまず敲亥がゆるさぬであろうし、また小虎も強くいいだせない。

たとえいいだしたところでどうなるのか。公主のいきさつを聞けば加勢する気も起こるだ

ろうか。しかし三人ばかりがくわわったとて、たいした頼みになるとは感ぜられぬ。

小虎と敲亥を、義兄弟たちは気に入ったといった。しかしそれは、やむをえずひとを斬った兄と、それを慕ってともに逃げる弟を気に入ったにすぎない。賢帝の噂あふれる皇帝を狙う女だと暴かれたら、果たしてついてくるだろうか。

――離れてゆくならとめはしない。巻き添えはつくらない。

しかし三人が慧命帝の政治を崇めていたら、敬っていたら、小虎を洛陽へ運ぼうとするであろう。つかまりたくなければ剣を向けることですむが、小虎は三人を斬るにしのびなかった。

敲亥は恐らく迷わずに斬る。わかっていればこそいえずにいる。気のよい義兄弟たちを殺されるのもいやだったが、なにより敲亥が罪を負うのだけは避けたかった。

公主を匿い、洛陽へ入るのを救けたとしても、敲亥が厳罰に処されることはあるまい。けれどもひとを殺せばまちがいなく死罪である。

死ぬのは慧命帝と己のみでたりると、小虎は胸に刻んであった。敲亥には、埜旦へ帰って朗蓉と瀘賓を支えてもらわなければならぬ。

天衣無縫の笑みの裏で、疑惑と逡巡の枷に嵌まった公主は、ひたすらに覇帥を駈けさせる。

曇った午、嶺嶋の街に入った。小規模の街ではあるが、およそ全種の武器の売買が頻繁におこなわれる地である。そのためか武人を多く見かけた。

邑惟砕は路頭に陳列された槍や矛などを喰い入るように眺めていたが、もとより嶺嶋には宿をとるのにきたのであるから、小虎と敲亥は店に目もくれず路をゆく。

宿では小虎と敲亥でひとへや、残りでひとへやを使うのがつねであった。敲亥は小虎にひとへやを与えたかったが、あまりに不自然なのであきらめざるをえなかった。

夕餉の卓子を五人で賑やかに囲むとき、小虎は皇帝を忘れたし、敲亥は公主を忘れた。ふたりは単なる旅人であり、悩みはなく、騒々しささえも耳にやさしい。そして無敵に無限に愉しいぶん、短かった。

へやに戻ると赫が小虎の肩に飛んでくる。革袋が視界に入る。夜はふけて、あいた窓からこぼれる銀の光が床に溜まる。なにもかもが逃亡の哀しさを示す。小虎は眠る。夜具を頬までひきあげて、からだをまるめながらとぎれとぎれのゆめを追う。

敲亥はあえて日数を数えずに宿から宿を転々とした。数えればどこかへ消えたくなった。洛陽にも埜且にもあらざる、帝国領土に含まれぬ域へ。地図にないところへ。あるいは天界へ。冥界へ。

公主が敵を討つことになんの価値があろうか。嵩帝も李貴妃も死ぬべきさだめの人間だったのだと、そう見てはならぬのか。

朗蓉や濾賓が嵩帝の徳をしのぶのもわからないではないし、貴妃の薄幸をあわれに感じないわけでもない。ただ、その無念を公主に負わせるのが、果たして嵩帝と貴妃の遺志だった

ろうか。

敲亥はふたりを知らない。ましてや臨終を見たのでもない。こときれるまぎわの呟きを耳にしたのは慧命帝のみ、その皇帝が口にせぬかぎり、ほかの誰もがわかりえないことである。

敲亥は公主を――小虎を、洛陽にいかせたくなかった。慧命帝のいる洛陽への路、それは死にいたる路である。小虎に、慧命帝を討ったのちながらえる気はまったくない。

小虎は復讐の念だけをかかえて、その重さにおぼつかない足もとを懸命に叱咤している。それだけが小虎を支えている。慧命帝も小虎も亡きあと帝国がどうなるのか、考える暇さえ公主はつくらないのであった。

ほんらいなら、現在の皇位に就くべきなのは彪玖公主のほかにはいない。慧命帝は、公主が発見されるまでのあいだの繋ぎであると己を見ているらしかった。

要は公主が冠を戴けばすむのである。小虎はそれをあくまで蹴るかまえであった。

仮に慧命帝を小虎が斬り、己も死んだとする。皇位継承の問題がただちに起こる。慧命帝に子はなく、むろん公主にもない。次帝に目されるのは亡き嵩帝の異母兄弟である。光厳帝の残した公子は嵩帝竜基を入れて五人、うち三人はすでに病死している。つまるところ、継承者の血をもつ公子はひとりしか存在しない。公子眞周である。

眞周は光厳帝の第二子、まっ先に太子候補からはずされたほどの愚鈍な男で、消極的ならば害の少ないものを、なまじ積極的であるからまわりはつくづく手を焼いた。

好色なことならぶ者なく、なした子は三十とも四十ともいわれるが、公子が認知したのは十五人で、みな富豪の娘のもとに生まれついた赤児であった。眞周は娼妓を数多く館によんだが、娼妓たちの産んだ子とはいっさい関係を断ったのである。

公子眞周は齢四十半ば、皇位に就くのになんの支障もないが、崔の存亡を危ういほうへと動かすに違いない。奇跡に近いが、公子が帝国を保って死んだとしても、つぎにはまた継承者の問題が現れることになる。十五人の子のなかに、ぬきんでて血筋の高貴な人間や賢い人間は見えないのであった。

敲亥はそれを小虎に説きたかったが、たぶん聞き入れないであろうと予測した。小虎の頭に崔も玉座もない。

慧命帝竜朔がひとり、黒々とした闇をなげかけるばかりである。

いまだ空の白みはじめぬのに、赫は敏感に暁の匂いを嗅いでせわしなく首をまわす。敲亥はわずかに眠りの淵をさまよったのみで目をひらいた。

馬の背にゆられながら、街道を飛ばすいちにちが幕をあける。ひとつの街を去り、ひとつの街に入るのをくりかえす。

壁にもたれると小虎の額から唇にかけてが見えた。睫が動く。小虎は起きていた。

「眠れたか」

敲亥がいうと、小虎は天井に面を向けた。

「ゆめと日常の区別がつかない。帰るところかゆくところかわからない。――こっちは、ゆめだっけ」

いたましかった。つらそうでないだけに敲亥をいたたまれない気にさせた。

ゆめだといってやりたかった。眠っていろと。そして、それが破滅的な色を帯びた考えだと気づいて愕然とした。敲亥は与えられた任務の枠を越えかけた己を見た。

小虎はからだを起こして敲亥に笑った。

「嘘」

薄れゆく群青をうしろにした小虎は天女を感じさせた。その母がたとえられたのとは違う、より強い天女だった。よりうつくしく光っていた。

小虎は公主でない。敲亥の傍で笑う女だ。

小虎は小虎でない。敲亥がなんの救けにもならぬ女だ。

小虎は、敲亥が護るひとりの女であり、死にゆく女であり、悔やまぬ女である。

敲亥はだまって目で笑いかえした。小虎は床に降りて首を傾けた。

「隣も起きたみたい。伯嗣の声が聞こえる」

扉がひかえめに叩かれた。いずこの宿でも亭珈は扉を叩きにくる。小虎が扉をひいて面をのぞかせると、亭珈がととのったみなりでほほえんだ。

小虎と敲亥が支度を終えて食堂におもむくと、三人はすでに卓子をひとつ占領してあって手まねきをする。

ふたりが席に腰をおろすのももどかしく伯嗣が品を頼み、くると惟砕がからだが小さいことを理由に小虎の皿へと料理を山のように盛る。小虎がどうにかそれをかたづけると、亭珈が茶をついでくれた。

宿をでれば天頂では透んだ青の布を重ねたごとく、山の端では白に金に、空は色を変える。五頭の馬にはかすかに疲れが現れた。洛陽への街道をもうなかばまできたのであるから当然ではあるが、追いつかれまいかと小虎は気をもんだ。

洛陽に近づくにつれ、小虎は徐々に脆くなった。笑ったかとすれば沈みこんだり、口をきかなくなったと見れば唄いだしたりする。

剣を手もとからはなさず、まなざし苛烈、いくぶん頬が削げて、少し面変わりした。稚さが消えた。その小虎を見て、不都合なことに惟砕が怪訝そうな呟きを漏らした。

「誰かに似ていると、いわれたことはないか」

――気づかれた……？

小虎が敲亥を見やると、肩が強ばっていた。にもかかわらず、平然とした面なのが小虎の笑みをさそった。

小虎は肩をすくめて惟砕にいう。

「さあ。ああ、でも……昔、なんとかいう御妃にそっくりだと伯母が」

ひとつの賭であった。これでのちのち、李貴妃に似ているとわかってもあやしまれずにいられる。みずから似ているといったのだから、まさか公主ではあるまいとおもわせることができた。

かわりにいったんあやしまれれば、不審に加速がついてゆくのをとめられない。かろうじて男だと見せかけてはいるものの、誰かひとりが女だと叫べば、それを疑う者はでてこないであろう。

惟砕は小虎のことばを耳にしても李貴妃に考えがいたらないようで、しきりと首をかしげていたが、やがて記憶をたぐりよせるのに疲れたのか、平生の態度に戻った。

小虎は安堵して覇帥の背に浮く汗をぬぐいながら、隣を駈ける敲亥を眺めた。

敲亥は小虎の視線に気づかず、えんえんとつづく路を見すえていた。険しい目であった。凍てついた炎が底にあるような、剣呑で苦しげな目であった。

――斬るつもりだった。

もしいま素姓が暴かれていたら、敲亥は三人を斬っていた。あらためてそのことを嚙みしめてみると、甘かった。

三人を斬られてもなお、哀しみを覆う甘さがあった。

なぜだか小虎にはわからなかった。

結の章　ゆめ辿るゆめ

壱

夕刻のきた地の南のはずれ、枯れた草ばかりが乾いて風に鳴るところに、忘れられた泉があるのを見つけたのは小虎であった。

あと七つほどの街をたどれば洛陽というところまできている。数は多いが距離はない。都に近いためかその盛況さは呆然とするほどで、昼夜変わらず大音声の絶える間がなかった。

敵玄は、宿からでぬよう小虎に命じた。この街には洛陽から流れてきた人間が少なくない。誰が李貴妃の姿を覚えているかわかったものではなく、小虎の顔を見られたが最後、役人に囲まれるのはまちがいない。そんな危険を冒させることはできなかった。

小虎もそれを重々承知していたが、嘉丞や嶺嶋とは比べものにならぬ規模のなにもかもは、ひたすら辺境で呼吸し育った公主の目を奪った。

敲亥が食糧を求めに宿をでた隙をついて、小虎は亭珈と連れだって街にでた。そうして雑踏にもまれ、店から店、大道芸から大道芸を見、疲れて騒がしさにまぎれてゆくうち、白茶けた原に踏みこんでいたのである。

荒涼とした景色であった。大路からとつじょ放りだされたので、よけいそう感じるのであろうが、あのにぎわいがまるで幻のようであった。

泉は音もたてずに透んだ水を吐いている。水面をのぞく姿勢で小虎が地面に座りこむと、亭珈はいった。

「そろそろ戻らないと、叱られてしまうでしょう」

「そうだね」

笑いながらも小虎は動かなかった。視界におさまる色はさびしかったが、やすらぎもした。降りしきる砂が見たかった。朗蓉と濾賓が見たかった。埜且の館はいまも黄塵にまみれているであろう。

後悔しているのではない。いのちが惜しくなったわけでもない。ただ、見たいもの、触れたいものが傍にないことがひどくつらかった。

小虎は腰をあげると、草を蹴って石畳の路へ向かった。亭珈はそのうしろにつかず離れずで足を踏みだした。

無表情のなかに双眸だけを険しくして己を諫める敲亥の姿を浮かべて、小虎は肩で笑う。

それをふるえととったのか、亭珈の声がした。
「わたしが無理に連れだしたといいましょうか」
ふりかえると亭珈は、柔らかに目で笑んでいる。小虎は首をふった。
「兄は見ぬくよ。わたしをよくわかっているから」
「お互いに慕っておいでなのですね」
小虎の頬がゆるやかにほころんだ。
亭珈はそのうつくしさを凝視する。風に形があれば、このようなうつくしさであろう。顕れては消え、消えてはまた顕れる。誰にも縛られず、己からさえも放たれて、その気配だけを匂わせながら空に溶ける。地に溶ける。
「失礼だが、似てらっしゃらない」
知らず亭珈はいってしまっていた。小虎はおどけるごとくに肩をすくめる。
「異父で。そんなに似てないものかな」
とたんに義兄弟たちの末弟はうなだれた。
「すまぬことを……」
「いや。気にしないで。考えてみれば、あんな険しい目に似るのはいやだから」
いった小虎に亭珈は首をかしげた。
「険しいと？」

小虎は笑い、両手で目を吊ってみせた。
「こんな目だ。ひとを見ているとき」
「さようですか。しかし、あなたを見ているときの目はちがうように感じますが」
小虎が亭珈の面を見あげた。品のある浄らかな面である。
亭珈は菩薩のように笑った。
「必死な目ですよ。禍がきたら、誰よりも、なにを犠牲にしても、あなたを逃がすちからのある目です」
小虎はだまった。亭珈は笑いを絶やさなかった。
「――血の繋がりなど関係ありませんね。あなたと兄哥うえどののように」
うしろめたかった。手をついて頭をさげたい衝動に耐えて、小虎は笑った。
薄紅の光を吸う宿から伯嗣がでてきたのが見える。なにかいっているが聞こえない。小虎と亭珈は手をふった。
案の定、敲亥は烈しい目で小虎を叱咤した。夕餉の席になってもまだ怒りを解かない敲亥に、伯嗣が声をかける。
「剣士どのとて童子ではあるまい。腕ではやたらな武人よりよほど強いのだし、かようなまでに気をつかわれるとは。少しゆきすぎなのではなかろうかな」

敲亥は、黙々と箸を口へ運んだ。小虎はいった。
「わたしは見境がないからね」
惟砕が笑い声をあげる。
「あの剣幕は凄かった。誰も手をだせなかった」
小虎たちが三人に会った、例の夜のことをいっているのであろう。伯嗣が腹をかかえた。
亭珈までもが箸をふるわせる。
「こんな、虫も殺せぬごとき姿であの気迫！　毘沙門天の降臨でもああはゆくまい」
義兄弟たちは愉快げに碗をゆすった。つられてかすかに笑いながら小虎が敲亥を見ると、眉をしかめてあるが両目はもはや厳しいものではなかった。
へやにひきあげ、小虎が赫に肉をやっていると、敲亥が白く細い布を放った。
「洛陽まで、顔を半分隠せ。役人が格段に増える」
小虎はうなずくと、布をもてあそびながらいった。
「伯嗣たちには、なんて？」
「俺が湯をこぼしたと」
かんだかい笑い声が敲亥の耳をうった。小虎は嘲るように笑っている。己をか、敲亥をか。
「叔父さんもいうね。嘘、嘘、嘘だ」

小虎の叫びから冷たい光が散る。敲亥はわななく肩に手をかけたが、公主はそれを激しくふりはらった。

「館の人間を騙して、宿も、あの三人も騙して！　騙さなければつかまるし、つかまりたくないからしかたない。わかってるんだ」

髪を波うたせていう。

「わかってるんだ。あと少しなんだ。恨みは全部慧命帝の首に叩きつければいい。それで終わりになる。でも気が狂いそうだ」

「小虎」

敲亥はよんだ。小虎の濡れた黒い目が敲亥をゆする。敲亥を突きぬける。

「やめられない、死をつかみにゆくのに欺くことをやめられない」

錯乱する小虎は、嵐のあいだ暗い雲を照らす閃光に似ていた。あらがえず、目をそらせず、惑わされるなら灼かれて。

「わたしの存在は嘘だ。なにも残らない。死んでも残らない。気が狂う！　気が――」

「小虎！」

敲亥は小虎をだきしめた。両の拳は胸に強くぶつかり、足は溺れる人間のようにもがいて敲亥を蹴った。冷えた爪が頬に傷をつくる。

痣はできない。痛みはない。喚く公主の涙を感じるところのほかには。

「小虎」

よばれて小虎の四肢からちからがぬけた。ひとりであれば倒れただろうが、ひとりではなかった。敲亥が小虎を支えていた。

「叔父さんにしか……いえないんだ」

囁きは低く、かすかだった。疲労にひしがれた小虎の額に、敲亥の声が触れた。

「叔父ではない」

小虎は愕然と目を見はる。当然叔父ではない。血族でない。わかってはいるが、なぜことさらにそれをいうのだ。

「叔父であるよりも、おまえの傍に」

慰めにしては重すぎた。いえば戻らないとわかっていた。けれどもいわなければすべては動きだせない。

小虎も敲亥も動きだせない。闇のない方向へ。

遠慮がちに扉が鳴った。伯嗣の声をともなって、軽い木の音がする。

「入ってけっこうか」

かまわぬことを告げると姿がのぞく。義兄弟たちがふたりを見て、困惑の色の濃い顔をした。

きりだしたのは伯嗣である。

「最初に誤解なきよう申しておくが、我々にはいっさいやましさはござらぬ。あえていえば、剣士どのの声が少し大きかったのによりますな」
「なにやら口論なさった気配が。我々に端を発することであれば、腹蔵なくおっしゃっていただきたいのです」
「気づかい不要。我々とて、疎まれてまでついてゆく気はないのでな」
つづける亭珈、惟砕に小虎は首をふる。
「疎むなど。口論は別のことで」
敲亥は即座に小虎を遮り、へやのすみにあった椅子をひいてきていった。
「口論ではござらぬ。あますところなく申しあげるが、ご仁たちには腰をすえて聞いていただかねばならぬ」
椅子を小虎に与えると、敲亥は床に座った。そして三人が車座になるのを待って、ひとことひとことを紡ぎだした。
いまは亡き皇帝の、妃のいのちを。
疾けてゆくひとりの公主の叫びを。

月の沈まぬうちに宿をでた。いまだ街からは喧しさが消えないが、さすがに商人以外の影は少ない。

しばらくゆけば街道はふたつにわかれるはずであった。ほんらいとるのは左だが、占亭珈だけは右へ馬を駈けさせる。苑晋の街へいたる路である。

苑晋は旭日昇天のごとき街道からわずかにはずれ、客で賑わうことはないが、裕福な人間の多い街で、文孫甜が居をかまえている。亭珈は孫甜のもとへ遣わされたのであった。

小虎を覆っていた鬱はぬぐわれ、削げた頬は戻らないが笑いのまろさはかえってきた。敲亥にはそれがまばゆいほど悦ばしい。

たとえ慧命帝を殺すまでの刹那の解放であっても、狂気の波に攫われるより笑い声のあるほうがどれだけすこやかなことか。

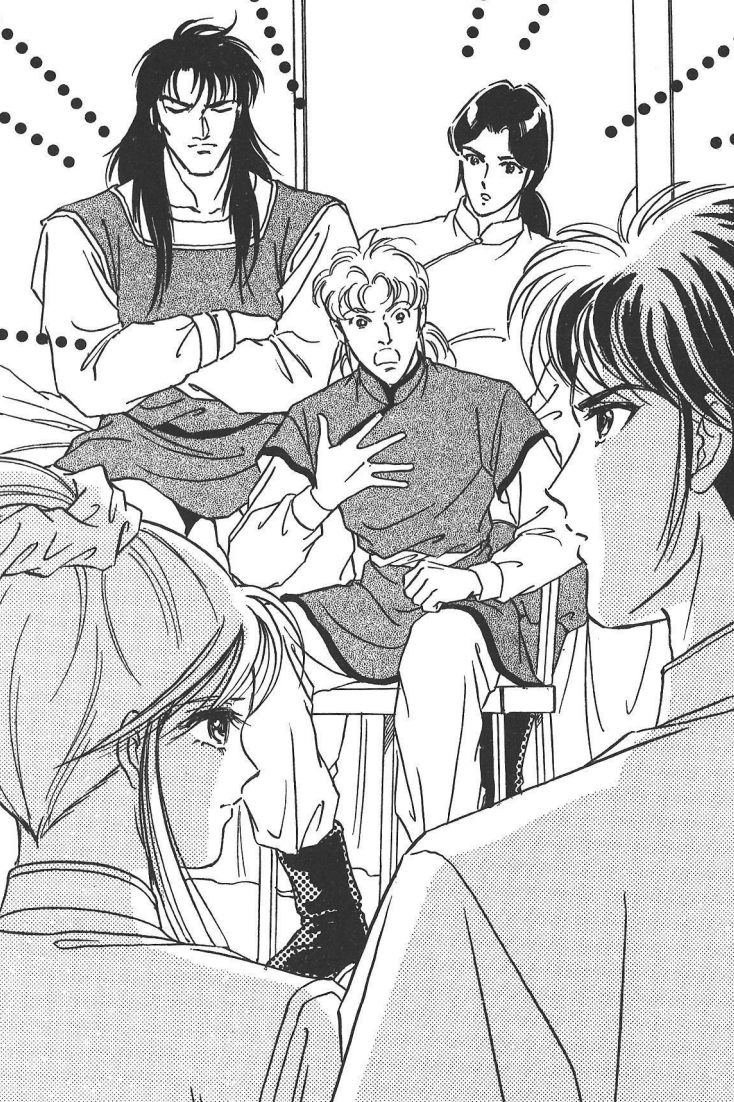
亭珈がぬけると伯嗣に歯止めをかける者がいなくなるので、その多弁さは縦横無尽に小虎や敲亥の耳をかすめる。

小虎はなにをいわれても愉しげであったし、敲亥はだまりこむけれども気になっているわけではなかった。

惟砕は閉口した風情で目を閉じるのがつねであったが、饒舌な義弟を好いているのがよくわかる。伯嗣も義兄のことをたずねられるとなお饒舌になった。

「そちらがなにひとつ偽らずおっしゃってくださったのだから、こちらもそれにならわねばなりますまい」

小虎は昨夜の情景を反芻する。去られてゆくとしたらひきとめるつもりも斬るつもりもな



かったが、哀しかった。

伯嗣はさらにつづけた。

「我らが供を申し出たのは、単なる興味からではありませなんだ。いま考えると、やぶれかぶれだったのですが……我らは辺境に飽きていましてな。どうにかして都へゆきたいと、かねがねから」

亭珈はすまなさそうに目を伏せる。

「洛陽へゆくだけなら誰にでもできます。我々は仕事が欲しい。人足などの、その日凌ぎの仕事ではなく、れっきとした仕事が。しかし洛陽では、我々のごとき素姓の知れない人間がそんな役目をもらえることはありません」

「なんとかつてをえようと、鄙では大きな嘉丞の街へまいって、地位のありそうな人間を選んでおりました。そのとき、ご仁と公主どのをお見かけしたしだいです」

惟砕は伯嗣がいうのを聞いて笑った。

「伯嗣の奴が、あのふたりは絶対に洛陽からきた者だと。貴族か、貴族でないにしろ豪商の係累だ、いまこそついてゆかねばと申して」

伯嗣がきまりわるげに頭をかいた。珍しく惟砕がつづける。

「果たしてどうかと疑っていたが、みごとにいいあてたわけだ。貴族どころか、……公主どのとは」

そのことばに残りのふたりは口をつぐんだ。男でなく、ただの剣士でなく、皇帝の娘子。天女といわれた母をもつ皇胤。

帝国領土のすみの街の、武人あがりの人間が、生涯まみえることなく終わるはずの貴な人間である。

けれどもこの、気骨のある男たちのまえで椅子に腰をおろす姿は小さすぎる。みなりとて一般の民と変わらず、旅に色褪せて、みすぼらしくはないがあまりに質素である。

「公主じゃない。……父も母も亡いから。小虎とよばれるのがいちばんだ」

「そういわれるが、あなたには皇位に就ける血が」

小虎は笑う。

「玉座なんていらないよ。仇を討てれば」

「それでは皇位継承者が存在しなくなる」

亭珈がつぶやき、小虎の目をのぞきこんだ。

「噂は聞いています。慧命帝には後宮がない。冠を譲るに値する血族も。空位を埋めるのは先帝の兄哥うえ、眞周どのしかいないと」

小虎は眉をひそめた。朗蓉も濾賓も敵のことのほかはいわなかったし、小虎も敵を殺したあとの帝国のゆくえなど眼中になかったのである。

「眞周どのに政治的な能力があるとは誰もいいません。それでも百官にしたがうならどうに

かなるでしょうが、国庫のたくわえをことごとく遊興に使うおそれが充分にある。帝国があちこち裂けるのは必須です」

「でも」

反論しかけた小虎を手でとめて、亭珈はいいつのった。

「争いが起こり、ようやくおだやかな生活を手に入れた民が、また困苦に喘ぐ。避けることができるのは、公主どのだけです」

小虎はうなだれた。民が困苦に沈むといわれても、己とは関係のないことのように感じられる。

継承者など血が繋がっていればかまわなかろう。どこまでも血統を溯れば見つかるではないか。

「首をとって冠を奪えば、慧命帝の所業をわたしもすることになる」

惟砕は小虎に強くいった。

「奪うのではない。冠は公主どののものだ」

小虎は敲亥を見る。敲亥は見かえすがだまっていた。

「公主どのが、どうしても厭だとおっしゃるならしかたないことですが。洛陽まではまだ間がある。新帝としてたつ案を、熟考してはいかがかな」

眠れなかったが頭は冴えていた。額から顎にかけてきつく巻きつけた布は妙な感触であ

る。

亭珈のものごしと面だちなら、そうそうあやしまれず孫甜にとりついでもらえるであろう。ふたつ先の街の宿に、しばらくのあいだ洛陽にひそめる資金をうけとってくるようにいってあった。

――討つのだ。

なにもかもはそれからである。討たぬうちはなにもできない。

「しかし、五人兄弟とは無理がありますなあ。どの点をとっても似ておらんのですからな」

いった伯嗣に小虎は大声で笑ってみせた。

「異父で、といえばいいんだ」

弐に

四人が宿へ入ったのは午をややすぎたころである。亭珈の姿は見えない。湯を浴びたのち台に寝転んでいた小虎は、石壁のくりぬきにたてかけられた木の板を少しずらして店々を見おろした。

都に近づくと、街は判然とひとつまたひとつと大きくなってゆくので、いまはさほど驚かなくなったが、人間の多さにはいつまでたっても目を惹かれる。

官吏ふうの者も、学生ふうの者もいる。刀をほこらしげに示して歩く男。走ってきた童子たちが古びた紙の束をかかえている男にぶつかって、花弁のごとき紙がいちめんに散る。

光るほど濃い黄色や青の衣をまとった女たち。さしている釦はわずかな動きでもゆれて金銀に灼やいた。路頭で売られている安値の飾り石を、ためつすがめつしては笑いさざめく。淡い桃色や紫の、あれは玻璃であろうか。

小虎はふと首にかけていた袋をさかさにした。冷たい手触りの環がてのひらにでた。ゆき交う女たちのように指に嵌めてみる。けれども環は大きすぎて、手をさげると膝に転がった。

「少し眠っておけ。亭伽どのがきたら起こす」

敲玄の声に耳を傾けて、小虎は硬い枕に頭をのせた。

「なんてよぼうか」
眠たげな小虎がいい、敲亥は首をかしげる。
「甥じゃないからね。なんてよぼうか」
つぶやきと小虎は眠りの中に消え、暗い目をした敲亥だけが、遠いざわめきの囲むへやに残された。

――見たこともない。
白い石畳がどこまでも敷きつめられて、灯はないのにほのかな光がある。まるい柱が数えきれぬほどの列になり、ひろさが感じられた。
奥のほうは薄闇が降りて定かでないが壇らしい。壇の中央にはかくばった影がひとつある。冷え冷えとした硬い線のえがきだす形に覚えがあった。ただしありふれた形よりも数倍大きい。複雑な凹凸をくりかえす輪郭から、彫刻や装飾が施されているのがわかる。
けれども、動きだしそうなほど孤独だ。
左手にはあけはなたれた扉。外にも石畳はえんえんとつづく。風が吹く。闇がゆれる。
不意におぼろな光の洪水が、空気までを銀に染めた。
壇はくっきりと姿を現す。そこにすえられたものも。流れる音がするほど惜しげなくそそがれる光のなかに、細かな宝珠の艶さえ浮かびあがらせる。

――玉座。

荘厳ではあった。うつくしいともいえた。だが、欲さない。欲せない。

雲のひらけたあいだから波をこぼす光の海は、いまだ去らない。むしろいっそうこの世界を呑みこむように強くなる。

玉座のうしろは壁、天井からは朱の幕が左右にたれていた。なにかの角がのぞいている。金の額に収められたふたつの画だ。

風はゆるやかに、絶えずこの空間を吹きぬける。音もなく幕ははためいて、あと少しでなんの画か見える。

強い風を待って百刻も千刻もすぎた気がしたころ、甘く匂う空気の塊がきた。画の全貌が目に入った。

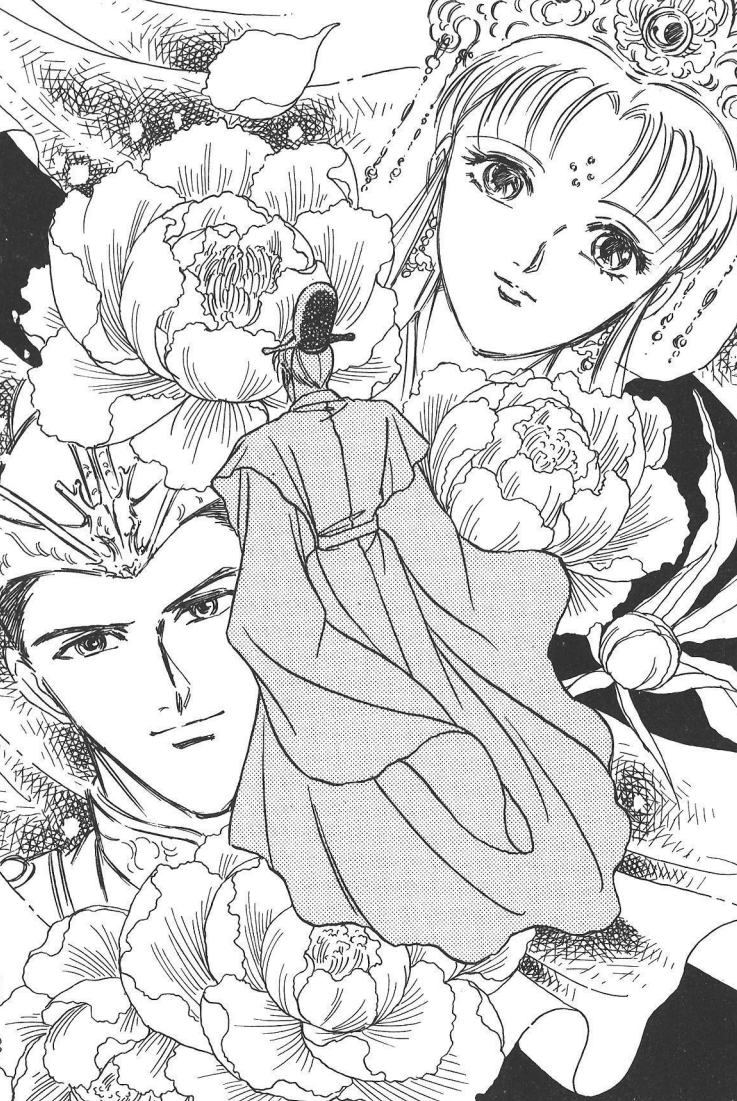
紅の牡丹。口もとに笑みを刻んだ女。

白の牡丹。金の冠を戴いた男。

嵩帝と李貴妃である。どれだけ似せてあるのかわからないが、すみずみまで精緻を極めていた。唇の色、双眸の色。

釘づけになっていたはずなのに、からだはいつか外にでている。あの扉をぬけたのであろう、変わらず床がどこまでも白い。

夜気とは別の匂いが漂った。朱幕をひるがえした風の匂いであった。香か、花にも感じら



れる。ときには強く、ときには弱く、粒子の渦をなす。

視界の端にある建築は廟の、反った軒と扉のない壁。なかには階段と祭壇、木の枝と壺がある。右の、闇よりもなお暗い影は石像であろうか。

しかしそれは動いた。人間であった。肩の細い男が、香炉を壇にのせる。甘い匂いがひときわ濃くなった。

男は石畳に膝をつくとうなだれた。懺悔をするかのように深く、祈るかのようにみじろぎもせず。背中がかすかにふるえているのは嗚咽のためか。

——慧命帝！

顔が見たい。見てもほんものだと断をくだすことはできないが、それでも天が教えてくれそうな気がした。

——慧命帝。

仁君。徳のある為政者。敵、仇、斬るべき男。娶らず、国をととのえ、税を軽くし、佞臣を殺し。兵を鍛え、庫を充たして。

影は頭をあげて立った。こちらをふりむいて廟からでる。

目を凝らしたとたん、覚醒はとつじょとして小虎に降ってきた。

ゆり起こしたのは敲亥である。小虎は台から足をなげだすと己の頬を叩いた。

「亭はきた？」
訊くと敲亥は唇を曲げる。
「ふたりきた」
小虎は首を傾けた。敲亥は扉へ近づき、つかみをひく。いく人もの足音が重なってまず三人が入り、もうひとり、小柄な老人がへやに踏みこんだ。
どなたかと小虎がたずねるよりもはやく、老人は小虎をまじまじと見つめていった。
「彪玖公主さま！」
たちまち皺にせばめられた目から水滴がこぼれる。老人はぬぐおうともせずつぶやいた。
「似ておいでだ。写しとったように似ておいでだ」
李貴妃のことをいっているのであろう。小虎はゆめで見た女の画を脳裏にえがく。己の画だとは感じられなかった。別の人間だとわかった。
髪型も色使いも小虎からかけ離れていたし、なによりもまとう気配がちがった。あんなにも哀しげな、あきらめの強い笑いを小虎はしたことがない。
「父だ」
敲亥の声に小虎は目を見ひらく。老人は頭をさげた。
「ひさかたぶりにお目もじつかまつります。文孫甜でございます。公主さまが、つつがなくこうまで育ってこられたとは……残りわずかな命数も増える気がいたします」

小虎は台からおりていう。
「剣のお礼を」
「お礼などおっしゃる必要はございませぬ」
孫甜は手をふった。灰色の衣はそこここがほつれ、沓も底がぬけそうに古びたものである。
「慧命帝はすでに、あなたさまが都へ向かっておられることをご存じです。館へ役人が十五人ほどつかわされてきました」
それぞれが顔を見あわせた。孫甜は涙を指でではらいながら笑う。
「館をでるのに困ったので、衛士たちに蹴散らすよう命じましたが、それでもこんなみなりでなければひとめにつきましょう。畏れ多くも公主さまの御前でこの衣とは無礼にすぎますが、どうぞおゆるしを」
小虎は孫甜の顔をのぞきこむ。
「お祖父さま」
「あなたさまのお祖父さまは、別にいらっしゃいました」
老人のかすれた声が小虎をさとした。
「ひとりは先々帝、光厳帝竜祥陛下。いまひとりは李丹瑛どの。おふたりとも、公主さまの誕生なさる前に亡くなられましたが」
実感がなかった。公主といわれてもよばれた気がしないのとおなじに、ひとごとのようで

ある。

とうに亡い血族よりも、剣や食糧に託してやさしさを与えてくれた孫甜のほうがよほど慕わしい。薄く記憶にゆらめく李貴妃の死よりも、朗蓉や濾賓にくだされる罰に傷を負う。

孫甜はこの先の街の状況を五人につぶさに知らせると、夜半の闇にひそんで帰った。涙の乾く暇もなく。

眠れそうになかったが、敲亥にいわれて小虎はふたたび寝台に横になる。義兄弟たちと敲亥は、声をひそめて喋っていた。

「もはや急いて追っ手から逃げる必要はあるまい。いたるところ役人ばかりなのだからな」

「慧命帝の気がゆるむまで、この宿に滞在するか？」

「それでは機がいつくるかわかったものではない。やはり洛陽に入ろう」

「洛陽ならば、役人も多いがひとも多い。まぎれるのがたやすいな」

「さびれた、目につかぬ宿をとって、公主どのと誰かひとりをおけば心配なかろう。三人は街に散って、慧命帝や皇宮のことを聞きださねばならぬ」

唄のように談を聞き、目を閉じながら小虎は考えてみる。

あのゆめ、玉座、画。廟と慧命帝。あの白い石畳の空間は、おそらく皇宮のどこかであろう。なにゆえ見えたのか。十数里も遠い宮殿の、いまならぬ夜が。

――手がだせない。

仇敵の背中は嗚咽していた。声をしのんで、殺して。

あまりにあわれで刃を突きつけられなくなる。あんなにも細く痩せた人間だとは、頼りない肩の人間だとは。

小虎の腕なら簡単に斬れるにちがいない。そうして十六年間負ってきた使命は終焉を告げるのだ。

睡眠の触手はおそろしいちからで小虎を底へひきずりこんだ。三人がへやをでてゆく音も、それから敲亥がしばらくのあいだ小虎を眺めたこともおぼろにする。

漆黒の底には小虎のほかになにひとつなく、ゆめさえも姿を見せなかった。

衣にもからだにも泥をこすりつけ、五人は馬の脚を暁の街道にゆっくりと踏ませる。駈けるとかえって詮索されるものだといった惟砕にしたがったのである。

ひと込みのなか、ひらけた路だと、小虎の面の布に興を起こして声をかける者が数人いた。そのときは伯嗣がいう。

「火傷ですよ。名医の噂を聞き、薬をいただきたくてやってきました」

胡散臭げな人間には、惟砕が睨みをきかせる。それでたいていをやりすごした。

もはや街と街の境は見あたらない。にぎわいがにぎわいをよんで連なっている。官吏らしき人間ともかなりすれちがい、そのたびに四肢を硬くしたが、さいわい気づかれなかった。

気づかないのももっともであろう。官吏たちが捜しているのは公主である。竜と天女にたとえられたふたりを父母にする女である。薄汚れた容貌の、辺境の民のごとき者ではない。

敲亥は、父のつぶやきを胸のうちでくりかえした。

『もちろん儂は公主さまをお救い申しあげたい。仇を討たせてさしあげたい。だが慧命帝は非のうちどころのない政をなさるお方だ。百官のこころも百姓のこころもつかんでおられる』

宿の玄関から送りだされるときに孫甜はいい、敲亥の肩に手をおいた。

『嵩帝陛下は賢くあられたが、貴妃さまと公主さまに目が眩んでしまわれた。あのままでは崔が崩れたろう。慧命帝がなさったのは謀叛だが、やむをえなかったことだと、いまでは誰もがいっているのだ』

『公主が皇帝を殺せば、称賛よりも咎めの声が大きくなりましょう』

孫甜はうなずき、苦しげに頭をふった。

『どこにも波風がたたぬようにするには、公主さまが皇宮にお入りになって冠を戴くほかない。慧命帝は譲位なさるおつもりだ。敲、かなうれば公主さまにそう申しあげておくれ』

それは敲亥も承知していた。けれども口にだせない。なにが小虎の呻吟を軽くし、あるいは重くするのかわからないのである。

崔を破滅させても敵を冥界へ堕とすか、仇を見逃しても民をやすらげるか。

小虎は決して鬼に化したわけではない。民を、崔帝国を斬り棄てられないであろう。

そしてまた、慧命帝を殺す念も消すことはできない。譲位をうけろなどといえば、ますます頬が削げるほど考えこむにちがいない。敲亥は小虎を追いつめたくなかった。

沈みながらも、去りぎわに孫甜がつたえた烈しい衝撃をあらためて胸に刻んだ敲亥は、路や人々に目をやった。

「事実かどうかわからないが、眞周さまが刺客をはなったと聞く。いのちにかえてもお護りするのだぞ」

いかほどの人数か、どの街にひそんでいるのか。洛陽までつづくこのひといきれのなかの、どこで襲ってくるのか。警戒を要するのは夜であろうが、大勢を恃んで囲まれれば公主ひとりを逃がすのも難しい。

空が暗くなるころには、三つの街を越してきていた。大路からそれた、つくりのあぶなげな宿にへやを取る。小虎は顔から布をほどきたかったが、誰に見られるともかぎらないので、ざらついた感触に耐えた。

宿に食堂はなく、携えた食糧で腹を充たした。発つのはあけがたと決めて頭を休める。敲亥は眠るまいと己を叱咤した。

刺客の件は義兄弟たちにいってあったが、小虎には聞かせていない。尖った神経をさらに尖らせることはやめたかったのである。

孟冬の冷たい空気が石と石の隙間から流れこみ、敲亥の額をなでてゆく。小虎の呼吸を耳

にしつつ、朗蓉や濾賓、孫甜のことを考えていると、さやかな衣ずれが扉から漏れた。
扉が叩かれるのを待つが、その気配はない。三人ではない。
敲亥は無音で剣を手にし、床におりる。石のせいで軋むこともなく、扉の脇にからだを寄せた。
突然、扉が割れるほど強くひらかれる。飛びこんできた人間の腰を、敲亥は凄まじい勢いではらった。
血の臭いが鼻につく。敲亥は叫んだ。
「小虎！　動くな！」
腕を叩き斬り、脚を刎ねる。入り口がせまいのがさいわいして、刺客はひとりずつしか入ってこられない。三人も起きだしたようで、敲亥の刃とは別のところで獣に似た声があがった。
十三、四人ほど斬り伏せたとき、宿の人間が燭台を手にして階段をのぼってくるのが見えた。
どもりながら事情を問うあるじに、敲亥は短くいう。
「窃盗だろう」
「さよう。夕刻からつけられていた」
伯嗣はつけ足すと、あわてふためいて役人を呼びにゆこうとするあるじを留め、けっこうな額の金を渡した。

「こちらにはなんの罪もないが、面倒は避けたい。先を急ぐものでな。これは宿代と布代だ」
亭珈は寝台から夜具を運び、血を浴びた衣を覆うよう敲亥にいっている。
「役人には、窃盗どうしの諍いがあったとでもいってくれ」
あるじはがくがくとうなずき、金を懐へねじこんだ。伯嗣はそれを見て四人とともに宿を出、馬に跨った。
「窃盗じゃないね」
小虎は囁くと、隣の惟砕を見あげる。惟砕は顔をしかめて亭珈を見、亭珈は伯嗣を見、伯嗣は敲亥を見た。
「慧命帝の刺客だろう」
いう小虎に敲亥は首をふる。
「刺客だが、慧命帝の手の者ではない」
「眞周どのですよ」
亭珈のことばに小虎は笑った。
「わたしが邪魔なのか。皇位などくれてやるものを」
いい終えるやいなや、覇帥がいないて駈けだした。狂ったような速度で裏路の闇に溶けてゆく。
「小虎！」

敵亥は叉雲を蹴って追う。三人がつづいた。
「矢だ。刺客はまだいたんだ」
伯嗣はつぶやき、もどかしく馬に鞭をあてる。
刺客は宿から小虎たちをだし、外に現れたところを弓でしとめるつもりだったのであろう。矢が覇帥に突き刺さったのは天の采配としか察せられない。
敵亥は迫る恐怖に呑まれていた。小虎を見失ってしまう恐怖。手がとどかなくなる恐怖。覇帥の蹄の音のほか、己の声も聞こえない。手綱の感覚も叉雲の背の感覚もない。魂だけが小虎のゆくえを求めて夜を飛ぶ。

「覇帥！　とまれ！」
小虎は耳もとで叫んだが、黒馬はひたすら脚を動かした。ひどくゆらされながらも矢をぬく。毛皮も肉もえぐれて無残な傷ができた。
「覇帥！」
背を叩き、鬣をつかみ、むだと悟ると首をだく。疲れ果てるまで待つしか方法がない。
そのとき、腕が幾本ものびて覇帥ごと小虎を横路にひきずりこんだ。不意にからだが宙に浮く。気づけば覇帥は腹を地につけて倒れていた。
刀の鞘が鳴る音で跳ね起き、剣をかまえる。面だちまでは見えないが、男五人に退く隙を

断たれていた。

腕力のちがいは歴然としている。刃で刃をうけとめれば、ねじ伏せられて死ぬことはまちがいない。とっさに考えて中央の男の腹に剣を突きたてた。

――救けがくる。

ぬいた刃でふたりの顔を薙ぎ、残りのふたりを睨みつける。四人がくるまでもちこたえねばならない。

右の男が風を唸らせて剣を振りおろした。かわして腕を狙うが左の男の突きがきて姿勢が崩れる。ふたたび右から刃。避けきれずに肩を斬られた。

痛みより衝撃より、強い怒りが小虎の枷をはずした。

跳躍してひとりの胸に飛びこむ。剣で肉をつらぬく感触も、もはやおそれるにたりなかった。残ったひとりは敏速に踵をかえす。小虎は追って刀の柄をてのひらに喰いこませた。

「逃げる気か」

いって右腕を斬り棄てる。転んだ男の背を踏んだ。

「眞周とやらの刺客か。馬鹿な人間だ、たかが金の椅子のために何十人も死なせて」

小虎の低い声に、男は喘ぎながらいった。

「殺さないでくれ」

「眞周にいえ。わたしは玉座などいらない。いるのは慧命帝の首だけだと」

男はよろめいてたちあがった。
「なんてえ公主だ。大勢殺してもたりずに、父帝の首までいるのかい」
小虎は眉をひそめた。
「父は死んだ」
弱い哄笑が地に這った。左手で腹をかかえた男の哄笑が。
「洛陽じゃ誰もがいってるぜ。あんたは慧命帝の胤だよ。天女が竜の目をぬすんで、人間とつくった赤児なのさ」
「嘘だ！」
小虎の叫びが駈けつけた四人の耳に入った。男は逃げだした。追おうとした伯嗣をとめ、敲亥は小虎に近づく。小さな肩が死骸のうずくまった地面のように血で濡れていた。
「斬られたのか！」
敲亥は羽織っていた布を裂く。小虎は目を覆い、ふたたび叫んだ。
「嘘だ――！」
街も空も雲もゆがむ。手足が凍えるほど冷える。
敲亥のてのひらを額にうけて、小虎の感覚がとぎれた。

参

目をあけた小虎は、敲亥たちがなにをいってもかたくなに口を閉ざすばかりで、起こったことはいっさい教えなかった。

教えないどころか、空腹かと問うても、眠たいかと問うても、目や手で示すだけである。赫が啼いてもひとことも発しない。喋れないのか喋らないのかわかりかねたが、公主の声が失われたことは四人を塞ぎこませた。とりわけ敲亥の悄然とした姿は義兄弟たちにむごさを感じさせるほどであった。

覇帥は死んだ。倒れたときに頭を強くうちつけたらしかった。そういっても小虎はだまっている。ひとつとして小虎のなかに入ってゆけない。

その状態のまま、洛陽へ踏みこんだ。

あらゆる人間、あらゆるものが手に入る街。しかしおもいのほか、混雑のない街である。ひろい路とそろった形の建築のせいであろう。

北には呂山をひかえた皇宮、そこから目ぬきの大路がでて、南へゆくほどいままでの街のような喧噪が見られる。それも品のよいざわめきで、囲まれても不快ではない。

小虎は敲亥の背にしがみつきながら、ゆるやかにあたりを見まわす。炎の消えた炭のごとき色の目はどんな珍しさをとらえても変わらなかった。

ふとしたはずみで喋りだすのではないかと待っていた敲亥と三人は暗さに勝てず、深く呼吸を足もとに溜めた。幾度となくくりかえしてきた挙止であった。

求めたのは、鄙から出てきた者が多く使う、大きな石づみの宿である。数十人ほども滞在しているので、敲亥たちがなかへくわわってもまったく目につかない。へやがたりないため、ひとつに五人が入ることになる。

その日のうちに、敲亥と亭珈、伯嗣が街にでた。残ったのは小虎と惟砕、することもなく暇をもてあまして鬱々と寝転がっていたが、昼餉のころになると惟砕はいった。

「食堂に、少し噂などさぐってまいる」

小虎はそれを見送ってから顔の布をとった。しばらくへやからでないのであるからかまわなかろう。

この宿では、どのへやにも木枠の嵌められた窓がある。冷える夜は石蓋を被せるそうで、寝台の陰には薄く四角い石板が備えつけられていた。

小虎は宿に入ると街を眺めるのが癖となっている。嘔気がするほど忌まわしい考えに支配されているときはなおさら、笑う人々やものの売買を見たかった。

じつをいうと、喉をひきしぼっているのが己なのか別のなにかなのか、小虎もわかってい

ない。ただ、いまの己にはなにもつたえられないことを悟っているだけである。

つたえられない、つたわらない、欠片さえも。

視線を路の右にあてた。くる人間と去る人間がある。垣をつくる人間とそれを壊す人間がある。頭ばかりがひしめくなかに、小虎はふと目を留める。

ひと垣のすみの、白い面。柔らかな線の眉と唇。黒い目。小虎を映す、わずかに水気をたたえた目。

——馬鹿な！

李貴妃巴陵が、そこにいた。動かずに小虎を見ている。

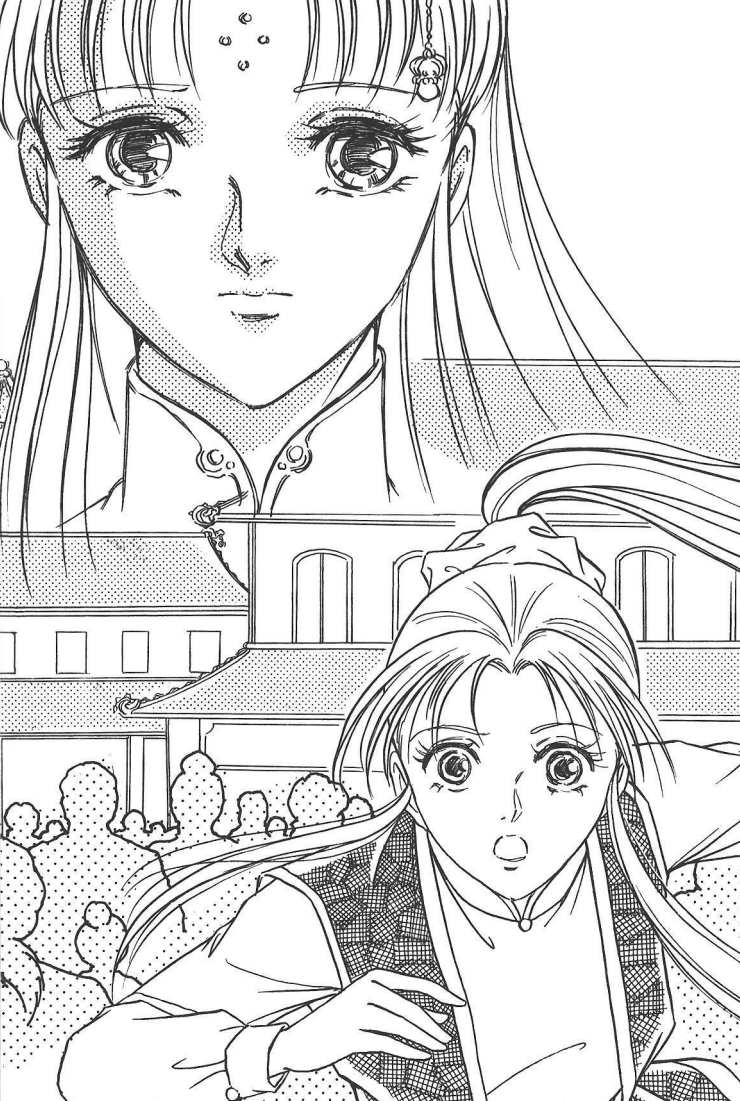
女虎に似たしなやかなからだがへやを飛びだした。食堂の横を走りぬけるとき、惟砕が小虎に気づきつづいてくる。

腕や胴を険しくかきわけて見おろしていた位置にようやく足を運んでも、もはや貴妃の姿は視界に入らなかった。

「いかがした」

惟砕にたずねられてただ首を弱くふる。呆然として宿に戻りかけ、左からきた人間にぶつかった。

濾賓よりもいくぶん若い、小ぎれいなみなりの女である。小虎が頭をさげようとすると、女の口から短い叫びが漏れた。



「李貴妃さま」

小虎は手をふって否定した。女は目を見はったまま動きだせない。惟砕が女に低くいった。

「ついてきていただく。無礼なことはいたさないとちかう」

そうして女の腕を取り、玄関に連れこんだ。小虎はどうにか宿の人間から紙と筆、墨を借りるとへやに女を入れる。いぶかる惟砕を追いだして、紙に文字をしたためた。

啞然と小虎を見ていた女は、文字を目にして少ないながらもことばを返していたが、つぎつぎに紙が使われてゆくにつれ、瞼がふるえ、手がわなないた。

一刻ほどへてから、小虎は白く血の気のひいた面を女に向け、礼をいうように伏せた。女は両手と額を床につけ帰ってゆく。

惟砕は女を宿からだすのもどかしくへやにくると、寝台にぶちまけられた紙を見つめた。小虎はだまって椅子にもたれ、外に視線をなげている。

なにを訊いてもむだと惟砕は察して、別の寝台にからだを横たえた。三人が戻るまでにはまだ間がある。わずかに眠ることぐらいはできるであろう。

やすらかな眠りではあるまいが。

敲亥の目についたのも紙であった。やや崩れた線の字が散らされている。小虎のものだと

わかって眺めるのをためらった。

伯嗣も亭珈も不審げにへやを見わたす。なにごとかたずねたくとも惟砕は眠りこんでいた。いかつい眉間に縦皺があって、目を覚まさせるのがしのびない。

小虎は三人をふりかえろうともしなかったが、敲亥が背を軽く叩くと少し笑い、紙の束を示した。

誰かきたのだとわかる。小虎が喋れないのであるから、惟砕に訊かねばしかたなかった。伯嗣が頭をゆすって起こし、水を与え、紙の山の理由を問う。

惟砕は首をふった。

「公主どのしかご存じでない」

敲亥が困惑して小虎を見ると、残りの紙に文を記していた。のぞきこんで文字を目で追う。

刺客のいったこと、李貴妃の侍女だった人間と路でゆき遭ったこと、噂が洛陽でどれほど知られているのかたずねたこと。

あの男は偽ってはいなかった。李妃の不貞をまるで事実であるかのように断定したのは、断定できるだけの量の人々の風評があったからである。

女は唇を嚙みしめていった。

『わたくしは、さようなことは嘘だと……公主さまのおちちうえは嵩帝陛下だと。巷の囁き

など、絶対にうけ入れませぬ』

小虎はそう聞いても安堵できなかった。大勢の口の端にのぼることが必ずしも事実ではない。しかしひとがそう考えるだけの、ひろめるだけの裏づけがある。

敲亥たちが街にでて得たものはその噂にほかならなかった。なにゆえふたりの姉や父がそのことをいわなかったか、それはみな理解している。

李貴妃にはたおやかなうつくしさと別に、人間を盲目にしてしまうなにかがあったのであろう。李妃を詳しく知る者は、誰ひとり疑ってもみない。天女が死んだのちはさらに天界の絹のごとき羽衣をかけて、負の感情からはいっさい隔てることになった。

「公主どのは風評を信じておられるのか」

小虎は惟砕を見た。是とも非ともいっていない。

忽然と街に溶けこんだ李貴妃の、あの深いまなざしは、わびているようにも、疑われたのがせつなげにも感じられた。小虎には李貴妃の過去を知る術がない。

――慧命帝に問うほかは。

声にならない呟きが膝にこぼれた。

貴妃のあらゆることのおもかげを、永劫に薄れぬほど灼きつけているのは慧命帝のみ。かつては董戒温と呼ばれた男の記憶のみである。

義兄弟たちも敲亥もそれをわかっていて、小虎を仰ぐことしかできなかった。

朱鷹が小虎の頬に頭をすりつける。壹魯の宿からずっと赫を連れこんでいることをだまってきたので、帝国にもまれである燃える毛なみの鳥は、布袋の中に閉じこめられざるをえなかった。そのせいでいくらか啼き声も弱々しい。

「慧命帝は譲位をといっている」

敲亥に小虎は頭をふった。敲亥はなおもいう。

「――皇帝がおまえの父にしろ父でないにしろ、譲位されることだけがすべてを平らかにする方法だ」

頭をふるのをやめない小虎の、夜の底までつづいていそうな双眸を敲亥が見る。

「慧命帝を殺しても、嵩帝陛下や李貴妃さまを弔ったことにはならない。おまえの血には帝国を治める責務がある」

小虎は椅子を蹴って床を踏み鳴らした。憤りの音がした。赫が驚愕して宙に飛びたつ。ちぎれる雲のように赫の羽が空に舞った。小虎が口をあけた。

ほとばしりでたのは無音の慟哭であった。

誰のためでもない、咆哮に似た慟哭であった。

小虎の姿が見えなくなったのはつぎの日の夕刻である。四人は顔色を失くして宿を飛びだしたが、それも闇の降りはじめた街に拒まれて不首尾に終わった。

夜半までには戻る旨をつたえた紙がへやにあり、小虎が攫われたわけではないと知っていたが、また刺客にでも襲われたら逃げられる可能性はないにひとしい。

傷を負ったままひとりで、赫もともなわず、このひろい街のどこへおもむいたのか。敲亥はなにもかもを消耗させてさまよったが、あきらめられぬうちにも義兄弟たちにさとされて宿にひきかえした。

小虎は暗くなってゆく洛陽の無数の建築を見るともなく目にしながら、廟にひそんで呼吸を殺していた。

よばれたようにここへきた。衛兵らしき者はいない。廟をおとずれる人間は少数ずつだが絶え間なかった。そのわずかな隙をぬって壇の陰にうずくまる。

あのゆめを待っていた。この日この夜の気がした。慧命帝が見たかった。

胸には剣を固くだいている。斬るか斬られるかわからない。わからないが剣に頼らなければふるえてしまうにちがいない。

いま、雲は厚く天を覆っている。けれどもその雲がひらけば銀の光が雨のごとくに皇宮を、洛陽の街をうつであろう。

しのびよる冷気に手足を冒されても、はるか遠くで大門の閉ざされる音がしても、小虎は廟からでなかった。慧命帝を待った。その沓音を、衣ずれを、嗚咽を。

ひたすら剣に瞼をおしあて、夜のふけるのを感じながら半刻もたったころ、風のすぎてゆ

く気配がした。月が面を見せつつあるのだろう、そっと顔を壇からのぞかせると、点々と光が石畳にゆれているのが視界に入る。

とつじょなにかが壁に触れる音が聞こえた。西から北へまわり、廟の中へ足を運ぶ。光を背にしているので、輪郭のほかは曖昧だった。それでも病かと察せられるほど痩せた男。

慧命帝である。

まとった衣は目だたない色で、菱形の模様が織りこまれているが、何度も使われたようになえている。皇帝らしからぬものだが、質素倹約を十六の歳のあいだつづけてきたことをうかがわせた。

かがんで香炉に火をつける。甘く匂う。慧命帝の手が香炉を壇にあげた。

石の床にひざまずく音がした。小虎は気づかれぬよう、ぬすみ見る。うなだれてまろくなった背中の線が目をそらしたいほど哀しげであった。

肩がゆれ、呼吸がとぎれる。こけた頬が見える。ゆがめられた眉も、細い鼻筋も見える。

慧命帝は嗚咽しているのではなかった。

――耐えているのだ。

悔いた面でもゆるしを乞う面でもない。耐えている。己を翻弄するなにものかに。

小虎は剣を強くにぎりしめた。

――これなら、斬れる。
容貌ほど脆くはない。斬るのを逡巡させるほど弱い人間ではない。
膝をたて、左手を鞘にかける。慧命帝が廟をでる。いまならまちがいなく首を刎ねることができる。
殺していた呼吸を解放すると嘆きのような音がした。
声がでた。
「慧命帝」
小虎は叫んだ。敵がふりむく。わずかにくぼんだ目を見はって、よばれた男はいった。
「――公主」
貴妃ではなく、公主と。
小虎は鞘を棄て刃を突きつけた。慧命帝は驚かず、むしろからだをまえへだした。
「慧命帝ではない。それは民や官吏がよぶものだ」
「わたしも崔の民にはちがいあるまい」
「公主だけが、わたしを董戒温とよべる人間だ」
暗い目が笑った。
「仇を討ちにきた」
小虎はいった。

「仇か。……そうだな。わたしは嵩帝を逐って、手をくだしはしないが李妃を殺した」
慧命帝の笑いは唇に浮かぶそばからはらはらと砕けて風に混じる。小虎は烈しい声で訊いた。
「噂をひろめたのは、おまえか。母が不貞を働いたとひろめたのは、おまえか！」
恫喝ではあったが小虎は脅えていた。肯じるのが見たかった。
慧命帝は首をふった。
「わたしではない。噂は誰からともなくひろまるものだ。――李妃さまにはすまないことをした」
「嘘なのか」
ゆめに見たあの玉座のように孤独な皇帝。目を細めて小虎を眺める。小虎のなかにうけつがれた、いにしえを。
「その髪もその目も、月のない夜に似て黒い。李妃さまの血だ」
賢帝と呼ばれ、崇められても埋められない淵にとらわれた男がいう。
「母に似ているといわれる。なにからなにまで」
「ちがう」
強くうち消されて小虎は男を見あげた。董戒温を。
「ちがう。もうひとつの血が公主をここへ来させ、喋らせ、わたしを問いつめさせている」

風が小虎の髪をなびかせた。あんなに重かった雲は空に吸いこまれて、曇りひとつない月が小虎と戒温を見ている。

「公主のゆくえがわからなくなってからいままで、気が気でなかった。李妃さまの赤児を手にしたかった」

沈黙が降りた。小虎は剣をさげない。

「わたしの娘子であるようにと祈ってきた。ひとめ見たいと。だが、ちがった。公主のなかのもうひとつの血は、嵩帝陛下のものでしかない」

残念だと、戒温はいった。

「母は、おまえと――」

小虎の呟きが光に溶けた。戒温が面を伏せる。

「李妃さまに咎はない。ゆめゆめ疑ってはならぬ」

「……父はそれを」

「ご存じだった。それでもわたしを罰しようとはなさらなかったが、わたしと李妃さまのあいだに死をよびこんだ」

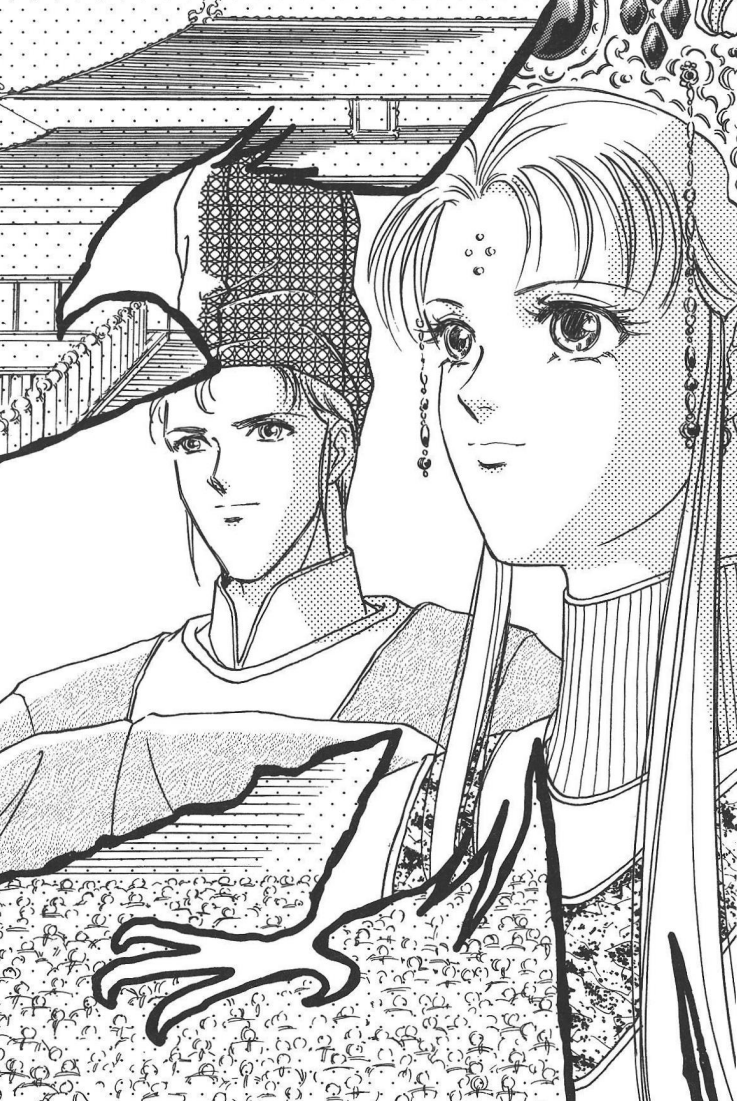
小虎を公主といい、貴妃とはいわなかった。なぜなら戒温は誰にも救えないほど孤独になっていた。

貴妃を失ったことを、斬り刻まれるように呻きながら知っていた。この世に貴妃を失った

ことを、わかりすぎるほどわかっていた。
まちがうはずがない。たとえ似ていても。
「わたしを討つのだろう」
戒温がいい、小虎を見すえた。
「いまにいたるまで、帝国を充分にととのえた。皇帝を惑わす輩も、民を虐げる官吏もおらぬ。ゆたかな崔を公主の手に渡すためにあらゆることを耐えてきたが、もはやその必要もない。討たれて死ぬのが天命だ」
小虎は剣を戒温の首のうえへとあげる。
斬れる。父ではない。李妃を慕い、小虎を慕い、いまここに役目を終えて笑う男は。
街にまぎれていた母はなにをいおうとしていたのであろうか。あるいはなにをいうつもりもなかったのであろうか。
斬れる。朗蓉が憎む男、濾賓が厭う男、父が裏ぎられた男。
小虎は剣を石畳に叩きつけると鞘で戒温の背をうった。そして鞘も床に棄てた。
「殺しても、……弔いにならない」
敲亥がいっていたことを呟く。
小虎は弔わねばならない。嵩帝竜基を、李貴妃巴陵を。
慧命帝竜朔を――董戒温を。

すべてを平らかにする方法がある。小虎は選ばねばならない。
「あらためてくる」
もはやどこにも嘘はなく、偽りの陰は見えなかった。
月が雲間に沈む。小虎は宿に戻った。

義兄弟たちは笑って小虎を迎えてくれた。
「やはりそれがしの目はたいしたものであったわけですな」
胸をはる伯嗣と逆に、亭珈が浮かない顔をする。
「しかし皇位にのぼられるお方だったとなると、かえって召しかかえていただくのは気がひけます」
「田舎武人を雇われたら公主どのに迷惑がかかる。どこぞの商人の家にでもつけていただければかまわないのだが」
敵亥はわずかに笑んで惟砕にいう。
「父が、ご仁たちを気に入ったと。こちらとしても頼りになることであろう。いかがか」
三人は口もとをほころばせながら承諾し、祝い酒を浴びに食堂へとおりてゆく。もう耳になれたその騒々しさとも離れてしまうのだと、小虎は目を閉じた。
冠を譲りうけたなどといったら、朗蓉や濾賓は怒るであろうか。洛陽へよんでもでてこ



ず、埜且の館に籠もってしまう気がした。

「公主」

呼ばれて小虎は敲亥を見た。

「小虎とよぶわけにもゆくまいな」

敲亥は笑った。

「公主は天の与えてくださったものを選ばれた。踏みはずすことなくゆかれると存ずる」

泣き喚くたび額にあてられたてのひら。無理なことも嘘もつたえない声。

険しい目。誰よりも、なにを犠牲にしても小虎を庇う目だと、亭珈はいった。

「つつがなく」

敲亥が小虎を見た。小虎が敲亥を見た。ときは凍て音が遠のいた。

「いやだ……！」

どちらが手をさしのべたか、それはわからない。

唇が髪を、額を覚えている。

瞼を、頬を、唇を。

戴冠の儀で、小虎は——彪玖は玉座に座り、慧命帝のささげた冠を手にとった。

そえられていたのは、濃桃色の房のついた剣である。竜の彫刻が蠟燭の炎に光る。彪玖が

目のみで笑うと、慧命帝も笑った。
百官が新帝の号を恭しく声にだす。
炯帝竜女。元号を竜叉と定めた。

儀の終わったつぎの日、慧命帝は皇宮のどこにもいなかった。
へやには膨大な量の政治に関する文献があった。
炯帝は追わなかった。追わずに仁政を施した。民は女帝の傍近くに珍しい鳥がひかえていることから、天女の娘子をこうよんだ。
朱鷹砂神風人。
華人と風人は、崔の歴史のなかの人間でほかに類を見ないほど百姓の尊崇をうけている。

（完）

あとがき

じつは受験生です。

全国の受験生のみなさん（は読んでないか）、がんばりましょう。この時期にワープロにむかっている人間もいるのです。

たいした考えもなく、本格的な受験期にさしかかるまえになにか記念碑的な長編を書いてみたいなと思ったのは、去年の夏でした。

わたしは計画をたてるのが不得意です。なにごとによらず無秩序無規則におしすすめて、あとで困ったりする場合も多いのですが、このときもそうでした。頭の中にひろがった曖昧な想像の世界をつづりはじめるにあたって、あらかじめ決まっていたのはファーストシーンぐらいのものです。

まず、映像にできるぐらいすみずみまではっきりした場面をひとつ、うかべてみる。そこ

から文章にしはじめて、ラストまでの残りは気のむくままキーボードを叩くというのがやりかたなのです。

なんとも大雑把というか、緻密でないというか、へたをすると取り返しのつかないボロをだしてしまう危険もあるのですが、わたしは「登場人物を計画どおり動かす」ことよりも、「登場人物にふらふらひっぱられる」ことのほうがたのしいのです。

負けおしみに聞こえますか。

もうひとつ、ガサツさのほかにわたしの性格を大きく占めているのは、根気がないという要素です。

それをよくわかっていたわたしは、「崔風華伝」をとにかく書きあげるために、ちいさなプレッシャーを背負うことを自らに課しました。つまり、できたところまでをとりあえず印刷して、友人たちに回覧したのです。

案外うけがよく、続きをせかされるのと、長編にすると宣言してしまった見栄とがあって、飽きっぽいわたしが二冊のノートにぎっしりのものがたりをどうにか文字にしおえることができそうな気配が見えました。そしてそれでノートはかたづけられるはずだったのです。

親しさゆえの、友人たちの手放しの賛辞がわたしのうぬぼれに火をつけました。応募してみたら、の声に乗ってしまったのです。

いざ応募するとなると、タイムリミットは驚くほど近くに迫っていました。ひたすら「完」にたどりつきたくて、でも時間はなかなかなくてという状態で締め切りの日を迎え、

「まにあわないよう」

と焦りながらも午後六時ごろ、厚く重い茶封筒をかかえ郵便局にとびこみました。

最終選考に残ったこと、さらに佳作にしていただいたことは今でもゆめのようです。運を感じます。ツイてたなあと思うのとおなじくらい強く、ビギナーズラックと言われてなるかと思います。

読書の魅力のひとつである「日常忘却」を、それもこころをゆさぶる最高級のかたちで提供できたらなあと、問題集を解くかたわらぼんやりしたりしているわたしです。

天までとどく尽きない感謝を、どうかうけとってください。

「ささげる」という序文にあこがれてきました。今こそそのことばを使うときなのです。

わたしをおだててくれたクラスメイトたちに、
受賞をよろこんでくれたひとたちに、
賞をさずけてくださったみなさまに、
出版のために骨をおってくださったみなさまに、
わたしの知っているすべての愛すべきひとたちに。
そして、
わたしを知ってくれたすべての愛すべきひとたちに、
このものがたりをささげます。

一九九四年十一月

長谷川朋呼（はせがわともこ）　拝

エンタテインメント小説部門 大賞発表!!

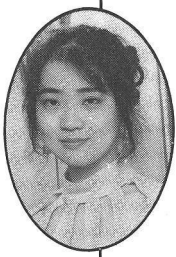
第1回エンタテインメント小説部門('94年3月末締め切り)には、455編の応募がありました。審査を重ね、左記最終候補作品5編の中から、7月21日、川又千秋、ひかわ玲子、夢枕獏先生の厳正な選考の結果、次のように決定いたしました。

●選考委員
川又千秋／ひかわ玲子／夢枕 獏

大賞 賞状ならびに副賞100万円
および応募作出版の際の印税

赤い髪のガッシュ

飛沢磨利子(広島県・25歳)



◆受賞のことば　大賞受賞のお電話をいただいて、私は完全に舞い上がってしまいました。嬉しくて嬉しくて。小説を書くことをあきらめないで、自分を信じていて本当によかったと思います。選考委員の先生方、編集者の皆様方、ありがとうございます。

最終候補作品

崔風華伝	長谷川朋呼
かざん	松岡佐紀
竜の涙	神崎 純
天下に比類なき食欲を誘る僕の物語	彩院 忍
赤い髪のガッシュ	飛沢磨利子

第1回 ホワイトハート

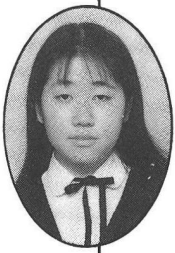
佳作

賞状ならびに副賞50万円

崔風華伝

長谷川朋呼（神奈川県・17歳）

◆受賞のことば　まさにひょうたんから駒。計画性のなさのあまり、締め切りの日の午後6時まで書き、郵便局に滑りこんで応募した作品が、思いがけず佳作の評をいただいてしまい、恐縮することしきりです。どうもありがとうございました。



期待賞

賞状ならびに副賞10万円

天下に比類なき食欲を誇る僕の物語

彩院　忍（埼玉県・20歳）

◆受賞のことば　恐縮です。チャイコフスキーの交響曲第6番『悲愴』第3楽章をBGMに、地球の自転周期も無視して書いた労も報われました。ついては家族と最初の読者である岡田組の皆様と、私を知る全ての人々に感謝を捧げます。

☆ホワイトハート大賞は、ひきつづき、優秀な才能を求めて原稿募集中です。応募の方法は、ホワイトハート新刊の巻末をごらんください。
（賞金はすべて税込みです。）

☆第1回ホワイトハート大賞　エンタテインメント小説部門　大賞受賞作の『赤い髪のカッシュ』は、'94年12月24日発売の、佳作受賞作の『崔風華伝』は、'95年2月3日発売のホワイトハート新刊として刊行されます。

選評

●ひかわ玲子先生

『赤い髪のガッシュ』の飛沢さんは、筆力・構成力、ともにプロ作家として十分にやっていけるレベルにあると感じた。なにより、ファンタジーを書きたい、という意気込みが感じられ、逆にファンタジーを知りすぎているせいか、新鮮さという意味では新人らしさに欠けたが、伸び伸びと書けば新しいものは幾らでも出てくるのでは、という可能性も感じたので、大賞に推した。『崔風華伝』は、17歳でこれだけ書けているというのに驚いた。が、文章力と雰囲気を伝える力は買うが、人物の描き方は曖昧で頼りない。もっと心の芯を熱くした人物造型を書ければ申し分ないし、そういうものを書ける可能性はあると思う。『天下に比類なき食欲を誇る僕の物語』はノリのあるキャラクターに他に無い可能性を感じ、期待賞に推した。『かざん』は全体に描写力不足。個々のシーンにもっと執着して書く必要がある。『竜の涙』は世界観そのものは悪くなかったが、主人公を少年にした無理がラストに一気に来たのが惜しいと思う。

●川又千秋先生

最終選考に残った5編は、それぞれに個性的な作品揃いで、評者としては次に何が現れるか分からぬ楽しさを味わうことができた。『かざん』は巧みな導入で期待させたが、中盤以降、物語をコントロールしきれなくなったのが残念だ。『竜の涙』は、異世界モノの常道を捻ってみせた設定は面白かったが、世界観が今ひとつ説得力に欠けた。続く『崔風華伝』は、5編中、密度の点では第一位というべき力作だった。ただ、小説作法的に難点がないわけではなく、また、筆者の年齢から考えて、まだまだ伸びる才能の持ち主であろうと思われることから佳作とされたものである。

『天下に比類なき食欲を誇る僕の物語』は、タイトルからも分かるとおりのエキセントリックな作品だが、持ち味を支えるべき観念性が稀薄で、今ひとつ読者をハイにできなかった。しかし、こうした小説的冒険は大歓迎であり、激励の意味から期待賞と決まった。大賞の『赤い髪のガッシュ』は、切り口、世界観に新味はないものの、全体に過不足ない完成度の高さで大方の支持を集めた。次作では、プロとして、この過不足のなさからの脱却に期待したい。

●夢枕 獏先生

『かざん』――小野篁がかざんを連れに来るのが、何故、この時機であったのか。長く生きすぎたのが理由なら500年前でもいいでしょう。偶然にたよる要素が少し多すぎる気がします。1000年生きてしまう人間という設定はよいとしても、地獄の閻魔大王という存在まで出してしまうのは、ゆきすぎでしょう。始まり方はおもしろいと思いました。『竜の涙』――異世界がそのまま現代の日本という設定なら、人の名前もそうすべきでした。こういうやり方は、すでに小説や漫画でやり尽くされているので、やるのなら独自の視点、しっかりとした異世界構築が、もっと必要でしょう。『崔風華伝』――前半までで充分完結しているではありませんか。後半はいりません。入れるのなら、前半にもう少ししかけを入れておくほうがいいでしょう。文章が上手なのには驚きました。長さ、ホワイトハート大賞むきかどうかなど、すべての枠を取りはらってみた場合、この前半部分のみということなら、ぼくはこの作品が一押しでした。『天下に比類なき食欲を誇る僕の物語』――どこにも分類できない個性ということでは、一番。しかし、その個性のみであるという言い方もできてしまいます。〝食欲〟が、この話のメインストーリーともっとうまくからみあうように話を創るほうがよいでしょう。『赤い髪のガッシュ』――強い個性こそありませんが、マイナス点は、今回一番少ない話でした。それなりにそつなくまとまっていると思います。

長谷川朋呼先生の『崔風華伝』、いかがでしたか？
長谷川朋呼先生、イラストの道下有希子先生への、みなさんのお便りをお待ちしております。
長谷川朋呼先生へのファンレターのあて先／
〒162-91　東京都牛込郵便局　私書箱48号　講談社「長谷川朋呼先生」係
道下有希子先生へのファンレターのあて先／
〒162-91　東京都牛込郵便局　私書箱48号　講談社「道下有希子先生」係

長谷川朋呼（はせがわ・ともこ）
1976年8月25日生まれ。おとめ座のA型。東京生まれ、でも生後1か月だけ。静岡・熱海育ち。桐蔭学園高等部3年。高2まで続けた新幹線通学をやめ、寮住まいで受験に備えています。好きなもの／映画・読書・海。特技／いつまででも寝ていられること。
17歳の記念にと応募した『崔風華伝』は、第1回ホワイトハート大賞《エンタテインメント小説部門》佳作受賞作です。

講談社X文庫

white heart

崔風華伝
（さいふうかでん）

長谷川朋呼
（はせがわともこ）

●

1995年2月5日　第1刷発行

定価はカバーに表示してあります。
発行者――野間佐和子
発行所――株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01
電話 編集部 03-5395-3507
販売部 03-5395-3626
製作部 03-5395-3615
本文印刷―豊国印刷株式会社
製本――株式会社若林製本工場
カバー印刷―双美印刷株式会社
デザイン―山口　馨
©長谷川朋呼　1995　Printed in Japan
本書の無断複写（コピー）は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にてお取り替えします。なお、この本についてのお問い合わせは文芸局文芸図書第四出版部あてにお願いいたします。

ISBN4-06-255195-0　（文4）

第2回
ホワイトハート大賞
〈エンタテインメント小説部門〉
募集中!

ファンタジー、伝奇、SF……
新しい作家が新しい物語を生み出している
活力あふれる部門!
大賞受賞作は
ホワイトハートの一冊として出版します

〈賞〉

大賞 賞状ならびに副賞100万円
および、応募原稿出版の際の印税

佳作 賞状ならびに副賞50万円

(賞金は税込みです)

〈選考委員〉

川又千秋
ひかわ玲子
夢枕獏

(アイウエオ順)

〈応募の方法〉

○資　格　プロ・アマを問いません。
○内　容　ホワイトハートの読者を対象とした、広い意味でのファンタジー小説、伝奇小説、SF小説で、未発表のもの。
○枚　数　400字詰め原稿用紙で250枚以上、300枚以内。たて書きのこと。ワープロ原稿は、20字×20行、ワープロ用紙で結構です。
○締め切り　1995年5月31日（当日消印有効）
○発　表　1995年12月22日発売予定のX文庫ホワイトハート1月新刊全冊ほか。
○あて先　〒112-01　東京都文京区音羽2-12-21　講談社文芸図書第四出版部　ホワイトハート大賞係
○なお、原稿の1枚めにタイトル、タイトルのわきに、部門（エンタテインメント小説部門）、住所、氏名、ペンネーム、年齢、職業（在校名、筆歴など）、電話番号を明記し、2枚め以降に400字詰め原稿用紙で3枚内外のあらすじをつけてください。
　原稿は、かならず、通しのナンバーを入れ、右上をとじるようにお願いいたします。
　また、二作以上応募する場合は、一作ずつ別の封筒に入れてお送りください。
○応募作品は、返却いたしませんので、必要なかたは、コピーをとってからご応募ねがいます。選考についての問い合わせには、応じられません。
○入選作の出版権、映像化権、その他いっさいの権利は、本社が優先権を持ちます。

第3回
ホワイトハート大賞
〈恋愛・青春小説部門〉
募集中!

新しい作家の誕生が待たれる
恋愛・青春小説部門!
大賞受賞作は
ホワイトハートの一冊として出版します
あなたの作品をお待ちしています

〈賞〉

大賞
賞状ならびに副賞100万円
および、応募原稿出版の際の印税

佳作
賞状ならびに副賞50万円

(賞金は税込みです)

〈選考委員〉
内館牧子
秋元　康



〈応募の方法〉

○資　格　プロ・アマを問いません。

○内　容　ホワイトハートの読者を対象とした、広い意味での恋愛小説・青春小説で、未発表のもの。

○枚　数　400字詰め原稿用紙で200枚以上、250枚以内。たて書きのこと。ワープロ原稿は、20字×20行、ワープロ用紙で結構です。

○締め切り　1995年5月31日（当日消印有効）

○発　表　1995年12月22日発売予定のX文庫ホワイトハート10月新刊全冊ほか。

○あて先　〒112-01　東京都文京区音羽2-12-21　講談社文芸図書第四出版部　ホワイトハート大賞係

○なお、原稿の1枚めにタイトル、タイトルのわきに、部門（恋愛・青春小説部門）、住所、氏名、ペンネーム、年齢、職業（在校名、筆歴など）、電話番号を明記し、2枚め以降に400字詰め原稿用紙で3枚内外のあらすじをつけてください。

原稿は、かならず、通しのナンバーを入れ、右上をとじるようお願いいたします。

また、二作以上応募する場合は、一作ずつ別の封筒に入れてお送りください。

○応募作品は、返却いたしませんので、必要なかたは、コピーをとってから、応募願います。選考についての問い合わせには、応じられません。

○入選作の出版権、映像化権、その他いっさいの著作権は、本社が優先権を持ちます。

ホワイトハート最新刊

定価450円

砂の月光

北村 秋 ●デザイン／辰巳四郎

殺人犯にされた姉の無実を晴らすため、妹は…!?

定価480円

凍えた闇 霊感探偵倶楽部

新田一実 ●イラスト／笠井あゆみ

竜憲に腹ちがいの姉がいた!?　女の正体は？

定価450円

崔風華伝（さいふうかでん）

長谷川朋呼 ●イラスト／道下有希子

第1回ホワイトハート大賞《佳作》受賞作！

※定価は税込みです。

ホワイトハート・来月の予定

海をわたるトンボ…… たけうちりうと

熱砂の城壁……流 星香

※予定の作家、書名は変更になる場合があります。

9784062551953

ISBN4-06-255195-0

C0193 P450E (0)

1910193004503

講談社X文庫

定価450円(本体437円)

